

高齢者の回想と適応に関する研究

長田 由紀子 長田 久雄
(聖徳大学短期大学部) (東京都立医療技術短期大学)

本研究の目的は、高齢者の回想の特徴および回想と適応との関係を若年者と比較し、老年期における回想の意味を検討することである。われわれは、日常生活において自然に起こる回想の量を測定するために、8項目からなる回想尺度を作成し、質問紙を用いて個人の回想の量の測定を行なった。対象者は18~24歳の132名(学生群)、40~64歳の97名(壮年群)、65~95歳の133名(老年群)であった。回想の量について3群の差を検討した結果、他の2群に比べて学生群の回想の量が多いことが示された。老年群でよく回想をする者は現在満足度が低く、死について意識することが強く、死の不安が強い傾向が示されたが、回想に対して「気分転換」や「重荷から解放される」という効果を感じていた。結果から、青年期における回想は自我同一性の確立を反映している可能性が示唆された。また、老年期において回想を行なうことが、死を意識することと関係があることが示された。老年期における回想の高頻度と、満足度の低さとの間に関係が示されたが、この結果は、回想による人生の統合が失敗に至ったことを示唆するとともに、不適応状態への対処として回想が用いられる可能性を示唆するものであった。

【キー・ワード】老年期, 回想, 人生回顧, 適応, 死

問 題

昔を思い出すという行為は、老年人にみられる一般的傾向と思われているが、これは、老人は過去に生きる傾向にあると信じられているためであろう。たとえば荒井・常木(1980)は、老人の人格特徴に関してよく引用される、Cavanが述べた15の特徴を紹介しているが、その中には加齢による変化の一つとして「過去に生きようとする」傾向があげられている。長嶋(1977)は、老人に比較的あらわれやすい性格傾向として「愚痴」をとりあげ、それを現実認知や自己認知が的確に行われず過去の生活に注意が注がれているためと説明している。さらに、加齢とともに記憶力が低下する現象も、過去を思い出す傾向が老年期の特徴として受け入れられてきた背景にある。

一方、老年期に過去を振り返ることが、自我機能にとって重要な意味を持つという、回想の積極的な意義も示されてきている。Eriksonは、人生の最終段階の発達課題として「統合対絶望」を示したが(Erikson, 1977)、統合と絶望の感覚のバランスをとる過程は、人生を再吟味しうまく折り合いをつける行程を含むと述べた(Erikson, Erikson, & Kivnick, 1990)。またButler(1963)は、過去の経験に関する意識を自然な形で掘り起こしてゆく精神的プロセスである人生回顧(life review)は、死に近づいていることを意識することから起こる、自然なプロセスであると報告した。このプロセスは老年期に限らずすべての年代において起こるが、死により近接した時期を生きる高齢者では、一般的に見受けられると説明してい

る。そして、人生回顧には死を控えて未解決の葛藤を解決し統合に導いたり、自己への新たな気づきを増しパーソナリティの再構築に影響を与えるだけでなく、「よき昔」の幻影を持つことによって危機的な現実から逃避する、ある種の適応に導く働きがあることを指摘した。このような過去に対する建設的な再評価は、死の恐れや不安をやわらげ死の受容を促進させるが、一方で人生回顧が精神病理学の問題と関わる可能性も示唆されている。すなわち回想の結果、深刻なうつや混乱、罪悪感、それに関連する強迫的な回想を引き起こすこともある。こうした問題を認めながらもButlerは、高齢者の臨床場面において人生回顧を利用することの重要性を強調し、回想のさまざまな機能についての可能性を示唆し、今日の回想研究に影響を与えた。

Butlerが、老年期における回想が重要な意味を持つことを示唆して以来約30年の間に、欧米を中心に回想の研究が進められてきた。回想には、その内容や機能的特徴からいくつかの種類があると考えられている。McMahon, & Rhudick(1967)は彼らの研究の中で、面接から引き出された4種類の回想のタイプ; 輝かしい過去を思い起こし現在の自尊感情を高める回想・死期を意識することで誰にでも自然に起こる回想・情報伝達を目的とした回想・うつの回想; について記述している。またColeman(1974)は面接において語られた回想内容を、単に過去について語った回想・人生の正当化や再統合の意味をもった回想・情報伝達や教育的機能を持つ回想の3種類に分けて分析している。LoGerfo(1980)は回想の分類を試みる中で、

情報伝達的 (informative)・評価的 (evaluative)・強迫的 (obsessive) の3種類の回想をあげた。すなわち、回想にはその機能や特徴により少なくとも①現在を否定し過去を美化し、過去の偉業を思い起こすことによって自尊感情を維持しようとする回想、②話し相手を意識した情報伝達的な回想、③人生の意義を考え自己統合を促すような自己の再検討を行なう回想、④やり残したことや失敗をくよくよと考えるうつ的な回想、⑤単に昔のことを思い出すといった、“Simple Reminiscence”と呼ばれる回想などの種類があると考えられる。

日本における高齢者の回想研究は、事例研究として青井 (1978) が高齢者聴取り調査の分析を行なっており、回想内容の特徴を男女別に比較した報告がある。しかし回想そのものに焦点を当て、回想の実態や機能を明らかにしようとした実証的な研究はほとんど行なわれていない。たとえば、一般的に「年をとると昔のことをよく考えるようになる」ということがいわれるが、このことも事実として確認されているわけではない。そこで本研究では、第一に、わが国の高齢者の回想の実態を若年者の回想との比較を通して把握し、第二に回想が老年期の適応にどのように関係するかを検討することを目的とした。

第一の目的である回想の実態を把握するためには、個人の回想を質と量との両側面から調査する必要があると思われる。本研究ではまず、個人が普段の生活の中でどの程度回想を行なっているか、回想の量の測定に焦点を当てた。回想の量に関しては、例えば過去についての言及や記述が、現在・未来に比べてどの程度の割合を占めるかを客観的に分析し、個人の回想傾向を知ろうとする方法がある。しかしながら、そのようにして得られる回想は、語る事が可能な限定されるものとなる。我々は予備研究において、言葉によって表出される回想は個人が行なう回想全体の中のごく一部であり、聞き手や人間関係の有無に左右されるという結果を得た (長田・長田・井上, 1989a)。高齢者における回想の意味を調べるためには、むしろ普段の生活の中で、自由な回想がどの程度行なわれているかを問題にする必要があると考えられる。自然に起こる回想の中には、個人的な思い出で表出することに抵抗を感じる内容の回想も含まれるであろう。表出されない回想は、観察や実験では測定できないが、回想をする本人にとっては重要な意味を持つことも予想される。そこで本研究では、被験者の自己報告により回想行動を測定することにした。したがって回想の種類を明確に把握することは本研究の目的とはしていないが、回想を多くしている者の背景を知ることによって、そうした回想の特徴を検討することは可能であると思われる。以上から、普段の生活の中で聞き手を意識しないで起こる自発的な回想の量を測定し、結果を性別・世代別に検討する。

本研究の第二の目的は、回想と適応との関係についての検討を行なうことにある。Butler以来現在に至るまで、老年期における回想と精神諸機能との関係を明らかにしようとした研究が行なわれてきている。まず、回想をすることは記憶をはじめとする知的機能を活性化させ、記憶機能の低下を防ぐことにつながるのではないかという仮説に基づき、回想と知能・認知機能との関係を検討する研究が行なわれてきた。これまでのところ、認知機能の向上に回想が関係することを支持した報告 (Hughston & Merriam, 1982)、回想と知能・認知機能の間に有意な関係を見いださなかった報告 (McMahon & Rhudick, 1967) があり、両者の間の関係に関する一致した結論は得られていない。

最近では、回想と適応との関係を検討した研究が多い。回想が老年期の幸福感や適応に関係していることを支持する報告としては、Haight (1988) の研究があげられる。Haight (1988) は被験者を、回想を行なう群、統制群として回想を行わず単に訪問のみを受ける群、なにも接触を行なわない群に分け、8週間にわたるセッションの前後の満足度、うつ、日常生活活動能力 (ADL) の変化を調べた。セッション前後のテスト間の比較を行なった結果、回想群のみに適応を示す2尺度 (生活満足度尺度 A (LSIA) およびアフェクトバランススケール) に関して有意な差が示されたことから、回想が適応を高めることに効果があることを示唆した。また、Boylin, Gordon, & Nehrke (1976) は Erikson の理論に基づく自己統合の測定尺度を作成し、回想との関係を検討した結果、回想頻度と自己統合との間に正の相関関係を見いだしている。しかしながら、現在の満足度や適応と回想との関係を認めなかった研究結果も少なくない (Lieberman, & Falk, 1971; Coleman, 1974; Perrota, & Meacham, 1981; Brennan, & Steinberg, 1984)。

また、回想と過去の満足度との関係については、Coleman (1974) は、現在の満足度と回想との間に有意な関係を見いださなかったが、過去満足度の要因を加えて検討した結果、過去の満足度が低く回想傾向が高い人は現在の満足度が高いという結果を得て、「過去の満足度が低く回想傾向が高い人は、回想をする事により過去の葛藤を解決し、自己を再統合し、結果として現在に適応するようになる」と説明した。一方 Brennan, & Steinberg (1984) は、回想の量と過去満足度との間に負の相関関係を見いだした。

回想と死との関係に関する研究では、McMahon, & Rhudick (1967) はうつ傾向が高いグループは回想をする傾向が少ないという傾向を見だし、追試において、うつの高さがその後の死亡率の高さと関係があるという結果を得た。Lieberman, & Falk (1971) は、回想と死の距離との関係については結果として疑問を残したままであ

るが、Georgemiller, & Maloney (1984) は、7回にわたる人生回顧ワークショップ（自叙伝の意義や方法の講義を受けた後、各自がテーマに添って自叙伝を執筆しグループで話し合いを行なう）を行なった結果、回想群は統制群に比べて死の不安が低下した結果を報告している。これら先行研究が必ずしも一致した結論に至っていないのは、対象としている回想そのものの種類や研究方法が、研究者間で違うためであることが指摘されている。(Merriam, 1980; Romaniuk, 1981; Molinari, & Reichlin, 1985)。また用いられている諸要因が研究により違うこと、対象となる回想の種類が、研究の方法により微妙に異なることも指摘されよう。

本研究では、適応指標として、先行研究の中でしばしば利用されてきた満足度を用いるが、過去・現在・未来に対する満足度としてそれぞれ過去の満足度、現在満足度、未来展望を適応の指標とする。さらに老年期の適応にとって重要な、死に対する態度や意識、主観的健康観も適応指標の一つとして加えることにした。以上から、回想の量と適応との関係を分析することを通して、高齢者の回想の意味について検討を行なうが、発達における回想の意味をより明らかにするために、各被験者が回想に対してどのような効果を感じているかについての結果も、同時に検討する。たとえば Butler (1963) が示唆するように、回想をすることが死への不安をやわらげ適応状態を増すという効果をもつのであれば、回想をよく行なう者は、死を意識したことでおこる混乱やうつをやわらげるような効果を回想に感じていることが予想される。こうした回想の効果に対する評価の結果も分析に加え、高齢者の回想の実態と機能の特徴について考察する。

方 法

対象者

本調査の対象者は、Table 1に示したとおりである。60歳未満の対象者は、首都圏の大学・短大および専門学校の学生とその家族である。学生には講義時間中に質問紙を配布し、一週間後の講義時に回収した。学生の家族には学生を通して依頼し、調査票は返信用封筒を添付し郵送により回収した。以上の回答は、すべて無記名、回答者の自己記入により行なわれた。

60～95歳の対象者は155名であったが、80名は在宅、75名は老人ホームに居住する男女である。在宅、老人ホー

Table 1 対象者の構成

対象群	人 数			年齢範囲・平均(S.D.)	
	男性	女性	計		
学生群	38	94	132	18～24	19.5(1.21)
壮年群	49	48	97	40～64	52.9(6.71)
老年群	57	76	133	65～95	77.1(7.36)

ムとも、60歳以上の対象者は年齢、男女の数に偏りがみられないように選ばれた。60歳以上の対象者に対しては、原則として面接調査を行なった。在宅の対象者については、都内2区の8地域より無作為抽出を行ない、まず郵送により調査を依頼した。返信はがきにより承諾の返事が得られた者へののみ、個別訪問調査を行なった。自宅で面接をする事が不可能な場合は、郵送あるいは面接場所を設けて面接を行なった。老人ホーム居住者については、各ホームを通して調査を依頼し、ホーム内で個別に面接を行なった。最終的に、特別養護老人ホーム1(18名)、養護老人ホーム2(21名)、軽費老人ホーム2(A型1, B型1)(36名)の計5ホームから協力を得た。対象者の中には身体面の機能低下が著しい者も含まれていたが、病的な記憶力喪失状態の者は含まれないよう配慮をし、1時間あまりの面接に矛盾や異常なく答えた対象者の結果のみを分析の対象とした。

分析に際しては、被験者を学生群・壮年群・老年群の3群に分けた。学生群の年齢範囲は18歳から24歳であった。また、壮年群は社会において一応安定した時期と思われる40～64歳とし、高齢化社会の指標とされるなど一般的に社会で老年期と認められる65歳以上を老年群とした。

以上の調査は、平成元年8月から平成2年3月にかけて行なわれた。

回想の量の測定

本研究では、他者を意識せず自然に起こる回想の量を測定するため、調査は質問紙を用いた自己報告の形式で行なった。質問紙により回想体験を測定しようとした研究には Havighurst, & Glasser (1972) の研究がある。しかし、彼らの質問項目は、回想の量的側面と質的側面の両方を含んでおり、回想の量のみを測定するためには十分とはいえない。そこで、本研究では、回想の量を測定する質問項目を新たに設けた。

回想の量を測定する項目は、高齢者がどのようなときに昔を思い出すかについて検討した長田・長田・井上(1989a)

Table 2 回想尺度を構成する質問項目

項 目	項目-全体相関	負荷量 ^a
1 ひとりであるとき	.717	.665
2 寂しさを感じたとき	.663	.595
3 暇なとき	.662	.590
4 何かで悩んでいるとき	.618	.530
5 寝るときや眠れないとき	.508	.390
6 心が静かで落ちついているとき	.503	.393
7 体の具合が悪いとき	.494	.368
8 腹が立ったり嫌な思いをしたとき	.488	.360

$\alpha^b = .846$ 寄与率^c = 48.6%

注. ^a 8項目を1因子とした場合の各項目の負荷量

^b 内的整合性を示す Cronback の α 係数

^c 8項目全体の累積寄与率

Table 3 回想得点と他の回想に関する質問項目との相関

質問項目	回答の水準	r
1 思い出にふけっていると、時間があっという間に過ぎてしまう と思うことがありますか	4	.557
2 過去の思い出したくないことをいつのまにか思い出してしまい、 それが頭から離れないで困ると感じることはありませんか	4	.510
3 「昔のことが走馬燈のように浮かんでくる」ということがあります ますか	4	.475
4 辛かったことや苦しかったこと、悲しかったことなどをどのく らい思い出しますか	4	.462
5 楽しかったことや嬉しかったことなどを、どのくらい思い出 しますか	4	.368
6 昔のことをよく考えますか	5	.349
7 アルバムや思い出の品をながめたりすることがありますか	4	.318
8 2週間を振り返って、あなたはご自分の思い出をどのくらい人 に話したと思いますか	4	.272
9 過去を思い出すことは増えましたか減りましたか	3	.252
10 過去を考えることは好きですか	3	.231

注. ピアソンの相関係数。すべて $p < .01$ で有意。

の研究をもとにして設定した。高齢者が過去を思いだしやすい状況としては、過去に関係したものを見聞きしたとき、考える時間があつたり寝るときなど、回想をしやすい状況にいるとき、不快なときや健康を害したときなど、回想を求める個人の内的な欲求が高まったときに大別される。その結果から、誰もが共通して体験する状況で、意図的な回想や伝承を目的とした回想ではない「自然におこる回想」が起こりやすい9場面を選んだ。場面選択の際には、過去に関係したものを見聞きしたときのような、場面自体が直接の誘引となって回想を引き起こす場合は、場面の体験頻度自体が強く回想の量に関係すると思われるためこれを除いた。各質問項目に対し、「よく考える」「ときどき考える」「あまり考えない」「考えない」の4件法を用いて判断を求めた。結果はすべてZ得点に変換して用いた。

研究の分析を行なう前に、われわれが作成した回想の量を測定する尺度の信頼性および妥当性の検討を行なった。用意した9項目から他項目との相関の低い1項目を除き、8項目とした。8項目を通しての内的整合性を示すCronbackの α 係数は.846であり、各項目と尺度全体の相関は、.488～.717であった。さらに、8項目を一因子とした場合の各項目の負荷量はTable 2に示したとおりであり、累積寄与率は、48.6%であった。8項目の各Z得点を合計して得られた得点（以下、回想得点とする）は高得点ほど回想を頻繁に行なう・回想の量が多いことを示しており、学生群の平均は2.90点（S.D.=4.79）、壮年群の平均は-1.84点（S.D.=5.06）、老年群の平均は-1.25点（S.D.=5.58）であった。次に尺度項目の妥当性を検討するために、Havighurst, & Glasser (1972) の用いた質問項目を参考にして設定した回想傾向を示す質問項目と、回想得点との関係をみたところ、Table 3 に示すとお

り.231～.557の範囲で、すべての項目との間に有意な相関関係が見られた。以上の結果から、8項目を一次元の尺度として使用することが可能であることが示され、また8項目の合計点は、他の回想行動に関する質問との相関も高く、本尺度が回想の量を測定する尺度として適当であると判断された。

関連する質問項目

適応の指標 ①過去満足度：過去満足度に関しては、高齢者の満足度尺度を検討した古谷野（1984）の報告を参考に、生活満足度A（Neugarten, Havighurst, & Tobin, 1961）およびカットナー・モラール・スケール（古谷野, 1984）から過去の満足度に関する質問を6項目用いた。それらは、以下のとおりである：1. 今までの人生の中で、あの時こうすれば良かった、と思うようなことがありますか。2. あなたの人生は、やり方によっては今よりもずっと幸福になれたはずだと思いますか。3. もし過去を変えることができたなら、変えたいと思いますか。4. あなたは、これまでの人生で、望んでいた大切なものをほとんど手にいれそこなったと思いますか。5. これまでの人生で、あなたは、求めていたほとんどを実現できたと思いますか。6. あなたの人生を振り返ってみて、満足できますか。：得点の範囲は0～6点で、高得点は過去の満足度が高いことを示す。

②現在の満足度：現在の満足度を示す指標としては、Lawton (1975) による改訂版PGCモラールスケールの17項目を使用した¹⁾。：得点の範囲は0～17点で、高得点は現在の満足度が高いことを示す。

③未来展望：未来展望については、落合（1981）の将来の展望の明暗を測定する項目をもとに、4つの質問項目を設定した。それらは以下の4項目である：1. これからのあなたの生活は、一般的にみて明るいと思いますか。

2. あなたのこれからの生活は、一般的に充実していると思いますか。3. あなたはこれからの目標を持っていますか。4. あなたは、あなた自身の将来に対して不安がありますか。：得点の範囲は4～20点で、高得点は未来展望が広く将来に希望を持つ傾向を示す。

④死の意識：死の意識に関しては、長田・長田・井上(1989b)の結果をもとに、単に死について考えたり身近に感じるものの程度(以下「死の意識」とする)と、死に対する不安(以下「死の不安」とする)の二つの面から検討を行なった。死の意識を測定する質問項目は以下の6項目である：1. 最近、死について考えることはありますか。2. 自分の死について考えたことはありますか。3. 「死」を身近に意識することはありますか。4. 死について、誰かと話すことはありますか。5. 最近、死について考えることは増えましたか、それとも減りましたか。6. 死について、誰かと話したいと思うことはありますか。：得点範囲は6～24点で、高得点は死を身近に意識し死について考えることが多い傾向を示す。

⑤死の不安：死の不安に関する質問項目は、以下の3項目である：1. 死について考えたり人が話しているのを聞くと、憂うつな気分になりますか。2. 死とは、恐ろしいものだと思いますか。3. 死を考えるあまり、恐ろしくて眠れなくなることがありますか。：得点範囲は3～14点で、高得点は死の不安が高いことを示す。

⑥健康度：健康度に関しては、佐藤・長田・矢富・井上・林(1987)によって高齢者を対象に作成された、以下の8項目による尺度を使用した：1. 食事はおいしく食べられますか。2. よく眠れますか。3. 疲れやすいですか。4. 夜中にトイレのために起きることがありますか。5. 体の中でどこか痛むところがありますか。6. 駅の階段を急いでのぼれますか。7. 途中休まずに一時間歩き続ける自信がありますか。8. 現在、ご自分の健康をどう思われますか。：得点範囲は22～49点で、高得点は自覚する健康度が高いことを示す。

回想の効果に対する評価 回想の効果に関する質問は、Havighurst, & Glasser (1972) および長田・長田・井上(1989a)の結果をもとに8項目を選び、さらに「回想は何の助けにもならない」という、直接に回想の意義を問う項目を加えた9項目とした。それらは、過去を思い出すことが、以下のような効果を持つと感じるか否かを評価するものである：1. 私をいい気分にしてくれる。2. 私自身をよく理解するのに役立つ。3. よかった経験を際

だたせてくれる。4. 話す材料を与えてくれる。5. 重荷から解放してくれる。6. 人生を考える助けになる。7. 自分を勇気づける。8. 気分転換になる。9. 何の助けにもならない。それぞれ、かなり感じる(5点)から全く感じない(1点)の5段階で、回想に対する評価を求めた。

結果

回想の量 回想の量について性および3つの群の違いを検討するために、回想得点を従属変数とし、性および学生群・壮年群・老年群の3つの群を独立変数とする2×3の分散分析を行なった結果、群に主効果が見られた($F(2)=27.9, p<.001$)。多重比較の結果では、5%の危険率で学生群と壮年群、および学生群と老年群の間に有意な差が示され、学生群に高い回想得点が示された。性の主効果、交互作用は有意ではなかった。Figure.1は、回想得点の世代比較を示したものである。

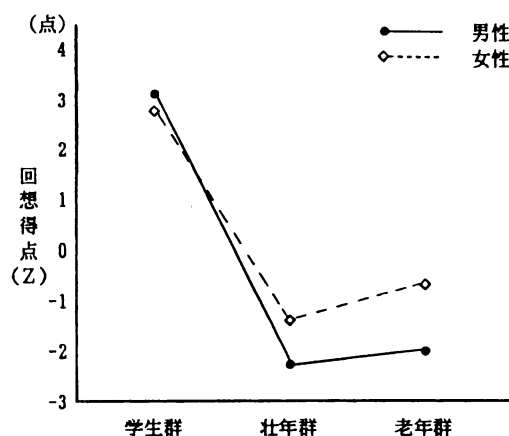


Figure 1 性別・群別にみた回想得点(分散分析の結果群に主効果がみられた。)

回想と適応 回想得点を従属変数とし、性を加え各指標の得点を説明変数として(老年群に関しては、自宅かホームであるかの要因も加えた)、ステップワイズ法による重回帰分析を行なった。Table4には、各指標の世代別平均点、分散、および重回帰分析の結果である標準偏回帰係数と重相関係数を示した。学生群においては現在満足度および死の意識、壮年群においては過去満足度と死への不安および健康度、老年群においては現在満足度と死の意識、および死への不安の各得点が回想得点にそれぞれ寄与していた。重相関係数は、学生群が.434、壮年群が.539、老年群が.644であった。

回想の効果に対する評価 回想の量と評価との関係を検討するために、回想得点を従属変数とし、各評価得点を説明変数として、年代別にステップワイズ法による重回

1) 改訂版PGCモラルスケールは、古谷野(1984)による日本語版を使用した。本スケールは高齢者用に作成されたものであるが、若年者に使用するにあたり、「年をとって」「若い頃」という表現については、現在を基準として「以前より年をとって」「現在より若い頃」と解釈してもらうよう注意を加えた。若年群の調査において、項目の内容や表現に関する戸惑いはみられなかった。

Table 4 適応に関する指標の世代別得点および重回帰分析の結果

適応に関する 指標	学 生 群		壮 年 群		老 年 群	
	平均(S.D.)	β^a	平均(S.D.)	β	平均(S.D.)	β
過去満足度	1.39(1.36)		1.91(1.70)	-.323**	2.65(1.86)	
現在満足度	9.94(3.09)	-.290***	11.79(3.52)		11.21(3.40)	-.290***
未来展望	14.04(2.27)		13.72(2.61)		13.47(3.47)	
死の意識	14.02(3.15)	.297***	14.07(3.24)		13.75(3.91)	.403***
死の不安	7.53(2.41)		6.91(2.17)	.213*	5.09(2.32)	.161*
健康度	43.53(3.84)		42.03(5.22)	-.215*	36.41(6.46)	
性 (老年群のみ) 居住形態(在宅・ホーム)						
重相関係数(R)		.434***		.539***		.644***

注. 回想得点を従属変数とし、適応に関する指標、性、居住形態(老年群のみ)を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行なった。

変数追加にもなるF値が、回帰式から求めたF値より大きい確率が.05以上の場合、変数の追加を行なう。

変数削除にもなるF値が、回帰式から求めたF値より小さい確率が.1以上の場合、変数の削除を行なう。

トレランス値は.01を指定

^a標準偏回帰係数

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 5 回想得点に影響を与える回想の効果に対する評価得点

説明変数	標準偏回帰係数(β)		
	学生群	壮年群	老年群
1 人生を考えるのに役立つ			
2 自分を勇気づける			
3 話す材料を与えてくれる			
4 自分を理解するのに役立つ	.217*		
5 自分をよい気分にしてくれる			
6 気分転換になる	.224**	.318**	
7 よかった経験を際立たせる			
8 重荷から解放してくれる			.435***
9 何の助けにもならない			
重相関係数(R)	.334	.318	.435

注. 回想得点を従属変数とし、回想の効果に対する評価の得点を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行なった。

変数追加にもなるF値が、回帰式から求めたF値より大きい確率が.05以上の場合、変数の追加を行なう。

変数削除にもなるF値が、回帰式から求めたF値より小さい確率が.1以上の場合、変数の削除を行なう。

トレランス値は.01を指定

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

帰分析を行なった。学生群において回想得点に影響を与えていたのは「気分転換になる」「自分を理解するのに役立つ」という回想の効果に対する2項目の評価得点であり、壮年群における回想得点に影響を与えていたのは「気分転換になる」効果に対する評価得点であった。また、老年群の回想得点に影響を与えていたのは「重荷から解放される」効果に対する評価得点であった(Table 5)。重相関係数は、学生群が.334、壮年群が.318、老年群が.435であった。

考 察

本調査の結果からは、一般的に言われているような、

高齢者の方が昔のことを思い出すことが多い傾向は示されず、人生後半期における回想が加齢にともない増加するという通念は支持されなかった。回想の世代間比較では、18~90歳の調査対象者を4群に分けて、一回に行なう回想の長さを比較した Merriam, & Cross (1982) の研究においても、年齢群にほとんど違いが見られなかったという報告がある。本研究も、一般的に言われるような「老人が過去に生きる」という通念に対する再考の必要性を示唆するものであろう。

高齢者の回想量が、予想に反して少なかったことに関しては、日本の高齢者が持つ戦争体験が回想に抑制因子として働くなどの、日本の高齢者における特殊性を考慮

する必要もあろう。われわれは、高齢者を対象に回想に関する調査を行ない、現在の日本の高齢者の回想は戦争の影響を大きく受けているという結果を得た(長田・長田・井上, 1989a)。内容に大きな特徴が見られた現在の日本の高齢者の回想は、欧米の高齢者の回想と異なる意味や機能を持つ可能性がある。また欧米に比較して、宗教的背景が希薄であることが内省の仕方や習慣に影響し、日本の高齢者の回想に特徴を与えることも予想される。思い出したくない過去が多いことや、全体主義の教育の中で、個の確立に価値を見いだしてこなかった社会背景が、自己内省につながる積極的な回想を、抑制する働きをもつとも考えられる。

一方、Butler (1963) が述べたように「死が近いと感じる意識」が回想と関係するならば、本研究における老年群対象者の「死の意識」が、学生群・壮年群との間に差がなかったため、死を意識して起こる自然な回想にも差が見られなかったと考えられる。これは、Butlerの報告が臨床の現場からのものであったのに対し、本研究では在宅あるいは老人ホームから無作為に選んだ高齢者を対象としており、全体として比較的健康的な人が多く、死が近いと感じる意識につながる老いの意識が低かったためと考えられる。Table 4にも、他の2群に比べて老年群の「死の意識」はむしろ低い有意差のない得点が示されている。また視点を群間差から個人差に置いてみた場合、Table 4の学生群と老年群においては「死の意識」の強さが回想の量に関係している結果が示されている。すなわちこれはButlerの示唆と一致し、上で述べてきたように「死の意識」と回想の関係を肯定する結果といえよう。

さらに、これは本研究の方法の性質上避けられない問題であるが、実際に頻繁に回想をしていても、その自覚がない場合、また回想することに対して否定的な感情を抱いている場合などは、回想の量は実際よりも少なく報告される可能性があることを指摘しておかなければならない。高齢者において、自分が回想をしていること自体を忘れていたり、普段気にとめていない自分の回想行動に対する思い違いや意識の低さが、事実を歪めている危険性があることにも注意する必要があり、こうした問題をいかに克服してゆくかは、今後の検討すべき課題として残される。

本結果からは老年群に高い回想量は示されなかったが、逆に学生群に高い回想得点が示された。他の群に比べて学生群に高い回想得点が示された結果については、この年代では、これまでの自己を振り返り回想をすることで、自我同一性の確立に向かっていることが反映されているのではないかと考えられる。青年期における同一性は、幼・児童期に体験した様々な同一化の中から、あるものは肯定されあるいは拒絶されて確立されてゆく(Erikson, 1989)。このように、青年期において自己のアイデンティ

ティのパターンを選択するプロセスには、回想が必要であり、それが頻繁に行なわれることは十分考えられることである。これに対し、次の世代群である壮年群の回想得点が低かったのは、回想をする時間的余裕のないことが実際的な理由であろうが、自己概念が既にその人なりに確立されているため青年期ほど回想を必要としないためとも考えられる。

学生群における対象者がアイデンティティの確立に回想を役立てているという考察は、本研究における回想の効果に関する結果にも示されている。学生群において回想得点に影響を与えていた回想の効果とは、「気分転換になる」「自分を理解するのに役立つ」であった。回想が気晴らしとして機能していると評価されていたと同時に、自己理解、すなわち自己を内省し自分とは何かを考えることにおける回想の効果も、回想の量に応じて高く評価されていた。この結果は上記の考察を裏付けていると言えよう。

次に、回想と適応との検討の中で、本研究では重相関係数は高くはなかったが、回想といくつかの適応指標との間に関係がみられた。回想は自己内省のプロセスを含み、その効果として自己認知を深めたり自尊感情を高めたり、あるいはうつ感情を増したりとさまざまな心理的变化を回想者にもたらす。各発達段階において、回想がどのような役割を果たしているかは、各発達段階における特徴をふまえて検討してゆく必要がある。

まず学生群において過去を思い出す傾向にある者は、現在満足度が低く死の意識が高いという傾向が示された。一般的に青年期とは自我について悩み、劣等感や孤独感を感じ、時には葛藤が自殺をも引き起こすこともある疾風怒涛の時期と言われる。下仲(1988)は青年と老年の自己概念を比較し、青年は、過去および現在の自己概念について否定的な認識を示した結果を報告している。13歳から92歳を対象に行なった自尊心についての林・下仲・中里・河合・佐藤・長田・成田(1991)の調査にも、若年ほど低い自尊心が示されたように、青年期に抱く自己像は否定的なものが多く、思い起こされるのは不完全な自己である可能性が高い。学生群を構成する青年たちは、回想を通して自己のアイデンティティの確立を行なっているのではないかとこの考察は前述した。自己を深く内省する中では自己矛盾や葛藤に悩むことも多く、自己の存在を死を含めて考えることが、結果として現在の満足度を低くしているのではないかと考えられる。

壮年群において比較的良好な回想を行なう者は、過去満足度および主観的健康度が低く、死の不安が高かった。この群では、回想を行なう者は健康に不安を持ち死の不安が高い傾向にあり、回想は過去の反省という形で行なわれ、その中で過去の失敗や葛藤など満足のいかない内容に注意を向けているのではないかとと思われる。

老年群においてしばしば回想をする傾向にある者は、現在満足度が低く、死を考え死の不安が強い傾向が示された。結果としては学生群と同様の傾向が示されており、同様にアイデンティティ獲得における模索の状態と理解することもできる。しかしながら、Levinson (1992) が人生を四季にたとえ、それぞれの季節は独自の性格を持つ質的に異なるものであることを強調しているように、老年期においても青年期と同様の自己内省が行なわれているとは考えにくい。アイデンティティの獲得の時期である青年期に対して、老年期はさまざまな役割から解放され、また役割の喪失や変化を体験する時期である。Havighurst (1972) によれば、老年期は喪失体験の中で、いかに適応してゆくかが発達課題とされるが、そのためには自己概念の再構築が必要とされる。Erikson (1977) が示すように、老年期は人生の再統合を発達課題とする時期であり、回想は、自分の人生の意義についての意味付けを行なうプロセスとして考えられる。老年期におけるアイデンティティの獲得とは、青年期において行なわれるものとは質的に異なり、死に向かう機能低下の中でさまざまな自己矛盾や葛藤を感じながら、青年期に獲得した自己概念に時間的枠組みを加えた、人生のアイデンティティともいべき包括的なアイデンティティを獲得することではないかと考えられる。

しかしながら、人生の再統合が試みられる中で、後悔に満ちた失敗や苦痛な体験を統合できず、あるいは現在の不幸を過去の体験に起因させて考えるなど、結果として現在の自我を傷つけ、人生への後悔や焦りを生じさせたり、絶望感を増加させる場合もある。これは、Eriksonの言う「統合に向けての乗り越えられるべき危機」であり、Butler (1963) の述べた、過去の葛藤に執着する強迫的な回想に当たるものではないかと思われる。日本の高齢者が何を思い出しているのかを調べた我々の前結果では、もっとも多くあげられたのが戦争体験であり、その他の特定体験では死別体験等が多かった(長田・長田・井上, 1989a)。日本の高齢者の場合、戦争にまつわる体験は、否定的な体験として回想に影響を与えている可能性がある。回想を行なった結果、戦争のために人生が滅茶苦茶にされたという怒り、思うような人生が送れなかったという焦り、にもかかわらずもう時間がないという絶望感などがもたらされる可能性もあることは、忘れてはならないだろう。否定的な体験や葛藤を統合し、自分の人生に意味づけることはそう易しいことではなく、場合によってはうつ感情を増す危険性もあると思われる。

一方、本研究では、回想を行なう者は死について考えることが多く死の不安も高いという結果が示された。死を身近に感じる人にとって、その意識は深刻な不安に結びついているようである。死の受容ができていない状態とは、死の意識は高くとも不安は低い状態であると考え

と、得られた結果は、回想が死の不安を和らげる働きを持つというこれまでの臨床報告とは矛盾すると言える。こうした違いが生じた理由としては、先行研究と本研究における研究方法の違いによると考えられるが、本研究で行なったように、「自己報告」の形で回想の量を測定した場合、その中には肯定的な内容ではない回想も多く含まれ、否定的な内容の回想が延々と思い起こされている場合もあると考えられる。Haight (1988) が行なったような聞き手に話す形式での回想や、Butler (1963) の報告のように臨床現場において専門家の共感を得ながら建設的に行なわれる回想と、本研究の対象者が行なっていた回想には、その内容や情緒面に与える影響の違いがあることは十分に予想される。

最後に、学生群および老年群に示された、回想傾向が現在の低い満足度に関係していたという結果は、現在の生活に行き詰まった状態の中で、過去を振り返り現実から一步後退した状態である可能性も指摘される。McMahon & Rhudick (1967) は、回想の一つの機能として、過去の偉業や輝かしい姿を思い出し、過去を賛美することで自尊感情や自我意識を強化させる機能を説明した。回想は辛い現実から一時逃れるための手段になるとも考えられ、本結果をそうした心理機制から説明することもできよう。

とくに高齢者にとって、自分が青年期を過ごした時代とは価値観の大きく変化した現在の社会で、加齢による心身の機能低下を感じながら生活することは、心理的な負担も多いと思われる。そうした中で過去を振り返ることは、現在を忘れて過去に没頭するだけでなく、自分を反省し、自分を取り戻そうとする努力にもつながるであろう。すなわち、回想は現在の不適応状態に対する適応反応の一つであるとも考えられる。この点に関して、老年群においてよく回想を行なう者は、「重荷から解放される」という効果をより感じていた。回想に救済的な役割を感じる傾向は、ストレスフルな現実を回想をすることによって和らげているのではないかという考察を裏付けているといえるだろう。青年期であっても老年期であっても、自我の発達の大きな節目では多くの矛盾や葛藤に悩み、その中で過去を振り返ることは、次の段階に適応するための新しい自己概念を見出すプロセスと言えるかも知れない。老年期の場合、それが死の受け入れということになるだろう。

本研究では、巨視的な視点から老年期の回想を中心に分析を行なったが、本研究から得られた考察から一定の結論を導くためには、さらにそれを裏付ける研究が必要である。回想と適応の関係は、個人のパーソナリティや生き方そのものに深く結びついたものであり、今後、回想の内容を含めてさらに検討を重ねる必要があると思われる。

文 献

- 青井和夫。(1978). 高齢者聴取り調査の分析. 高年齢を生きる, 10, 7-40. 地域社会研究所.
- 荒井保男・常木暎生。(1980). 老人の人格. 井上勝也・長嶋紀一(編), 老年心理学 (pp.132-148) 東京:朝倉書店.
- Boylin, W., Gordon, S. K., & Nehrke, M. F. (1976). Reminiscing and ego integrity in institutionalized elderly males. *The Gerontologist*, 16, 118-124.
- Brennan, P. L., & Steinberg, L. D. (1984). Is reminiscing adaptive?: Relations among social activity level, reminiscence and morale. *International Journal of Aging and Human Development*, 18, 99-110.
- Butler, R. N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-75.
- Coleman, P. G. (1974). Measuring reminiscence characteristics from conversation as adaptive features of old age. *International Journal of Aging and Human Development*, 5, 281-294.
- Erikson, E. H. (1977). 幼児期と社会 1 (仁科弥生, 訳). 東京:みすず書房. (Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.)
- Erikson, E. H. (1989). ライフサイクル, その完結 (村瀬孝雄・近藤邦夫, 訳). 東京:みすず書房. (Erikson, E. H. (1982). *The life cycle completed*. New York: W. W. Norton & Company.)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). 老年期 (朝長正徳・朝長梨枝子, 訳). 東京:みすず書房. (Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton & Company.)
- Georgemiller, R., & Maloney, H. N. (1984). Group life review and denial of death. *Clinical Gerontologist*, 2, 37-49.
- Haight, B. K. (1988). The therapeutic role of a structured life review process in homebound elderly subjects. *Journal of Gerontology*, 43, 40-44.
- Havighurst, R. J. (1972). *Development tasks and education*. New York: David McKay.
- Havighurst, R. J., & Glasser, R. (1972). An exploratory study of reminiscence. *Journal of Gerontology*, 27, 245-253.
- 林洋一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・長田由紀子・成田健一。(1991). 横断比較による生涯発達(5) —Self-Esteemについて—. 日本心理学会第55回大会発表論文集, 471.
- Hughston, G. A., & Merriam, S. B. (1982). Reminiscence: A nonformal technique for improving cognitive functioning in the aged. *International Journal of Aging and Human Development*, 15, 139-149.
- 古谷野直。(1984). 社会老年学における Successful Aging の測定. 日本ルーテル神学大学研究紀要, 16, 105-121.
- Lawton, M. P. (1975). The Philadelphia geriatric center morale scale: a revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- Levinson, D. J. (1992). ライフサイクルの心理学(上) (南博, 訳). 東京:講談社. (Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York: The Sterling Lord Agency.)
- Lieberman, M. A., & Falk, J. M. (1971). The remembered past as a source of data for research on the life cycle. *Human Development*, 14, 132-141.
- LoGerfo, M. (1980). Three ways of reminiscence in theory and practice. *International Journal of Aging and Human Development*, 12, 39-48.
- McMahon, A. W., & Rhudick, P. J. (1967). Reminiscing in the aged: An adaptational response. In S. Levin, & R. J. Kahana (Eds.), *Psychodynamic studies on aging: Creativity, reminiscing and dying* (pp. 64-78). New York: International Universities Press.
- Merriam, S. (1980). The concept and function of reminiscence: A review of the research. *The Gerontologist*, 20, 604-609.
- Merriam, S., & Cross, L. (1982). Adulthood and reminiscence: A Descriptive study. *Educational Gerontology*, 8, 275-290.
- Molinari, V., & Reichlin, R. E. (1985). Life review reminiscence in the elderly: A review of the literature. *International Journal of Aging and Human Development*, 20, 81-92.
- 長嶋紀一。(1977). 性格の円熟と退行. 加藤正明・湯沢靖彦・清水信(編), 老年期 (pp.79-93). 東京:有斐閣.
- Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S. (1961). The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, 16, 134-143.
- 落合幸子。(1981). 人生の転換期における心理(II). 筑波大学心理学研究, 3, 39-50.
- 長田由紀子・長田久雄・井上勝也。(1989a). 老年期の過去回想に関する研究 1: 回想の量・質・機能の種類と特徴. 老年社会科学, 11, 183-201.
- 長田由紀子・長田久雄・井上勝也。(1989b). 老年期の過去回想に関する研究. 日本心理学会第53回大会発表論文集, 88.
- Perrota, P., & Meacham, J. A. (1981). Can a reminiscing intervention alter depression and self-esteem? *International Journal of Aging and Human Development*, 14, 23-30.

Romaniuk, M. (1981). Review: Reminiscence and the second half of life. *Experimental Aging Research*, 7, 315-336.

佐藤真一・長田由紀子・矢富直美・井上勝也・林洋一. (1987). 人生後半期の行動の動機と生活満足度に関する研究: その1 尺度の作成過程. *日本心理学会第51回大会発表論文集*, 466.

下仲順子. (1988). *老人と人格*. 東京: 川島書店.

付 記

本研究は、第一執筆者が(財)東京都老人総合研究所心理学部門に在職中に、文部省科学研究費補助金奨励研究A(課題番号01710094)を受けて行なった研究である。

謝 辞

論文作成にあたり、(財)東京都老人総合研究所心理学研究室、下仲順子室長にご指導頂きました。深く感謝を申し上げます。

Osada, Yukiko (Seitoku University) & Osada, Hisao (Tokyo Metropolitan College of Allied Medical Sciences). *The Reminiscences of the Elderly and Their Adaptive Abilities*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 1-10.

The purposes of this study were: to (1) compare the essential features of the reminiscences among the elderly and younger adults, (2) determine how the quality and quantity of their reminiscences relate to effective adaptation to their surroundings, and (3) clarify the meaning of reminiscences to the elderly. A Reminiscence scale consisting of 8 questions was developed, to measure the quantity and frequency of spontaneous reminiscences by individuals in their daily lives. The three age sub-sample included 132 subjects aged 18-24 (student group); 97 aged 40-64 (middle age group); and 133 ages 65-95 (elderly group). The quantity of reminiscence was largest in the student group. Among the elderly group, subjects with higher frequencies of reminiscences tended to be less satisfied with their present lives and were more aware and fearful of death. These elderly also admitted that their reminiscences helped them to divert their thinking, and relieved them from psychological burdens.

[Key Words] Elderly, Reminiscence, Life review, Adaptation, Death

1992. 3. 2受稿, 1993. 9. 11受理

幼児による特徴の帰属と帰納的推論：上位カテゴリーの役割

湯沢 正通

(鳴門教育大学学校教育学部)

本研究では、上位カテゴリーが幼児による特徴の帰属や帰納的推論にどのような役割を果たしているかを検討した。実験1では、21人の5歳児と19人の6歳児に、動物、虫、野菜それぞれの12の正負事例を提示し、各カテゴリーの特徴を持つ事例を選択させた。その結果、動物、虫、野菜として選ばれた正事例が選ばれなかった正事例よりも特徴を持つものとして高い比率で選択された。実験2では、21人の5歳児と18人の6歳児に、動物、虫、野菜として選ばれた1つの事例が実験1と同様の特徴を持つことを教示したうえで、12の正負事例からその特徴を持つ事例を選択させた。すると、動物、虫、野菜として選ばれた正事例が特徴を持つものとされる選択比率が、実験1の場合よりも有意に増大したが、動物、虫、野菜として選ばれなかった正事例では、選択比率が実験1と変わりがなかった。これらの結果から、幼児が上位カテゴリーに基づいて特徴を帰属したり、帰納的推論を行うことが示唆された。

【キー・ワード】 認知発達, カテゴリー, 帰納的推論, 幼児

カテゴリーの最大の利点は、特定の事例について知っていること以上の情報を知り得ることである (Markman, 1989, p. 11)。例えば、ある人間の身体内に膀胱があるという事実から、他の人間はもちろん、イヌも同様に膀胱を持っているだろうと推論することができる。このようなカテゴリーに基づいた推論の多くは、帰納的である。すなわち、そこでは、個々の事例についての事柄から、人間や哺乳類の一般的な命題を確率的に導きだしている。このような帰納的推論は、大人だけでなく、子どもにとっても知識の獲得において極めて重要な働きをしていると考えられる (Gelman, & Markman, 1986, 1987)。例えば、Gelman, & Markman (1986) の研究では、4歳児に、熱帯魚、イルカ、サメを提示し、サメが、イルカと似ているから、イルカと同じ呼吸の仕方をするか、または熱帯魚と同じ魚であるから、熱帯魚と同じ呼吸の仕方をするかの判断を求めた。すると、4歳児でも、サメが熱帯魚と同じ呼吸の仕方をすると同答し、知覚的類似性ではなく、カテゴリーに基づいて推論した。

ところが、幼児による帰納的推論は、児童や大人によるそれと基本的に異なることが主張されている。例えば、López, Gelman, Gutheil, & Smith (1992) は、Osherson, Smith, Wilkie, López, & Shafir (1990) による帰納的推論のモデル (similarity-coverage model) を発達的に検討した。Osherson et al. (1990) のモデルは、「紅冠鳥には尺骨動脈がある。したがって、鷹にも尺骨動脈がある。」のような帰納的推論を次の2つの要因によって説明する。第1に、前提となるカテゴリー (紅冠鳥) と結論となるカテゴリー (鷹) との間の類似性であり (鷹は、紅冠鳥と似ているから、尺骨動脈を持つだろう)、第2に、前提

となるカテゴリーが、前提と結論のカテゴリーを包含するカテゴリー (鳥) を「網羅する」(cover) 程度である (紅冠鳥に尺骨動脈があるならば、鷹を含めた全ての鳥が尺骨動脈を持つだろう)。López et al. (1992) の結果は、幼児の帰納的推論が第1の要因によって説明され、第2の要因が幼児によって理解されていないことを示唆している。すなわち、幼児は、帰納的推論の強度を評定するとき、前提となるカテゴリーと結論となるカテゴリーとの間の類似性を考慮に入れるが、前提に含まれるカテゴリーの数や多様性が帰納的推論の強度を左右する (紅冠鳥だけでなく、スズメやペンギンにも、尺骨動脈があるなら、鷹を含めた全ての鳥が尺骨動脈を持つと結論できる確率が高まる) ことを理解していなかった。

また、Carey (1985) は、生物領域における推論の発達について検討し、生物的特徴の帰属や帰納的推論のパターンが4歳から10歳の間に変化することを見出した。すなわち、4歳児では、「食べる」、「呼吸する」、「寝る」、「骨がある」などの生物的特徴を持っているとする比率が哺乳類から鳥類、昆虫、芋虫まで次第に減少した。また、新しい特徴を教えられた場合も、同様に、動物の最も典型的な事例である人間との類似性に依りて帰納的推論を行った。それに対して、10歳児では、「生物」などのカテゴリーに基づいて特徴の帰属や帰納的推論を行った。

さらに、Gelman, & O'Reilly (1988, Study 1) は、「イヌ」や「椅子」のような基礎レベルのカテゴリーと「動物」や「家具」のような上位レベルのカテゴリーに基づいた帰納的推論を発達的に比較した。幼児と2年生を被験者にし、対象事例 (例えば、柴犬などのイヌ) と同じ基礎カテゴリーの事例 (コリーなどの他のイヌ)、同じ上

位カテゴリーの事例（ライオンなどの他の動物）、無関連な事例（例えば、テレビ）について、内部に未知の器官があることを教えた。その結果、幼児は、同じ基礎カテゴリーの事例間では2年生と同様に帰納的推論を行うが、上位カテゴリーの事例間では、帰納的推論を行うことが少なかった。

以上の研究結果から、幼児による特徴の帰属や帰納的推論は、主に典型事例との類似性に基づき、幼児は「事例を同じ上位カテゴリーに分類することの意味を十分に理解していない（Gelman, & O'Reilly, 1988, p. 885）」と結論付けることができるであろうか。答えは、「否」である。なぜなら、従来の研究には、次のような問題点があるからである。第1に、López et al. (1992) や Gelman, & O'Reilly (1988) の研究では、子どもにとって未知の特徴が用いられたことである。幼児や児童にとって共に未知の特徴であっても、それを解釈しうる既有知識の差異によって「未知」の意味が異なってくるだろう。子どもの利用する既有知識が記憶成績や課題解決の方略に大きな影響を及ぼすことは、よく知られた事実である（例えば、Bransford, Sherwood, Vye, & Rieser, 1986）。児童は、身体内の諸器官について多くの知識を持ち、しかもそれらの知識を哺乳類などの諸カテゴリーに関連付けて保持している（Carey, 1985）。したがって、「身体の中にxがある」と未知の特徴を知らされた場合、児童は、他の諸器官と同様に、xを上位カテゴリーに容易に関連付けることができるはずである。それに対して、幼児は、そのような既有知識が少ないために、基礎カテゴリーに帰納的推論の範囲を限定しているのかもしれない。なぜなら、事例間の類似性が高い基礎カテゴリーでは、より高い確率で適切な帰納的推論をすることができるからである。幼児であっても、日常的で有意義な文脈においてテストされた場合、基礎カテゴリーと上位カテゴリーとの間の階層関係に基づいた推論が可能であることから（Markman, & Callanan, 1984）、事例を同じ上位カテゴリーに分類することの意味を幼児が理解していないとは考えにくい。したがって、上位カテゴリーの事例にとって重要であると評価され、幼児が日常生活で知りうるような特徴に関しては、幼児は、事例への帰属や帰納的推論を上位カテゴリーに基づいて行っていることが予想される。

もちろん、従来の研究でも、動物や生物などにとって重要な特徴を子どもが様々な事例にどのように帰属するかについての検討が行われてきた。先に述べたように、Carey (1985) では、子どもが「食べる」、「呼吸する」、「骨がある」などの生物的特徴を哺乳類、鳥類、昆虫などの事例にどのように帰属するかについて調べている。しかし、それらの特徴の帰属に関して、子どもが事例をどのように動物にカテゴリー化しているかという点を厳密に考慮したうえでの検討が行われてこなかった。幼児が、

生物的特徴を、哺乳類から鳥類、昆虫、芋虫まで次第に少ない比率で帰属したとしても、同時に、類似のパターンでそれらの事例を動物にカテゴリー化していたらどうであろうか。その場合、幼児は、動物の最も典型的な事例である人間との類似性に応じて特徴を帰属しているという従来の解釈だけでなく、動物のカテゴリーに基づいて特徴を帰属しているという解釈も可能となる。このように、上位カテゴリーの特徴の帰属を、事例のカテゴリー化と関連付けて検討しなかったことが、従来の研究における第2の問題点である。

以上の問題点を考慮し、本研究では、上位カテゴリーの事例にとって一般に重要であるとされる特徴を取り上げ¹⁾、幼児によるそれらの特徴の帰属や帰納的推論をカテゴリー化と関連付けて検討する。本研究の仮説は、「幼児が上位カテゴリーに基づいてそれらの特徴を帰属し、それらの特徴に関して帰納的に推論しうる」であり、それに対立する仮説は、「幼児による上位カテゴリーの特徴の帰属や帰納的推論は、典型事例との類似性に基づき、事例を同じ上位カテゴリーに分類することの意味を理解していない」である。もちろん、本研究の仮説は、幼児が上位カテゴリーに基づいて演繹的に特徴を帰属すると主張するものではない。幼児がある典型事例について知り得た事実を、単に類似しているからという理由ではなく、同じ上位カテゴリーの事例だからという理由で、他の事例に帰属しうるということである。具体的な実験手続としては、動物、虫、野菜の正負事例を提示し、特定の特徴を持つものを幼児に選択させる。動物、虫、野菜という自然物の領域のカテゴリーを取り上げるのは、人工物の領域とは異なり、自然物の領域では、カテゴリーの事例が目に見えない特徴を共有し、そのような特徴の構造が帰納的推論を裏付けているとされているからである（Gelman, & Markman, 1986, 1987）。本研究は2つの実験から構成される。実験1では、特徴に関する事例選択後に、カテゴリーに属する事例を選択させる。それに対して、実験2では、最初にカテゴリーに属する事例を選択させ、選択された1つの事例が特徴を持つことを教示する。その後、特徴に関する事例選択をさせる。もし、特徴の帰属や帰納的推論を行うとき、幼児が事例の属する上位カテゴリーを考慮するならば、動物、虫、野菜に属する事例として選択されたものとそうでないものとの間で、特徴に関する事例選択に有意な差が生じることが予想される。

また、子どもが動物、虫、野菜の特徴を日常生活で認

1) 「幼児が日常生活で知りうるような特徴」という本研究の趣旨からすれば、本来、幼児自身が上位カテゴリーの特徴として挙げたものを用いるべきであろう。しかし、幼児に特徴の種類を説明したうえで、動物、虫、野菜の特徴を言葉で挙げさせることが困難であるため、本研究では、便宜上、大学生が重要であると評価した特徴を実験に用いる。

識する機会は、特徴の種類によって異なっている。そのため、特徴に関する事例選択は、特徴の種類に影響を受けることも考えられる。そこで、本研究では、以下6種類の特徴を区別する。まず、知覚的特徴と部分的特徴である。知覚的特徴が、対象に関する視覚的、聴覚的、味覚的、嗅覚的記述であるのに対して、部分的特徴は、対象がどのような部分を持つかについての記述である。長い首を持つことが対象を細長く見せるように、対象がどのような部分を持つかによって、対象の形が決定される。その意味において両者は密接に関連している。しかし、例えば、動物の事例が共通に耳や鼻などの部分を持っているとしても、その部分の形が動物によって異なっている。そのため、動物のような上位カテゴリーでは、事例に共通する知覚的特徴が少ないうえ、共通する知覚的特徴も子どもにとってあまり顕著ではない。次に、機能的特徴である。機能的特徴は、対象の機能や働きについての記述である。口が食べるために用いられるように、事例の機能は、部分と密接に関連している。しかし、その機能を認識するのは、事例が食べている場面を観察する以外、口を通して間接的に推測するにすぎない。第3に、内的特徴と発生的特徴である。内的特徴は、対象の内部の諸器官や諸物質についての特徴であり、発生的特徴は、対象の発生や生成についての特徴である。両者の特徴は、一般に日常生活で直接観察されることはないが、子どもは、テレビや両親などから人間などの典型事例の内部や発生についての情報を与えられるだろう。最後に、事例と人間との関わりについての特徴を对人的特徴とする。この特徴を加えたのは、幼児の上位カテゴリーが、人間と事物との関わりの中で事物の持つ機能的な役割に基づいて形成されると主張されているからであり (Nelson, 1983, 1988), また、「野菜」の例からも明らかなように、事物そのものにとって重要な機能 (成長する) と人間にとって重要な機能 (食べられる) は、必ずしも一致しないからである。

実験 1

実験1では、特徴を事例に帰属するとき、幼児が事例の属する上位カテゴリーを考慮するか否かを検討する。幼児に動物、虫、野菜の正負事例を提示し、その中からカテゴリーの諸特徴を持つものを、さらに、カテゴリーに属するものを選択させる。ここで比較の対象となるのは、同じ動物、虫、野菜の正事例の中で、幼児によってカテゴリー事例として選択されたものと、そうでないものである。なぜ正事例のみを検討の対象とするかと言うと、負事例が焦点となる特徴を必ずしも持たないためである。負事例がある特徴を持つものとして選択されなかった場合、その事例がカテゴリーに属さないためなのか、または実際にその事例が特徴を持たないためなのかを区

別することができなくなる。もし、幼児が特徴を帰属するとき、上位カテゴリーを考慮するならば、同じ正事例でも、カテゴリー事例として選ばれたものが、そうでないものよりも、カテゴリーの諸特徴を持つものとして多く選択されるはずである。

方法

被験者 保育園の年長クラスの男児11名、女児10名 (平均年齢6歳4か月)、年中クラスの男児8名、女児11名 (平均年齢5歳5か月) を被験者とした。

課題 まず、材料の作成のために、大学生に予備調査を実施した。動物、虫、野菜のカテゴリー名と Table 1にある6つの正事例の名前をそれぞれ上部に印刷した用紙を作成し、各67名の大学生に配布した。そして、6種類の特徴を記入させた。その際、以下のような教示と、「自動車」についての具体例を与えた。

「それぞれのカテゴリーの事例に共通した次のような特徴で、あなたがそのカテゴリーにとって最も重要だと考えるものを3つ以内で挙げてください。… 1. 知覚的特徴：対象に関する視覚的、聴覚的、味覚的、嗅覚的特徴、例えば、固いなど。2. 部分的特徴：事例の全体を構成する部分、例えば、タイヤを持つなど。3. 機能的特徴：事例の働きについての特徴、例えば、動くなど。4. 内的特徴：事例の目に見えない内部の特徴、例えば、金属でできているなど。5. 発生的特徴：事例の発生、生成についての特徴、例えば、工場で作るなど。6. 对人的特徴：事例と人間との関わりについての特徴、例えば、人が乗るなど。」

大学生が1番多く挙げた特徴と2番目に多く挙げた特徴を組み合わせて、それぞれのカテゴリーの特徴とした (Table 1)。ただし、共通の特徴がないとする反応が2番目に多かった場合は、1番多く挙げられた特徴のみを用いた。また、野菜については、知覚的特徴に対して共通のものがないとする反応が1番多く、また、機能的特徴に対して对人的特徴と同じものが挙げられたので、両者の特徴は課題から除いた。

動物、虫、野菜の正事例として、国立国語研究所 (1981) の幼児・児童の連想語彙表の中から、典型性の高いものから低いものまで、6つの事例を選択した²⁾。選択された事例を典型性の高い順に Table 1に示した。ただし、「動物」の言葉は、日常生活でしばしば哺乳類と同義に用いられ、また、少なくとも哺乳類は、Table 1のすべての特徴を備えているため、動物の正事例を哺乳類に限定した。そして、負事例として、動物の場合、鳥類、両生類、魚類、非脊椎動物、植物、人工物から各1例選択し、虫の

2) それぞれの事例について、連想語彙表の中で、動物・虫・野菜の事例として挙げられた回数数の多少を、典型性の高低と見なした。その典型性の妥当性については、典型性とカテゴリーに関する事例選択の比率との間の順位相関 (Table 3) によって検討した。

Table 1 動物, 虫, 野菜の6種類の特徴と12の正負事例

特徴	動物	正事例	負事例
知覚的特徴	体が温かい (34%)	キリン	スズメ
部分的特徴	足 (84%) や尻尾 (51%) を持つ	ウサギ	カエル
機能的特徴	動き回って (75%), 食べ物を食べる (69%)	ゴリラ	キンギョ
内的特徴	体の中に血が流れている (54%), 骨がある (34%)	クマ	クワガタ
発生的特徴	お母さんのお腹の中から生まれる (77%) ^a	サイ	ダイコン
対人的特徴	動物園にいて (34%), 人がエサを与える (34%)	ヒツジ	トラック
	虫	正事例	負事例
知覚的特徴	体が小さい (36%)	チョウ	ヘビ
部分的特徴	足 (84%) や目 (33%) がある	トンボ	タイ
機能的特徴	動き回って (78%), 食べ物を食べる (43%)	カマキリ	イカ
内的特徴	体の中に血が流れている (34%) ^b	アリ	ホウレン草
発生的特徴	卵から生まれて (58%), 野原で大きくなる (51%)	ハチ	ヒマワリ
対人的特徴	人が網などで捕まえて (42%), 籠の中に入れて飼う (28%)	カ	ヒコウキ
	野菜	正事例	負事例
部分的特徴	根 (24%) や葉 (34%) を持つ	ニンジン	サンマ
内的特徴	水 (43%) や栄養 (29%) (人のもりもり力になるもの) を含む	キュウリ	バッタ
発生的特徴	畑で (87%) 種から (29%) 育つ	トマト	バナナ
対人的特徴	人が育て (59%), 食べる (78%)	ネギ	チューリップ
		カボチャ	エンピツ
		サツマイモ	ナベ

注. () 内は, 各特徴を大学生 (N=67) が挙げた比率.

^a 「胎児を作る (49%)」と「親から生まれる (28%)」を併した比率

^b 「体液がある (18%)」と「血がある (16%)」を併した比率

場合, 脊椎動物と植物から各2例, 軟体動物と人工物から各1例選択し, さらに, 野菜の場合, 野菜以外の食物と生物, 人工物から各2例選択した。それぞれの事例について, 10×10cmの絵カードを作成した。

課題は, 12枚の絵カードの中からそれぞれの特徴を持つ事例を選択することであった。

手続実験は, 保育園の別室において, 1対1の面接法で行った。実験時間は1人につき, 約20分かかった。課題はカテゴリごとに実施し, 以下の手順で行った。ただし, 動物, 虫, 野菜の課題順序は, ランダムであった。

1. 絵カードの確認: 子どもが絵カードの事例を正しく認識していることを確認するために, 12枚の絵カードについて, 名前を尋ねながら, 被験者の前に並べた。被験者が答えられない場合は, 実験者が教え, また基礎カテゴリ (Table 2の命名) 以外の命名を答えた場合は, 実験者が基礎カテゴリの命名を教えた。無反応または誤反応は, 全体で4%にすぎなかったが, 負事例の場合, 基礎カテゴリ以外の命名を答える反応が16%あった。

2. 特徴に関する事例選択: それぞれの特徴を持つものを順次選択させた。例えば, “この中で, 体が温かいものはいるかな?” と尋ね, 被験者が1枚選択したら, 他にないかどうか尋ね, “ない” と答えるまで選択させた。被験者が “ない” と答えた時点で, 選択した絵を元に戻し, ランダムに混ぜ, 次の特徴について, 同様に選択さ

せた。6つの特徴についての選択の順序はランダムに行った。

3. カテゴリに関する事例選択: 12枚の絵カードの中から, カテゴリの事例を選択させた (例えば, この中で動物はどれかな?)。

結果と考察

動物, 虫, 野菜の正負事例がそれぞれの特徴を持つものとして選択された比率を Table 2 に示した。いずれの特徴についても, 正事例の選択比率が高く, 負事例の選択比率は低い。特に人工物は全く選択されていない。また, 動物の機能的, 内的, 発生的特徴に注目した場合, 哺乳類の事例から鳥類, 両生類, 魚類, 無脊椎動物となるに従って, 選択比率が減少している。さらに, ここで注目すべき点は, 6つの正事例の選択比率が典型性に依りてどのように変化しているかということである。幼児による特徴の帰属がカテゴリの典型事例との類似性に基づいているとすれば, 典型性の減少に伴って選択比率も減少するはずである。この点を明らかにするために, 典型性の高い順に6つの正事例に6から1の番号を付け, この値と各特徴およびカテゴリに関する事例選択の比率との間の順位相関係数 (スピアマン) を計算した。その結果を示したのが Table 3 である。カテゴリに関する事例選択の比率は, 年中児の虫の事例以外, 典型性と高い相関を示している。このことは, 典型性の高い事例ほど早期に獲得されることを考えると (Mervis, & Rosch, 1981),

Table 2 12の正負事例がそれぞれの特徴を持つものとして選択された比率（%）

年 長 児 (N=21)													
動物	キリン	ウサギ	ゴリラ	クマ	サイ	ヒツジ	スズメ	カエル	キンギョ	クワガタ	ダイコン	トラック	平均選択数
知覚的特徴	14	86	62	91	29	95	29	4	4	0	0	0	4.10(1.71)
部分的特徴	95	71	14	0	24	5	81	5	19	0	0	0	3.14 (.72)
機能的特徴	57	76	48	62	57	57	71	52	62	43	5	0	5.90(2.69)
内的特徴	67	67	62	76	76	62	43	38	24	24	0	0	5.43(3.11)
発生的特徴	53	76	53	67	43	57	33	48	43	33	0	0	5.05(3.15)
対人的特徴	95	91	86	91	67	57	24	14	5	0	0	0	5.29(1.67)
動物	95	95	95	86	81	81	23	19	14	5	0	0	5.95(1.91)
虫	チョウ	トンボ	カマキリ	アリ	ハチ	カ	ヘビ	タイ	イカ	ホウレン草	ヒマワリ	ヒコウキ	
知覚的特徴	38	38	43	95	71	95	14	5	10	0	5	0	4.14(1.91)
部分的特徴	81	57	91	95	86	76	5	19	71	0	0	0	5.81(1.56)
機能的特徴	67	67	76	67	67	52	43	52	48	5	0	0	5.43(2.50)
内的特徴	38	67	52	57	67	57	71	76	29	0	0	0	5.14(2.51)
発生的特徴	71	67	81	52	52	38	47	10	10	14	14	0	4.57(1.94)
対人的特徴	86	91	71	29	33	24	14	33	14	0	0	0	3.95(1.94)
虫	86	91	91	81	86	76	29	0	5	0	0	0	5.43(1.79)
野菜	ニンジン	キュウリ	トマト	ネギ	カボチャ	サツマイモ	サンマ	パッタ	バナナ	チューリップ	エンビツ	ナベ	
部分的特徴	62	29	38	86	38	43	0	0	14	47	0	0	3.57(1.87)
内的特徴	76	52	76	57	86	43	67	5	38	10	0	0	5.10(2.00)
発生的特徴	81	86	86	62	86	76	5	0	38	28	0	0	5.48(1.59)
対人的特徴	86	91	81	91	86	71	81	0	48	0	0	0	6.33(1.98)
野菜	91	95	91	91	91	38	24	0	10	0	0	0	5.29(1.08)
年 中 児 (N=19)													
動物	キリン	ウサギ	ゴリラ	クマ	サイ	ヒツジ	スズメ	カエル	キンギョ	クワガタ	ダイコン	トラック	平均選択数
知覚的特徴	37	95	79	90	47	95	58	16	11	5	5	0	5.37(2.13)
部分的特徴	100	74	26	21	37	26	79	16	32	11	0	0	4.21(2.42)
機能的特徴	74	84	63	68	58	63	74	58	68	37	0	0	6.47(2.76)
内的特徴	74	68	63	74	63	74	47	42	37	26	5	0	5.74(3.16)
発生的特徴	68	84	68	68	53	58	37	53	37	37	0	0	5.63(3.25)
対人的特徴	95	100	79	79	74	68	37	26	16	16	6	0	5.95(2.37)
動物	100	95	90	100	90	90	26	21	16	16	0	0	6.42(1.73)
虫	チョウ	トンボ	カマキリ	アリ	ハチ	カ	ヘビ	タイ	イカ	ホウレン草	ヒマワリ	ヒコウキ	
知覚的特徴	53	58	58	90	58	79	37	0	21	0	0	0	4.53(2.23)
部分的特徴	58	47	90	84	84	79	26	37	68	5	0	0	5.79(2.19)
機能的特徴	74	63	74	95	84	53	63	42	32	0	0	0	5.79(2.78)
内的特徴	53	53	53	53	63	68	58	68	42	0	0	0	5.11(3.32)
発生的特徴	53	58	79	63	68	58	42	11	5	0	0	0	4.37(2.32)
対人的特徴	84	90	79	53	47	53	16	11	5	0	0	0	4.37(2.13)
虫	79	74	84	84	90	74	16	5	5	0	0	0	5.11(1.97)
野菜	ニンジン	キュウリ	トマト	ネギ	カボチャ	サツマイモ	サンマ	パッタ	バナナ	チューリップ	エンビツ	ナベ	
部分的特徴	42	42	42	53	47	32	11	5	21	84	0	0	3.79(2.84)
内的特徴	74	74	84	79	74	68	68	0	37	0	0	0	5.58(2.30)
発生的特徴	79	79	95	58	90	79	5	0	42	16	0	0	5.42(2.01)
対人的特徴	90	84	90	84	79	79	68	0	63	0	0	0	6.37(2.25)
野菜	90	90	90	84	90	47	26	0	21	0	0	0	5.37(1.72)

注. 動物, 虫, 野菜の欄は, それぞれのカテゴリーの事例として選択された比率。() 内は, 標準偏差。

Table 3 事例の典型性とカテゴリ及び6つの特徴に関する事例選択の比率との間の順位相関

	年長児			年中児		
	動物	虫	野菜	動物	虫	野菜
カテゴリ	.93**	.65	.68	.62	-.18	.68
知覚的特徴	-.60	-.88*		-.38	-.70	
部分的特徴	.71	-.14	-.09	.64	-.41	.03
機能的特徴	.15	.51		.75	.03	
内的特徴	.00	-.41	.20	.03	-.85*	.33
発生的特徴	.14	.81*	.27	.76	-.38	-.03
対人的特徴	.90*	.89*	.44	.93**	.84*	.84*

注. 順位相関は、スピアマンの順位相関。検定は無相関検定。

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 4 動物, 虫, 野菜の選択事例と非選択事例が各特徴を持つとされた比率 (実験1)

年長児	動物選択	非選択	比率差	虫選択	非選択	比率差	野菜選択	非選択	比率差
	N=112	N=14	p	N=107	N=19	p	N=104	N=22	p
知覚的特徴	64	50	n. s.	62	74	n. s.			
部分的特徴	38	14	n. s.	84	63	.040	51	41	n. s.
機能的特徴	65	14	.00032	71	37	.00050			
内的特徴	72	36	.010	63	21	.00085	72	32	.00051
発生的特徴	62	29	.020	64	37	.023	83	64	.048
対人的特徴	87	36	.00085	63	16	.00016	88	68	.032
年中児	動物選択	非選択	比率差	虫選択	非選択	比率差	野菜選択	非選択	比率差
	N=107	N=7	p	N=92	N=22	p	N=93	N=21	p
知覚的特徴	75	57	n. s.	68	55	n. s.			
部分的特徴	50	0	.0094	80	45	.0016	46	29	n. s.
機能的特徴	70	43	n. s.	82	41	.00028			
内的特徴	71	43	n. s.	66	18	.000049	80	57	.034
発生的特徴	69	29	.040	72	27	.00016	83	67	n. s.
対人的特徴	86	29	.0017	76	32	.00014	85	81	n. s.

注. 比率差の検定は、フィッシャーの直接検定法による。

6つの事例間で典型性の順位が妥当であることを示している。Table 3で、有意な正の相関を示す特徴は、年長児の場合、動物の対人的特徴、虫の発生的、対人的特徴であり、年中児の場合、動物の対人的特徴、虫の対人的特徴、野菜の対人的特徴である。それ以外の特徴の場合、Table 2からも明らかなように、事例の典型性と事例選択の比率との間に明確な傾向は見られない。ただし、動物、虫、野菜の部分的特徴と動物の知覚的特徴に関する事例選択の比率は、事例ごとに大きく異なっている。それは、部分的特徴に関する選択が絵カードの中に足や尻尾などの部分が直接見えていることに、また動物の知覚的特徴に関する選択が毛がふさふさと生えていることに左右されたためである。

次に、同じ動物、虫、野菜の正事例の中で、カテゴリ事例として選ばれたものと、そうでないものを比較した。全ての被験者の選択について、動物、虫、野菜として選ばれた事例と選ばれなかった事例に分け、それらの事例が特徴を持つものとして選択された比率、及び比率の差

に関する検定結果をTable 4に示した。ただし、動物、虫、野菜として選ばれなかった事例の数が少ないため、比率が等しいという帰無仮説をフィッシャーの直接法により検定している。Table 4から、同じ動物、虫、野菜の正事例であっても、カテゴリ事例として選ばれた事例は、そうでない事例よりもずっと高い比率で、それぞれの特徴を持つものとして選択されている。カテゴリ事例として選ばれたものが、そうでないものよりも、有意に多く選択されたのは、年長児の場合、動物の機能的、内的、発生的、対人的特徴、虫の部分的、機能的、内的、発生的、対人的特徴、野菜の内的、発生的、対人的特徴であり、年中児の場合、動物の部分的、発生的、対人的特徴、虫の部分的、機能的、内的、発生的、対人的特徴、野菜の内的特徴であった。

以上のように、カテゴリ事例として選ばれたものが、そうでないものより、カテゴリの諸特徴を持つものとして多く選択された。このことは、幼児が上位カテゴリを考慮して、特徴に関する選択を行っていることを示唆

している。ただし、典型性の高い事例ほど高い比率でカテゴリー事例として選ばれたため、カテゴリーに関する選択と特徴に関する選択との間の関連性は、事例の典型性に媒介されているという解釈も成り立つ。そして、少なくとも、对人的特徴については、事例の典型性と特徴に関する選択比率との間に関連性が見られることから、そのような解釈が可能である。しかし、その他の特徴については、典型性と特徴に関する選択比率との間に明確な関連性が見られず、カテゴリー事例として選ばれたものとそうでないものとの違いが単に典型性を反映したものととする解釈は排除される。また、6特徴について繰り返し尋ね、さらにカテゴリー事例を選ばせたことで、幼児が機械的に同じ事例を選択したことも考えられる。しかし、特徴によって結果に差異が見られることから (Table 3, 4), そのような可能性も否定できるだろう。

実験 2

実験 2 では、帰納的推論に焦点を当て、幼児が上位カテゴリーを考慮するか否かを更に検討する。具体的には、最初に動物、虫、野菜に属する事例を選択させる。そして、その中の 1 つの事例が特徴を持つことを指摘したうえで、その特徴に関する事例選択を行わせる。ここで問題となるのは、実験 1 に比べ、動物、虫、野菜として選ばれた事例と選ばなかった事例が特徴を持つものとして選択される比率がどのように変化するかである。例えば、実験 1 で、幼児が動物の特徴に関する選択を行ったとき、特徴を持つ事例として、ライオンを思い起こしたとする。そして、提示された事例について、ライオンと同じ動物だからという理由で、その特徴に関する選択を行ったとする。その場合、動物と見なす事例を選択する比率が高くなる。ただし、実際にその特徴を持つ事例をまったく知らない子どももいるだろう。そのため、実験 2 で、ゾウがその特徴を持つことを指摘されると、同じ動物と見なしている事例に限って、選択される比率がさらに増大するだろう。それに対して、幼児が提示された事例について、ライオンと似ているからという理由で、特徴に関する選択を行ったとする。その場合、ライオンとの類似性に依って諸事例の選択される比率が減少するが、もちろん、実際にその特徴を持つ事例をまったく知らない子どももいるだろう。そして、実験 2 で、ゾウがその特徴を持つことを指摘されると、動物であるか否かにかかわらず、諸事例の選択される比率が増大するだ

3) 幼児が、ライオン (などの典型事例) との類似性に基づいて、特徴に関する選択を行う場合、もしゾウと諸事例の類似性がライオンと諸事例の類似性より高 (低) ければ、諸事例の選択される比率がその分、増加 (減少) することになる。ただし、両者の類似性が大きく異なるとは考えられないうえ、仮に異なる場合でも、特徴に関する選択比率に対する効果は、動物として選択されたか否かにかかわらず、事例全体に及ぶと予想される。

ろう³⁾。以上の説明を一般化すると、次のようになる。もし、幼児が上位カテゴリーに基づいて帰納的推論を行うなら、動物、虫、野菜として選ばれた事例が特徴を持つものとして選択される比率が実験 1 よりも実験 2 で増加するだろう。しかし、動物、虫、野菜として選ばれなかった事例については、選択比率に変化が見られないだろう。それに対して、幼児が典型事例との類似性に基づいて帰納的推論を行うなら、動物、虫、野菜として選ばれた事例も選ばれなかった事例も、特徴を持つものとして選択される比率が実験 1 よりも実験 2 で増加するだろう。

方法

被験者 実験 1 と同一の保育園であるが、異なる年長クラスの男児 11 名、女児 10 名 (平均年齢 6 歳 5 か月)、年中クラスの男児 7 名、女児 11 名 (平均年齢 5 歳 5 か月) を被験者とした。

課題 取り上げた上位カテゴリーおよび特徴は、実験 1 と同様である (Table 1)。ただし、それぞれのカテゴリーの正事例に、Table 1 の 6 事例以外に、動物はゾウ、虫はカブトムシ、野菜はキャベツを加えた。合計 13 の事例について、10×10cm の絵カードを作成した。

課題は、1 枚の絵カードの事例がそれぞれの特徴を持つことを教示されたうえで、他の 12 枚の絵カードの中から同じ特徴を持つ事例を選択することであった。

手続 実験は、保育園の別室において、1対1の面接法で行った。実験時間は 1 人につき、約 20 分であった。課題はカテゴリーごとに実施し、以下の手順で行った。ただし、動物、虫、野菜の課題順序は、ランダムであった。

1. 絵カードの確認は、実験 1 と同様である。ただし、無反応または誤反応は、全事例で 4% にすぎなかったが、負事例の場合、基礎カテゴリー以外の命名を答える反応が 13% あった。

2. カテゴリーに関する事例選択：13 枚の絵カードの中から、カテゴリーの事例を選択させた。

3. 特徴に関する事例選択：2 で選択された事例の中から 1 枚取り上げ、次のように教示し、それぞれの特徴を持つものを他の 12 枚の絵カードの中から選択させた。例えば、“これはゾウだね。ゾウは、体が温かいんだ。この中で、体が温かいものはいるかな？”と尋ね、被験者が 1 枚選択したら、他にないかどうか尋ね、ないと答えるまで選択させた。被験者がないと答えた時点で、選択した絵を元に戻し、混ぜた後、次の特徴について、同様に選択させた。教示例として、ゾウ、カブトムシ、キャベツの絵を用いたが、それを幼児がカテゴリー事例として選ばなかった場合は、他の選択された事例の絵を用いた。6 つの特徴に関する選択は、ランダムな順序で行った。

結果と考察

ここでの焦点は、実験1に比べ、動物、虫、野菜として選ばれた事例と選ばれなかった事例が特徴を持つものとして選択される比率がどのように変化したかである。ただし、6つの正事例が動物、虫、野菜として選ばれた比率は、年長児と年中児を合わせて、平均で93%、97%、85%であった。これらの比率は、実験1の91%、83%、82%に比べて高く、特に、虫の選択比率が有意に増加している($\chi^2(1, N=474)=25.85, p<.01$)。これは、実験1と実験2で、カテゴリーと特徴に関する事例選択の順序が異なるためではないかと考えられる。このように、動物、虫、野菜として選択されなかった事例数が少ないため、以下の分析は、年長児、年中児を合わせたデータについて行った。6つの正事例について、動物、虫、野菜として選ばれた事例と選ばれなかった事例がそれぞれの特徴を持つものとして選択された比率をTable5に示している。比率の差について、 χ^2 検定を行い、Table5に同時に示している。ただし、虫の非選択は、データ数が少ないため、フィッシャーの直接法により検定を行った。実験1に比べ、実験2で有意な比率の増加が見られたのは、動物として選ばれた事例の場合、知覚的、機能的、内的、発生的特徴であり、虫として選ばれた事例の場合、知覚的、部分的、内的、発生的特徴であり、野菜として選ばれた事例の場合、部分的、内的、発生的、対人的特徴であった。それに対して、動物、虫、野菜として選ばれなかった事例の場合、実験1と実験2の選択比率に有意な差が見られたのは、虫の内的特徴だけである。ただし、動物、虫、野菜として選ばれなかった事例の数が少ないので、有意にはならなかったが、実験2における動物の内的、発生的特徴、虫の知覚的特徴などに関する選択比率も、実験1のそれと比較して、20%以上増加している。

以上の結果から、次のことが示唆される。第1に、少なくとも、動物の知覚的、機能的特徴、虫の部分的、発生的特徴、野菜の部分的、内的、発生的、対人的特徴に関して、幼児は事例選択を上位カテゴリーに基づいて行っているということである。もちろん、特徴に関する選択を行う前に、上位カテゴリーに属する事例を選ばせていることも、実験1に比べ、それらの事例の選択比率が増加した原因であろう。先に上位カテゴリーの事例を選ばせることで、幼児が上位カテゴリーに注目しやすくなったと考えられる。しかし、特徴の種類にかかわらず、上位カテゴリーの事例として選ばれたものの選択比率が増加しているわけではないことから、幼児は、上位カテゴリーの事例として選んだものを、それぞれの特徴を持つものとして機械的に選択しているわけではない。第2に、虫として選ばれた事例も選ばれなかった事例も、内的特徴に関する選択比率が実験1より有意に増加した。つまり、内的特徴に関する事例選択は虫のカテゴリーに必ずしも基づいたものではないと言える。また、動物として選ばれた事例も選ばれなかった事例も、内的特徴や発生的特徴に関する選択比率が実験1より増加しているが、依然として、動物として選ばれた事例が選ばれなかった事例よりも、選択比率が高くなっている。このことは、動物のカテゴリーだけでなく、典型事例との類似性も考慮して、幼児が動物の内的特徴や発生的特徴に関する事例選択を行っていることを示唆している。最後に、動物の部分的、対人的特徴、虫の機能的、対人的特徴に関する選択比率は、動物、虫として選ばれた事例も選ばれなかった事例も、実験1と変わりがなかった。その理由としては、幼児にとって、提示されたいずれかの事例がそれらの特徴を持つことが自明であるため、実験2で別の事例がそれらの特徴を持つことを指摘しても、事例選択

Table 5 動物、虫、野菜の選択事例と非選択事例がそれぞれの特徴を持つとされた比率に関する実験1と2の比較

	動物選択		非選択		虫選択		非選択		野菜選択		非選択	
	実験1	2	実験1	2	実験1	2	実験1	2	実験1	2	実験1	2
	N=219	218	N=21	16	N=199	227	N=41	7	N=197	200	N=43	34
知覚的特徴	69	83	52	63	65	80	63	86				
χ^2	10.44**		.079		11.16**		$P=.24$					
部分的特徴	56	49	10	13	82	91	54	57	49	70	35	47
χ^2	1.92		.060		6.51*		$P=.60$		16.87**		.72	
機能的特徴	68	77	24	19	76	81	39	43				
χ^2	4.45*		.0011		1.14		$P=.58$					
内的特徴	72	82	38	63	64	80	20	86	76	91	44	53
χ^2	6.10*		1.30		12.66**		$P=.0014**$		15.81**		.29	
発生的特徴	65	82	29	50	68	81	32	43	83	94	65	68
χ^2	14.16**		.98		8.49**		$P=.43$		10.00**		.000089	
対人的特徴	86	89	33	25	69	77	24	29	86	93	74	74
χ^2	.31		.035		3.27		$P=.57$		4.12*		.030	

注. データは、年長クラスと年中クラスを合併している。 χ^2 値は、すべてイエーツの修正を施したものである。虫の非選択に関してのみ、データ数が少ないため、フィッシャーの直接法により、実験1と2の選択比率が等しいという仮説を支持する確率を求めている。

** $p<.01$. * $p<.05$

に影響がなかったことが考えられる。

全体的考察

本研究では、上位カテゴリーにとって一般に重要な特徴を取り上げ、それらの特徴に関する選択や帰納的推論をカテゴリー化と関連付けて検討した。実験1では、幼児に動物、虫、野菜の正負事例を提示し、最初に6種類の特徴をそれぞれ持つものを選択させた。そして、動物、虫、野菜のカテゴリーに属する事例を選択させた。その結果、カテゴリー事例として選ばれたものが、そうでないものよりも、諸特徴を持つものとして多く選択された。さらに、実験2では、幼児に最初に動物、虫、野菜のカテゴリーに属する事例を選択させた。そして、選ばれた1つの事例が6種類の特徴をそれぞれ持つことを教えた後、その特徴を持つ事例を選択させた。その結果、カテゴリー事例として選ばれたものが、諸特徴を持つものとして選択される比率が実験1よりも有意に増加したが、カテゴリー事例として選ばれなかったものについては、虫の内的特徴以外、有意な増加が見られなかった。

以上の結果は、López et al. (1992) や Gelman, & O'Reilly (1988) などの結果と異なり、特徴の帰属や帰納的推論を行うとき、幼児が事例の属する上位カテゴリーを考慮していることを示唆している。もちろん、カテゴリーに分類されていない事例でも、特徴を持つものとして選択されていることから (Table 3), 幼児が上位カテゴリーに基づいて演繹的に判断しているわけではない。また、事例の典型性と対人的特徴に関する選択比率との間に関連性が見られたこと、また、動物や虫として選ばれなかった事例でも、実験1より実験2で、内的特徴や発生的特徴を持つものとして選択される比率が増加したことなどを考えると、当然、典型事例との類似性も事例選択に影響を及ぼしていると言える。しかし、同じキリンやサイなどの事例であっても、動物として選ばれたものがそうでないものよりも、例えば、「体の中に血が流れていて、骨がある」ものとして多く選択されたことは、「ソウと同じ動物だから、キリンも体の中に血が流れていて、骨があるだろう」のように、幼児が上位カテゴリーに基づいて帰納的に推論することを示唆している。

このように先行研究と異なる結果が生じたのは、第1に、本研究で取り扱った特徴が幼児にとっても意味のあるものであったためであろう。Table 2に見られるように、各特徴に関する選択比率は、動物・植物・人工物の区別で見ると、12の正負事例が実際にそれらの特徴を持つか否かを反映したものとなっている。もちろん、一般に知識の不十分な幼児がある事例について新しい事実を知ることとはしばしば起こることであり、そのような時、López et al. (1992) や Gelman, & O'Reilly (1988) で示されたように、事例間の類似性に完全に依拠して帰納的推論を

行うかもしれない。しかし、日常生活において幼児に新しい情報が提供されるのは、「紅冠鳥には尺骨動脈がある」のような唐突な形ではないであろう。大人は、幼児の知識のレベルに合わせて、例えば、動脈がどのようなものであるかを身近な事例によって説明するであろう。本研究で取り上げた特徴は、上位カテゴリーの事例にとって重要であると評価されるものであり、そのような説明が幼児に既に与えられていたことも十分考えられる。

先行研究と異なる結果が生じた第2の理由は、特徴に関する選択や帰納的推論が6つの正事例のカテゴリー化と関連付けて検討されたことであろう。確かに、Table 2において、動物の各特徴に関する選択比率を哺乳類から鳥類、両生類、魚類と見たとき、従来の研究 (例えば、Carey, 1985) で見出されたように、人間から系統発生的に類似性が低くなるにつれて、選択の比率が減少している。そして、その結果だけを見る限り、幼児が人間のような典型事例との類似性に基づいて、特徴の帰属を行っているようである。しかし、6つの正事例に注目すると、対人的特徴を除いて、事例の典型性が低くなるにつれて、選択の比率が減少するという明確な傾向は見られない。もちろん、6つの哺乳類の事例と人間との間の類似性が等しいと考えることもできる。しかし、その場合、6事例の中で、動物として選ばれたものとそうでないものとの間で、特徴に関する選択比率に差があることを説明できない。ただし、動物、虫、野菜のいずれの負事例においても、特徴に関する選択比率は、カテゴリーに関する選択比率よりも一般に高くなっている。このことを考えると、特徴に関する各事例の選択に影響を与えるものとして、典型事例との類似性、所属する上位カテゴリー以外に、個々の事例についての経験や知識を挙げることができると。

なお、特徴の種類によって結果に差異が生じたことも、従来の研究結果と異なっている。幼児は、特徴の種類に関係なく、事例間の類似性に基づいて事例選択を行うのではなく、特徴の種類に応じて事例の異なる側面に着目すると考えられる。第1に、動物、虫の知覚的特徴、野菜の部分的特徴に関する選択比率は、実験1でカテゴリー事例に選ばれた事例と選ばれなかった事例との間で差が見られなかったが、実験2でカテゴリー事例として選ばれた事例においてのみ実験1に比べて有意に増加した。このことから、それらの特徴に関する選択を行うとき、幼児は、通常、個々の事例の見かけに注目するが、ある事例が特徴を持つことを教えられると、その事例の属するカテゴリーも考慮すると考えられる。第2に、動物の部分的、機能的特徴、虫の部分的特徴、野菜の内的、発生的特徴に関する選択比率は、実験1でカテゴリー事例に選ばれた事例と選ばれなかった事例の間で差が見られ、さらに実験2でカテゴリー事例として選ばれた事例にお

いてのみ実験1に比べて有意に増加した。つまり、それらの特徴に関する選択は、事例の属するカテゴリーに大きく依存すると考えられる。第3に、動物の内的、発生的特徴、虫の内的特徴に関する選択比率は、実験1でカテゴリー事例に選ばれた事例と選ばれなかった事例との間で差が見られたが、実験2でカテゴリー事例として選ばれた事例だけでなく、選ばれなかった事例においても、実験1に比べて増加する傾向が見られた。幼児は、それらの特徴に関する選択を行うとき、事例間の類似性や事例の属するカテゴリーに注目すると考えられる。最後に、動物、虫、野菜の対人的特徴に関する選択比率は、事例の典型性と高い相関を示した。このことから、幼児は、対人的特徴に関して、とりわけ、典型事例との類似性に注目するのかもしれない。

文 献

- Bransford, J., Sherwood, R., Vye, N., & Rieser, J. (1986). Teaching thinking and problem solving. *American Psychologist*, *41*, 1078-1089.
- Carey, S. (1985). *Conceptual change in childhood*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Gelman, S. A., & Markman, E. M. (1986). Categories and induction in young children. *Cognition*, *23*, 183-209.
- Gelman, S. A., & Markman, E. M. (1987). Young children's inductions from natural kinds: The role of categories and appearances. *Child Development*, *58*, 1532-1541.
- Gelman, S. A., & O'Reilly, A. W. (1988). Children's inductive inferences within superordinate categories: The role of language and category structure. *Child Development*, *59*, 876-887.
- 国立国語研究所. (1981). *幼児・児童の連想語彙表*. 東京: 東京書籍.
- López, A., Gelman, S. A., Gutheil, G., & Smith, E. E. (1992). The development of category-based induction. *Child Development*, *63*, 1070-1090.
- Markman, E. M., & Callanan, M. A. (1984). An analysis of hierarchical classification. In R. Sternberg (Ed.), *Advances in the psychology of human intelligence*, Vol. 2 (pp. 325-365). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Markman, E. M. (1989). *Categorization and naming in children: Problems of induction*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Mervis, C. B., & Rosch, E. (1981). Categorization of natural objects. *Annual Review of Psychology*, *32*, 89-115.
- Nelson, K. (1983). The derivation of concepts and categories from event representations. In E. Scholnick (Ed.), *New trends in conceptual representation: Challenges to Piaget's theory?* (pp. 129-149). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Nelson, K. (1988). Where do taxonomic categories come from? *Human Development*, *31*, 3-10.
- Osherson, D. N., Smith, E. E., Wilkie, O., López, A., & Shafir, E. (1990). Category-based induction. *Psychological Review*, *97*, 185-200.

付 記

本研究は、平成3年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の補助を受けました。本研究を進めるにあたり、武庫川女子大学祐宗省三教授、広島大学山崎晃教授にご指導・ご助言を頂きました。また、実験の実施にあたっては、広島市宇品学園の協力を得ました。記して、感謝申し上げます。

Yuzawa, Masamichi (Naruto University of Education, College of Education). *Feature Attributions and Inductive Reasoning among Preschool Age Children: The Role of Superordinate Categories*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 11-21.

This study explored the effect of superordinate categories on feature attributions and inductive reasoning among preschoolers. In Experiment I, 21 five-, and 19 six-year-olds were presented three sets of stimuli. Each set consisted of twelve drawings from each of three superordinate categories: animals, insects, and vegetables. Subjects were asked to select stimuli as having features relevant to each category. Category members identified as animals, insects, or vegetables were more often selected to have the features, compared with category members not identified. In Experiment II, 21 five-, and 18 six-year-olds were asked to do the same as in Experiment I, except that they were informed that one category member had these same features. The selection rates for category members identified as animals, insects, or vegetables were generally higher than in Experiment I, but the selection rates for category members not identified were similar to those in Experiment I. These results were interpreted as evidence that preschoolers based feature attributions and inductive reasoning, to some extent, on superordinate categories.

【Key Words】 Cognitive development, Concepts, Inductive reasoning, Preschool age children

1992. 2. 27受稿, 1993. 9. 16受理

大学生と高齢者における可能自己と達成関連動機との関係について

宮本 美沙子
(日本女子大学家政学部)

中田 美子
(埼玉県高齢者生きがい振興財団)

堀野 緑
(十文字学園女子短期大学教養学科)

Markus, & Nurius (1986) が, 可能自己の研究に用いた自己概念の調査項目を援用し, 青年と高齢者の, 現在の自己認知, 将来の可能自己を調べ, それと自尊感情, 達成関連動機などとの関係を究明することを目的とした。

青年(大学生, 18~24歳, 男子118名, 女子136名)と高齢者(60~77歳, 男子118名, 女子58名)を対象に, 自己概念(現在の自己の認知, 将来になりたい自己, なれそうな可能自己, なることの重要性), 自尊感情, 達成関連動機(達成動機, 失敗不安動機, 成功不安動機), などについて質問紙法により調査した。その結果, 成功不安動機は大学生の方が得点は有意に高いが, 可能自己, 自尊感情, 達成関連動機(成功不安動機以外の)については, 高齢者の方が得点は有意に高かった。現在の自己の認知を因子分析した結果4因子が抽出され, そのうちのコンピテンスの因子および幸福感・満足感の因子は, 大学生も高齢者も, 可能自己と有意な相関を得た。家族関係の因子に関しては, 高齢者では可能自己と関係があったが, 大学生では関係はなかった。共分散構造分析モデルにより分析した結果, 自尊感情と達成関連動機(成功不安動機以外の)は, 現在の自己から可能自己へのパスにおいて影響を与えていた。

【キー・ワード】可能自己, 自尊感情, 達成関連動機, 大学生, 高齢者

問題・目的

日本の高齢者の達成動機研究に関しては, 稲松らによる一連の研究(たとえば, 稲松・黒岩・浜田・織田・本明, 1986; 稲松・黒岩・浜田, 1987)がみられるものの, まだ十分に究明されていない。個人が将来どのように生きていきたいか, という問題は, 達成関連動機を生涯発達の観点から研究する際の重要な課題といえる。

Maslow (1954) は, 精神的に健康な人々は, 自己実現の欲求にかられて自己の可能性の実現にむけ努力する, ということを指摘している。また, Neugarten, Berkowitz, Crotty, Gruen, Gutmann, Lubin, Miller, Peck, Rosen, Shukin, & Tobin (1964) は, 発達研究において, 中・高齢期の自己の発達を積極的にとらえている。最近, Markus, & Nurius (1986) は, 可能自己(possible selves)という概念をとりあげたが, この可能自己は, それに先立ちMarkus (1977) が発表した, セルフ・スキーマ(自己についての認知的概念化)に関連してとらえられているものである。

Markus (1977) は, セルフ・スキーマのうち方により, 将来の自己についての決断, 推論, 予期などに違いが生じ, セルフ・スキーマに適合する方向で情報処理がなされることを指摘している。そして, 個人のセルフ・スキーマを理解するためには, その個人がとらえる現在や過去の自己概念を知るだけでなく, 将来に対する自己の表象をとらえることが必要だとしている。その後発表された

可能自己の論文(Markus, & Nurius, 1986)においても, 個人の可能自己を知るには, その個人の現在や過去の自己についてのとらえ方を知ることも重要であるが, 同時に, 将来どのようになれると思うか, どのようになりたいか, どのようにはなりたくないか, など, 個人の希望, 恐れ, 目標, 脅威などの認知的要因を含め理解することが必要だと考えている。そのためMarkus, & Nurius (1986) は, 自己概念を調べるにあたり, 現在の自己概念を問うと同時に, 同じ項目について, 将来そのような自己になりたいか, そのようになれる可能性はあるか, そうなることは自分にとって重要であるか, という角度からも回答させている。

たとえば, “楽天的”という特性の場合, 現在の自分は楽天的であるか, ということだけを問うだけでなく, 将来楽天的な自己でありたいか, そうなる可能性はあるか, 楽天的ということはあなたにとり重要なことか, というように, 将来の自己についての表象を探っていくのである。それにより, 自己の認知的側面と動機的側面を橋渡しすることができる, と, Markus, & Nurius (1986) はとらえている。このような, 現時点のみでなく将来の自己の可能性を認識することは, 生涯発達の観点から鑑みて, 重要な問題だと言える。

本研究では, 達成関連動機が生涯発達の中でどのような変化があるのかを明らかにするために, 青年期と高齢期の2群について比較検討をする。その際に, これら2群の年齢の違いは, 将来の自己の展望の違いをもたらし

ていることが推測され、可能自己の違いと結びつくことも考えられる。そして、この可能自己は、達成関連動機と深いかわりをもっていると考えられるのである。こうした2群の相違を可能自己と達成関連動機の観点から検討する。

また、本研究で取り上げる高齢者は、Neugarten et al. (1964) が指摘するように、“young-old”である高齢者の理想的な人々であり、敢えてこうした層を被験者として、青年群との比較を試みる。ただし、意欲的な高齢者の理想的な人々とはいえず、それほど特殊ではない対象として、老人大学の参加者の協力を求め、あるタイプの高齢者群の代表とする。

まず、Markus, & Nurius (1986) が用いた自己概念の調査項目が日本の被験者に調査可能であるかを検討することを行なう。そして、次に、可能自己という概念が、達成関連動機のどのような側面と関係するのかを探索することを試みる。因果関係の解明については、近年、共分散構造分析 (Joreskog, & Sorbom, 1984) が注目され、日本においても、豊田 (1990)、豊田・前田・室山・柳井 (1991) の研究が見られる。そこで、本研究においても、共分散構造分析の手法を用いて、現在の自己像がどのように可能自己に結びつくのかを検討する。

方 法

被験者：東京近郊の私立大学生 254 名（男子 118 名，女子 136 名，年齢 18～24 歳，平均 19 歳），高齢者 176 名（男子 118 名，女子 58 名，年齢 60～77 歳，平均 66 歳）。高齢者は、東京周辺の某市が主催する老人大学の参加者の協力を得た。高齢者では、高等学校，旧制中学校等の卒業が 48.0%，短大，旧制高校等の卒業が 32.8% を占める。最長職については，常勤の事務系の仕事に就業していたのは 33.6%，会社または団体の役員であったのは 19.5% であるが，現在は 81.9% が無職である。83.1% が現在配偶者と同居しており，92.1% が子どもをもち，81.4% が孫をもっている。

調査材料：

1. 自己概念についての質問項目：（現在の自己概念・将来なりたい自己・なれそうな可能自己・なることの重要性について各 79 項目。Markus, & Nurius, 1986）「全くない」から「非常にそうだ」までの 5 件法で評定を求めた。（項目については Table 1 を参照）
2. 自尊感情（10 項目。Rosenberg, 1965）：「全くない」から「非常にそうだ」までの 5 件法で評定を求めた。（項目の例：「私は，自分にはいくつかの見どころがあると思っている。」「私はときどき自分がでんでめだと思ふ（反転項目）。」）
3. 達成関連動機（達成動機 20 項目，失敗不安動機 10 項目，成功不安動機 10 項目。山内，1980）：「はい」・

「いいえ」の 2 件法で評定を求めた。山内 (1980) の項目を採用した理由は，達成関連動機として重要な達成動機，失敗不安動機，成功不安動機の 3 つをとりあげていること，ならびに，それぞれの動機につき，Atkinson (1957) や Homer (1974) などよく知られた研究を参考にして項目を選定していることによる。

（達成動機の項目の例：「やろうと思うことはなんでも精一杯やる。」「仕事に成功するようにと強い動機づけを持っている。」）

（失敗不安動機の項目の例：「テストを受ける前（学生でない場合；大勢の人の前で発表する前）は，とても心配する。」「テスト（発表など）の準備が不十分なとき，あわててしまって知っていることでもうまく考えられなくなる。」）

（成功不安動機の項目の例：「成功した人間は，他人から冷淡で紳士気取りだと思われがちである。」「他人よりも，うまくやろうとすると，多くの友人を失うような気がする。」）

4. 生活態度についての質問項目（13 項目。Markus, & Nurius, 1986）：「そうは思わない」から「そう思う」の 5 件法で評定を求めた。

（「私には自慢できることが少しはある。」「時々私は何事もどうもうまく運べないと感じる（反転項目）。」）

5. 健康についての質問項目（23 項目。Markus, & Nurius, 1986）：「常に」から「全くない」までの 5 件法で評定を求めた。

（項目の例：「気が遠くなったりめまいがしたりする。」「食欲不振がある。」）

手続き：大学生については，心理学受講の 2 クラスの学生を対象に，教室において質問紙に回答してもらった。高齢者については，老人大学の 2 クラスを対象に参加してきた日に教室において質問紙に回答してもらった。

調査年月：1991 年 10 月～11 月

結 果

1. 項目分析

(1) 自己概念についての質問項目

本研究では，まず，被験者全員について，Markus, & Nurius (1986) の現在の自己概念の項目が日本において調査可能であるかを検討した。79 項目についてそれぞれ得点分布を見たところ，いくつか調査項目に対する被験者の反応が「あてはまらない」という回答に極端に偏っているものがあつた。たとえば，“配偶者，子供を虐待している”，“葉あるいはアルコール中毒”，“ガン患者”，“早死”，“まひしている”などであり，ほとんどの被験者が「あてはまらない」という回答をしていた。すなわち，本

Table 1 現在の自己についての因子分析バリマックス回転後の負荷量 (N=430)

No.	項目内容	F I	F II	F III	F IV
・69	愚かな	.74	.17	.10	.01
・79	劣っている	.70	.28	.06	.08
・60	醜い	.69	.11	.10	.13
・21	挫折している	.66	-.05	.18	.23
・76	きらわれる	.66	.02	-.04	.11
・37	孤独	.65	-.07	.02	.30
・58	失敗者である	.65	-.08	.07	.10
・11	意気消沈した	.64	.09	.18	.23
・67	怠惰な	.64	.12	.34	-.01
・47	無能	.63	.31	.04	.10
・64	根気が続かない	.62	.17	.20	-.10
・55	混乱している	.61	-.12	.23	.15
・9	悲観的	.57	.08	.32	.17
・62	実力が発揮できない	.57	.11	.07	.06
・38	弱々しい	.53	.17	.13	.07
・53	他の人と一緒にやっつけられない	.48	-.13	-.05	.31
・6	退屈な	.46	.16	.16	.24
・18	取るに足らぬ	.45	.15	.04	.04
・29	人気がない	.44	.23	-.23	.05
・49	こわがり	.43	.01	.32	-.20
52	自信がある	.35	.65	.25	.17
34	有能な	.12	.62	.16	.26
16	力強い	.13	.61	.16	.18
46	魅力的	.15	.59	.04	.34
39	野心的	-.11	.58	-.20	.04
31	知能が高い	.13	.58	.13	.16
35	自分なりの生き方をもっている	.12	.57	.29	.26
4	高く評価される	.17	.57	.17	.26
10	自己主張的	.02	.57	-.08	.03
23	創造的	.03	.56	.25	.24
71	出世する	-.03	.56	.05	.08
74	頼りがいがある	.18	.52	.29	.30
51	自己決定できる	.20	.51	.30	.19
54	活動的	.24	.50	.20	.20
30	自分自身を守ることができる	.18	.42	.23	.22
15	豊か	.03	.41	.10	.33
75	親である	.18	-.03	.84	-.01
22	結婚している	.18	-.03	.83	.00
12	高い名誉を受ける	.09	.12	.72	.06
59	独立している	.02	.26	.56	-.04
36	健康を強く意識している	.07	.21	.43	.19
41	しあわせ	.22	.23	.14	.62
33	ゆったりしている	.14	-.00	-.02	.60
65	愛される	.07	.35	.05	.58
45	満足している	.29	.27	.21	.54
42	たくさんの友達をもっている	.12	.33	-.11	.54
1	楽天的	.14	.03	-.11	.49
57	興味をもっている	-.02	.38	.15	.49
78	開放的	.05	.30	.12	.48
56	よく適応する	.14	.25	.12	.46
66	思いやりのある	.05	.28	.39	.44
68	よくしつけられた	.05	.24	.13	.41
	因子負荷量2乗	8.83	7.56	5.47	5.12
	寄与率	12.80	10.96	7.94	4.42
	累積寄与率	12.80	23.76	31.70	36.12

注. ・のついた項目はすべて反転項目である。
表の乱雑さを避けるため、どの因子にも.35以上の負荷量をもたない項目は掲載しなかった。

研究における被験者に該当する項目ではないことが示されていた。このような項目を含んだまま分析することには問題があるので、それらの10項目は除くことにした。以下はすべて69項目において分析を進める。

次に、主成分分解・バリマックス法により因子分析することを試みた。Markus, & Nurius (1986) では、因子分析を行っていないが、共分散構造分析を行なうためには、現在の自己像の要因が内的整合性の高い項目群で構成されることが望まれる(豊田, 1992)。そこで、因子分析により、現実の自己像の要因をいくつか抽出することが必要である。

その結果、固有値、累積寄与率、因子の解釈可能性等から、4因子でとらえることが適当であると判断し、4因子を抽出した。

結果をTable 1に示す。この結果から、第I因子は“愚かな”・“劣っている”・“醜い”・“根気が続かない”などの項目(いずれも反転項目)から「優劣などの評価と意欲」の因子、第II因子は“自信がある”・“有能な”などの項目から「コンピテンス」の因子、第III因子は“親である”・“結婚している”などの項目から「家族関係」の因子、第IV因子は“しあわせ”・“愛される”・“満足している”などの項目から「幸福感・満足感」の因子と命名した。それぞれの因子得点をそれぞれの因子の値とした。

(2) 自尊感情

全10項目について、主成分分解・バリマックス回転により因子分析したところ、一因子構造であることが確かめられた。次に、項目相関(その項目とその項目を除いた全体との相関)を見たところ、1項目(「私は自身に対して前向きな態度をとっている」)については有意な相関が見られず、他の項目はすべて.34から.58の範囲で有意な相関であった。そこで、その項目を除外し、他の項目の加算平均値を自尊感情についての項目値とした。

(3) 達成関連動機(達成動機、失敗不安動機、成功不安動機)

達成動機: 主成分分解・バリマックス法による因子分析および項目相関の結果を検討したところ、2因子に分けて捉える方が適当であると判断した。2因子(第I因子・達成動機、第II因子・成功動機)それぞれに負荷量の高い項目の加算平均値をそれぞれの因子の値とした。

失敗不安動機: 主成分分解・バリマックス法による因子分析の結果、一因子構造が見られた。そこで、項目相関から項目分析を行なった。2項目(「試験前にあわてて詰め込んでも効果がないと普通いわれているが、試験(学生でない方の場合には発表など)のすぐ前にも詰め込むことができるし、試験(発表など)でそれをうまく思い出せる」「いったんテスト(学生でない方の場合には発表など)を始めたら、どんなことにも気を散らさない」)

を除いては、全ての項目に .28 から .45 の範囲で有意な相関が見られたので、その 2 項目を除く全項目の加算平均値を失敗不安動機の値とした。

成功不安動機：同様に主成分分解・バリマックス法による因子分析および項目相関の結果を検討したところ、2 因子に分けて捉えるのが適当であると判断した。2 因子（第Ⅰ因子・対人的配慮、第Ⅱ因子・成功の否定）それぞれに負荷量の高い項目の加算平均値をそれぞれの因子の値とした。

(4) 生活態度についての質問項目

全13項目について、主成分分解・バリマックス回転により因子分析したところ、一因子構造であることが確かめられた。次に、項目相関（その項目とその項目を除いた全体との相関）を見たところ、1 項目（「時々私はいじめられていると思う（反転項目）」）については有意な相関が見られず、他の項目はすべて .38 から .52 の範囲で有意な相関であった。そこで、その項目を除外し、他の項目の加算平均値を生活態度についての項目値とした。

(5) 健康についての質問項目

全23項目について、主成分分解・バリマックス回転により因子分析したところ、一因子構造であることが確かめられた。次に、項目相関（その項目とその項目を除いた全体との相関）を見たところ、1 項目（「自分の人生の末期について考えたことがありましたか」）については有意な相関が見られず、他の項目はすべて .29 から .56 の範囲で有意な相関であった。そこで、その項目を除外し、他の項目の加算平均値を健康についての項目値とした。

2. 諸変数の相互関連性

諸変数の得点の平均値および相関を大学生と高齢者そ

れぞれでみたところ、Table 2 および Table 3 のような結果となった。

多くの変数において男女の得点に有意差が認められないので、以後の分析においては、男女計により大学生および高齢者についてみていくことにする。

大学生と高齢者の諸変数の平均値をみると、成功動機、失敗不安動機、対人的配慮、成功の否定、生活態度以外は、いずれも大学生よりも高齢者の方が有意に高い値であった。

次に、大学生と高齢者のそれぞれについて、諸変数間の相関をみよめる (Table 3)。

現在の自己概念の因子のうち、FⅠ“優劣などの評価と意欲”およびFⅡ“コンピテンス”は、大学生も高齢者も、「将来なりたい自己」、「なれる可能自己」、「(自己概念における) 将来なることの重要さ」、「自尊感情」、および、「達成動機」などと、すべて有意に高い正の相関値を示している。また、FⅣ“幸福感・満足感”は、大学生および高齢者において、「達成動機」とは有意な相関を示さなかったが、「将来なりたい自己」、「なれる可能自己」、「(自己概念における) 将来なることの重要さ」、および「自尊感情」、などとは、すべて有意に高い正の相関値を示していた。

一方、「失敗不安動機」に関しては、高齢者も大学生も、「失敗不安動機」の低い者の方が、「なれる可能自己」について高い値を得ていると言える。また、「将来なりたい自己」と「(自己概念における) 将来なることの重要性」については、大学生は .60 という正の相関を得ていたが、高齢者において -.18 という負の相関であった。また、「健康」に対しても、高齢者と大学生では異なる認識が見られた。たとえば、「(自己概念における) 将来なることの

Table 2 諸変数における高齢者と大学生の平均値とその差

変 数 名	高齢者(H)		大学生(L)		両者の差 t 値		
	平均値	S D	平均値	S D			
①自己概念 ①-1 現在の自己 FⅠ(優劣などの評価と意欲)	4.09	.52	3.66	.66	7.25***	H>L	
	FⅡ(コンピテンス)	2.92	.54	2.72	.65	3.45***	H>L
	FⅢ(家族関係)	4.07	.74	2.07	.64	28.95***	H>L
	FⅣ(幸福感・満足感)	3.38	.49	3.22	.60	3.07***	H>L
①-2 将来なりたい自己	3.24	.31	3.06	.25	6.17***	H>L	
①-3 可能自己	3.37	.33	3.27	.37	2.87**	H>L	
①-4 重要性	2.92	.54	2.67	.43	5.15***	H>L	
②自尊感情	3.08	.48	2.69	.61	7.41***	H>L	
③達成動機	③-1・達成動機	1.82	.17	1.63	.23	9.83***	H>L
	・成功動機	1.55	.25	1.52	.28	1.19	
	③-2 失敗不安動機	1.31	.30	1.35	.28	-1.34	
③-3 成功不安動機・対人的配慮	・成功の否定	1.54	.29	1.68	.26	-4.92***	H<L
		1.42	.26	1.56	.26	-5.42***	H<L
④生活態度	2.41	.57	2.68	.62	-4.57***	H<L	
⑤健康	4.45	.43	4.21	.59	4.83***	H>L	

p<.01 *p<.001

注. FⅠ, FⅡ, FⅢ, FⅣは、現在の自己像の因子分析の項目の加算平均値

Table 3 高齢者と大学生それぞれの諸変数の相関関係 (高齢者N=176, 大学生N=254)

高齢者	F I	F II	F III	F IV	可能	重要性	自尊	達成	成功	失敗	対人	成功否定	態度	健康
将来なりたい	.52*	.53*	.15+	.49*	.78*	-.18+	-.16*	-.00	-.15+	.01	.00	-.16*	.07	.09
可能自己	.41*	.39*	.13+	.34*	.01	.56*	.34*	.29*	-.25*	.28*	-.08	.20	.23*	
重要性	.20*	-.24*	-.18*	-.21*		-.07	-.08	-.04	.06	-.05	-.15*	-.01	.07	
自尊感情	.33*	.46*	.09	.24*			.47*	.35*	-.38*	.22*	.08	.69*	.33*	
達成動機	.33*	.21*	.05	.01				.36*	-.27*	.28*	.08	.33*	.33*	
成功動機	.19*	.28*	-.06	.04					-.15+	.12	.25*	-.21*	.26*	
失敗不安動機	.17*	.22*	.01	.10						.33*	.10	-.32*	.15*	
対人的配慮	-.25*	-.10	.04	-.03							-.02	-.26*	-.30*	
成功の否定	-.03	.21*	-.02	-.13+								.11	.08	
生活態度	.42*	.49*	-.03	.14									-.38*	
健康	.36*	.02	-.03	.06										

大学生	F I	F II	F III	F IV	可能	重要性	自尊	達成	成功	失敗	対人	成功否定	態度	健康
将来なりたい	.26*	-.50*	-.14+	-.38*	-.36*	.60*	-.19*	-.05	-.28*	.11+	.05	-.10+	.21*	.17*
可能自己	.48*	.62*	.04	.42*		-.08	.68*	.39*	.40*	-.38*	.23*	.08	.32*	.21*
重要性	.30*	-.23*	.04	-.27*		-.02	.08	-.16*	.02	.18*	-.07	-.00	.20*	
自尊感情	.63*	.53*	-.06	.31*			.42*	.33*	.47*	.33*	-.01	.79*	.33*	
達成動機	.39*	.33*	.17*	.05				.33*	-.19*	.13*	-.07	.40*	.26*	
成功動機	.17*	.45*	.02	.01					-.14*	.05	.14*	.24*	.04	
失敗不安動機	-.29*	.38*	-.01	.13*						.18*	.02	-.43*	-.18*	
対人的配慮	.37*	.12+	-.18*	-.00							-.02	-.29*	.30*	
成功の否定	.02	.12+	-.04	-.07								-.07	-.06	
生活態度	.41*	.47*	-.01	-.15*									-.33*	
健康	.63*	-.13*	-.12+	.12+										

*p<.1 *p<.05

注. F I, F II, F III, F IVは現在の自己の因子(F I: 優劣などの評価と意欲, F II: コンピテンス, F III: 家族関係, F IV: 幸福感・満足感)

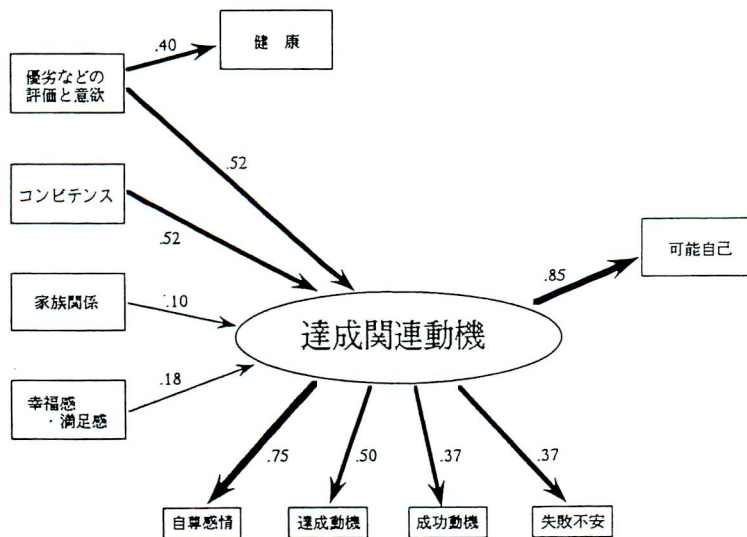


Figure 1 高齢者における因果関係

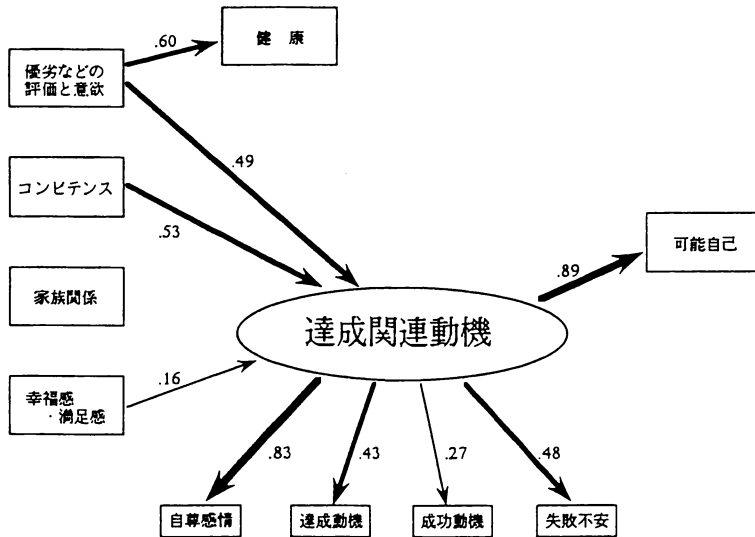


Figure 2 大学生における因果関係

重要性」と「健康」の関係は、高齢者では、.07と有意な相関ではないのに対して、大学生では、.20と正の有意な相関であった。

3. 可能自己への共分散構造分析

本研究はどのような変数が可能自己に関係するのかを探索的に検討するものであった。そのため、変数の数が多いので、このままモデルを組むことは複雑であると思われた。そこで、まず、重回帰分析を行ない、可能自己に関係する変数を吟味した。関係の低い項目を省いた結果、現在の自己像についての4因子と、健康についての項目、自尊感情についての項目、および達成動機、成功動機、失敗不安動機のそれぞれの項目をとりあげることにした。

また、自尊感情についての項目は、達成動機、成功動機、失敗不安動機とそれぞれ高い相関関係にあった。さらに、本研究においては、共分散構造分析のモデルを用いるが、その構造において、自尊感情に含まれる要因と、達成動機と近似の構造を示した。そこで、類似の構造を含めたこの4項目を達成関連動機として、一つにまとめた。失敗不安動機については、Atkinson (1957)においても、 $T_A = T_S + T_{-f}$ (達成傾向=達成動機+失敗不安動機)として算出しているの、本研究はこれに準じて算出した。そして、現在の自己の4因子から健康と達成関連動機を媒介として、どのように可能自己に関係するか共分散構造分析により解明することを試みた。分析

は、SASのバージョン6によるCALISのプログラム(豊田, 1992参照)を用いて、大学生と高齢者それぞれ別個に行なった。その結果を、Figure 1, Figure 2に示す。数字はすべて標準化された因果係数である。

モデルの適合性は、高齢者では、GFI (Goodness of Fit Index, 適合度指標)が.94であり、AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index, 不安定度を割引した適合度指標)が.88であった。大学生では、GFIが.92であり、AGFIが.85であった。豊田(1992)によれば、これらの値は、モデルの適合性が妥当なことを示していると言える。

考察と討論

1. 大学生と高齢者の諸変数について

本研究の結果では、成功動機、失敗不安動機、対人的配慮、成功の否定、生活態度以外は、いずれも大学生よりも高齢者の方が有意に高いという結果が示された。

アメリカでの他の研究(Cross, & Markus, 1991; Ryff, 1991)においては、将来の可能性などに関しては、加齢と共に平均値が低下する結果が示されている。本データでは、生理的には衰えを示すと思われる高齢者の方が大学生よりも、現在の自己像の各要因において自己を肯定的にとらえていることが示された。さらに、高齢者は、将来への希望や期待を大学生よりもより多く示した。すなわち、現在の自己像自体が大学生よりも高齢者の方が高いとはいえ、それでも、将来の可能自己を高齢者は大学生よりも高くとらえているのである。

たとえば, Baltes, & Smith (1987), Featherman, & Peterson (1987) および Perlmutter (1987) は, 次のように指摘している。すなわち, 従来の発達研究の関心は加齢と共に知的発達が減退することばかりにむけられていたが, 高齢者にとり記憶等の知能では不利になることがあっても, 認知的, 情緒的な面においては利点もあることや, 実利的な知能の点では, 発達がみられるという。本研究の高齢者群において, 将来への希望や期待を大学生よりも多く示している点も, 情緒的あるいは動機づけの点からみて, 減退ばかりでないことを示している点で, 上記の Baltes, & Smith (1987) 等の指摘と軌を一にしている。

このような, 高齢者の発達についての示唆に富む問題提起は, ひいては, これからの生涯発達の発達研究における「発達」ということ自体のとらえ方を問うものではないだろうか。

また, 大学生と高齢者のそれぞれにおける, 諸変数間の相関結果 (Table 3) からは, 現在自分を「コンピテンス」があると認知し, 幸福であり満足している者は, 将来の「可能自己」について明るい展望がもて, 「自尊感情」や「達成動機」も高いと言える。さらに, 大学生においては, 将来になりたい自己像はそのまま「(自己概念における) 将来なることの重要性」であるのに対して, 高齢者においては, 将来そうなりたいと思っているものとそれは重要だと思っているものとの間に関係がない。また, 「健康」についても, 高齢者は, 大学生に比べ, 時間的, 物理的な制限からか, 将来への希望や自己の健康と「(自己概念における) 将来なることの重要性」を別なものとして, 淡々と認識しているように思われる。

2. 可能自己のモデルについて

結果のモデルから因果関係を推察する。現在の自己像は, 高齢者, 大学生とも, 「優劣などの評価と意欲」の因子のみ健康と関係を持ち, 健康からは, 可能自己へ関係する有意な係数はみられていない。これに対し, 達成関連動機からの可能自己に対する係数は, 高齢者では .85, 大学生では .89 とそれぞれ高い値を示していた。そして, 現在の自己像から達成関連動機への関係は, 大学生では, 「優劣などの評価と意欲」, 「コンピテンス」, 「幸福感・満足感」の3因子が有意なパス係数を示していたが, 「家族関係」は有意なパス係数はみられなかった。しかし, 高齢者では, 「家族関係」の因子は達成関連動機に対して, .10 と低い有意なパス係数をもっていた。「家族関係」の項目は, Markus, & Nurius (1986) の項目をそのまま使用しているため, 「親である」, 「結婚している」など, 現在の自己像としての大学生にはあてはまらないことが多いかもしれないが, それを留保しても, このことから, 高齢者にとっては, 家族関係の因子も重要であることが示

されたと言える。

また, Figure 1, Figure 2 に示されたように, 達成関連動機から可能自己への係数が非常に高いという結果から, 現在の自己像から, 可能自己という概念に対して, 達成関連動機というものが大きな役割を果たすことが明らかになった。

本研究では, Markus, & Nurius (1986) が用いた可能自己の調査を援用し, 本人の現在の自己の認知と将来の可能自己についてのとらえ方との関係, また, 達成関連動機と可能自己との関係, さらに, これらの関係が青年(大学生)と高齢者とでは異なるかどうかについて検討した。生涯発達の視野に立つとき, 青年と高齢者の心理特性の単なる量差の比較をすることはあまり意味がないのではないと思われる。物理的・時間的に, 青年(大学生)と高齢者とでは条件差が否めないからである。むしろ, 違いはあるものの, 発達しつづける人間として, それぞれどのような要因が「将来になりたい自己」にとって重要であるかというように問題をとらえていくことが必要であろう。

本研究の結果では, 先に述べたように, 現在の自己像, 可能自己, および自尊感情において, 高齢者の方が大学生よりも高い値を示していた。この結果は, 高齢者と青年との比較を行なっている Cross, & Markus (1991) や Ryff (1991) の結果とは異なる結果である。高齢者は加齢によって, 肉体的な衰えが強調されがちであるが, 本研究の結果からは, 加齢しても, 精神的には衰えは示されていないかった。

また, 本研究の結果から, 大学生においても高齢者においても, 現在の自己像における「コンピテンス」の因子は可能自己にとって重要であった (Table 3)。また, 同様に, 大学生においても高齢者においても, 自尊感情や達成動機, 成功動機, 失敗不安動機という達成関連動機が可能自己に大きな影響を与えていること (Figure 1, 2) は重要な知見を得られたと言える。

なぜならば, 人間は, 年をとるという不可避な制約を受けながらも, 自己への有能感を持ち, 自己の動機を高く保っていれば, いつまでも自己への可能性を持ち続けるという発達を示していると言えるからである。

さらに, Figure 1, Figure 2 に示されるように, 大学生にとっては「家族関係」の因子と可能自己とは無関係であったのに対し, 高齢者にとってはこの両者には関係があり, 高齢者の可能自己には, 「家族関係」の因子が重要であると言える。高齢者社会になりつつあるとともに核家族化も進む中の高齢者の孤立化の問題点が指摘されている中で, 高齢者にとって, 家族関係の意義が認識される場所である。

Maslow (1954) は, 精神的に健康な人々が, 自己実現の欲求にかられて自己の可能性の実現にむけて努力する

ことを指摘している。前述したように、本研究における高齢者は、老人大学の参加者という特殊性はあるが、本研究の結果から、一般の高齢者においても可能自己の実現にむけて努力する傾向があることが推測できる。本研究の結果は、高齢者を「サクセスフル・エイジング（加齢を健康や生きがい等の喪失への道ととらえず、より一層前向きに生きる理想的人生の過程ととらえる。そして、過去にとらわれず、常に将来をみつめていく。）」というようにポジティブにとらえなおしたButler, & Lewis (1977)の知見を日本においても実証するものであろう。

なお、Markus, & Nurius (1986) は、なりたい自己だけでなく、どのようにはなりたくないかという負の理想自己についても着目しているが、本研究においては特にその点は検討しなかった。今後はその点を検討したい。また、本論文では、大学生群と高齢者群の2群の比較に焦点を当て分析したが、大学生、高齢者それぞれの群内においてさらに分析を重ね、個人差の要因を探っていく必要がある。

文 献

- Atkinson, J. W. (1957). Motivational determinants of risk-taking behavior, *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- Baltes, P. B., & Smith J. (1987). Wisdom: A prototype of cognitive progression in adulthood. *Paper presented at IXth Biennial Meeting of ISSBD*, Tokyo, Japan.
- Butler, R. N., & Lewis, M. L. (1977). *Aging and Mental health: Positive psychosocial approaches*, 2nd ed. Mosby Company.
- Cross, S., & Markus, H. (1991). Possible selves across the life span. *Human Development*, **34**, 230-255.
- Featherman, D. L., & Peterson, J. G. (1987). Adaptive competence, expertise and career management. *Paper presented at IXth Biennial Meeting of ISSBD*, Tokyo, Japan.
- 稲松信雄・黒岩誠・浜田正幸・織田正美・本明寛. (1986). 高齢者の投影法による想像力の研究Ⅱ. *日本心理学会第50回大会発表論文集*, 493.
- 稲松信雄・黒岩誠・浜田正幸. (1987). 高齢者用TATの有効性の検討. *日本心理学会第51回大会発表論文集*, 464.
- Horner, M. S. (1974). Performance of men in noncompetitive and interpersonal competitive achievement-oriented situations. In J. W. Atkinson, & J. O. Raynor (Eds.) *Motivation and achievement* (pp. 237-254). New York: John Wiley & Sons, Inc.
- Joreskog, K. G., & Sorbom, D. (1984). *LISREL VI User's Guide: Analysis of linear structural relationships by the models of maximum likelihood*. Chicago: National Education Resources.
- Markus, H. (1977). Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 63-78.
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, **41**, 954-969.
- Maslow, A. H. (1954). *Motivation and personality*. Harper & Row.
- Neugarten, B. L., Berkowitz, H., Crotty, W. J., Gruen, W., Gutmann, D. L., Lubin, M. I., Miller, D. L., Peck, R. F., Rosen, J. L., Shukin, A., & Tobin, S. S. (1964). *Personality in middle and late life*, New York: Arno Press.
- Perlmutter, M. (1987). Development of competence in adulthood. *Paper presented at IXth Biennial Meeting of ISSBD*, Tokyo, Japan.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- Ryff, C. D. (1991). Possible selves in adulthood and old age: A tale of shifting horizons. *Psychology and Aging*, **6**, 286-295.
- 豊田秀樹. (1990). 共分散構造の表現. *教育心理学研究*, **38**, 438-444.
- 豊田秀樹. (1992). SASによる共分散構造分析. 竹内啓(監修), SASで学ぶ統計的データ解析1, 東京: 東京大学出版会.
- 豊田秀樹・前田忠彦・室山晴美・柳井晴夫. (1991). 高等学校の進路指導の改善に関する因果モデル構成の試み. *教育心理学研究*, **39**, 316-323.
- 山内弘継. (1980). 達成関連動機の測定尺度の分析. *教育心理学研究*, **28**, 276-283.

Miyamoto, Misako (Japan Women's University); Nakada, Yoshiko (Saitama Foundation for the promotion of worth living for elderly people) & Horino, Midori (Jumonji-Gakuen Junior College). *Possible Selves, Self-Esteem, and Motivation: A Study of College Students and the Elderly*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 22-30.

This survey concerned the relationship between measures of possible selves, motivation and self-esteem, in elderly and College students. College students (118 men and 136 women; ages 18-24) and elderly people (118 men and 58 women; ages 60-77) completed a questionnaire form. Questions concerned participants' possible selves (Markus, & Nurius, 1986), self-esteem (Rosenberg, 1965), and achievement-related motives (Yamauchi, 1980). The mean fear-of-success score for college students was higher than that for the elderly. But mean scores for the elderly were higher than those for college students for possible selves (like-to-be self; probable self; important-to-become self), self-esteem, and achievement motives. Factor analysis revealed that four factors contributed significantly to participant's current sense of self. For both age groups, the factors of competence, happiness and contentment were significantly related to possible selves scores. The fourth factor, family relationships were related to possible selves, but only for the elderly subsample. Self-esteem and achievement motives contributed significantly to possible selves scores, as revealed by a covariant structure model analysis.

[Key Words] Possible selves, Self-esteem, Achievement-related motives, College students, Elderly

1992. 10. 6受稿, 1994. 1. 5受理

英語—日本語間で生じる言語内・言語間ストループ効果の検討： 大学生と中学生の比較

池田 智子 松見 法男 森 敏昭
(広島大学教育学研究科) (広島大学教育学部)

本研究の目的は、言語内・言語間ストループ、逆ストループ課題を用いて、日本人の大学生と中学生が、英語と日本語という2つの言語をどのような処理経路を経て処理しているのかを明らかにすることであった。被験者は、言語内ストループ課題では、色名単語の単語を無視して、色に対する命名を行った。また、言語内逆ストループ課題では、色名単語の色を無視して、単語に対する読み上げを行った。これらの課題においては、単語の言語と反応言語は同じ言語であった。一方、言語間ストループ課題と言語間逆ストループ課題では、単語の言語と反応言語は異なっていた。この言語内、言語間ストループ、逆ストループ課題における両被験者群の干渉のパターンは、被験者の英語学習の段階と求められた反応の種類によって、2言語の処理経路が異なることを示唆する結果であった。本実験の結果について、単語連結仮説と概念媒介仮説という2つの仮説から考察を加えた。

【キー・ワード】ストループ課題、逆ストループ課題、英語、日本語、心理言語学

問題と目的

第2言語の学習者が、2つの異なる言語をどのように処理しているのかという問題は、これまでの心理学研究の中の大きな問題の1つであった。従来この問題については、2つの異なった見解が存在する。1つは、2つの言語には共通する処理システムが存在するという見解である (Kolers, 1966; Lopez, & Young, 1974; MacLeod, 1976)。もう一方は、2つの言語は、それぞれ独立した処理システムで処理されるという見解である (Kolers, 1963; Tulving, & Colotla, 1970)。

この問題を解明するためにストループ課題を用いる試みは、1960年代の後半から行われてきた。通常のストループ課題 (Stroop, 1935) では、色づけされた色名単語 (例：緑色の「あか」) を呈示し、色に対する命名をもとめる。この命名時間は、色片に対する命名反応時間より長くなる。これは、色の命名に単語からの干渉が生じているためである。この干渉は、色についての情報が概念処理を経た後で、言語反応されるために、単語と同じ言語処理のシステムに送られることで生じると考えられている。こういった通常のストループ課題は、干渉する単語と反応言語が同じ言語であるところの、言語内ストループ課題 (intra-lingual Stroop task) であり、そこで生じる干渉効果は言語内ストループ干渉効果である。これに対して、干渉語と反応言語に別の言語を用いた言語間ストループ課題 (inter-lingual Stroop task) がある。この課題では、色づけされたフランス語単語の色を英語で命名したり、反対に色づけされた英語単語の色をフランス語で命名することをもとめる。この言語間ストループ課題にお

いても、先にあげた言語内ストループ課題と同様、色の命名に対する単語からの干渉が生じることが明らかになっている (Dalrymple-Alford, 1968; Dyer, 1971; Kiyak, 1982; Preston, & Lambert, 1969)。これは言語内ストループ干渉効果に対して言語間ストループ干渉効果と呼ばれており、この干渉効果は、どの処理段階かは同定できないものの、2つの言語間で共通する処理が行われていることを示唆するものである。

ところで、この言語間ストループ干渉効果には、被験者の第2言語に対する熟達度が関わっているという報告がある。Mägiste (1984) は、ドイツ語を母語とする、スウェーデンに移住したドイツ人を被験者として、移住後の年数の違いによるストループ干渉効果の比較を行っている。その結果、言語間ストループ課題では、移住後の年数が短い被験者では母語であるドイツ語からの干渉が大きく、移住後の年数が長い被験者ではスウェーデン語からの干渉が大きいという結果が出ている。これは反応する言語がドイツ語、スウェーデン語の場合ともに、みとめられた結果である。

これに対して、単に言語の熟達度ではなく、第2言語の学習段階に応じた学習者の処理経路の違いが干渉効果の大きさに関わっていることを示唆する実験結果も得られている。Chen, & Ho (1986) は、英語を学習している小学生から大学生までの中国人を被験者にして、英語と中国語の言語間・言語内ストループ干渉効果を検討している。その結果、小学生は英語で反応する場合、英語干渉語より中国語干渉語からの干渉が大きいのにに対し、大学生は英語で反応をする場合、中国語干渉語より、英語干渉語からの干渉の方が大きいことが明らかになった。

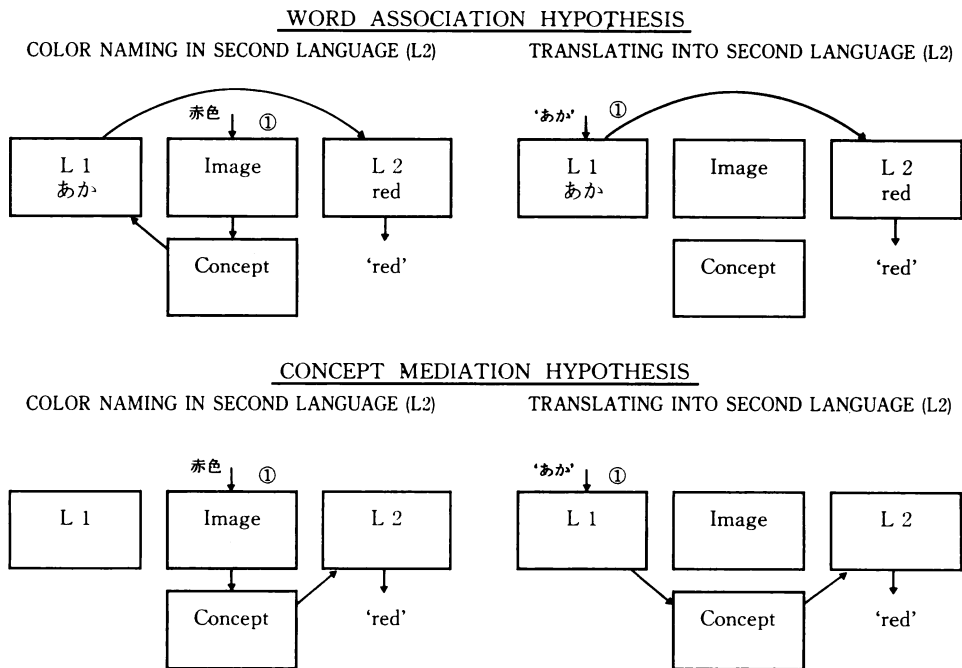


Figure 1 The processing steps in color naming and translating, according to word association hypothesis and concept mediation hypothesis based on Potter, Von Eckardt, & Feldman (1984)

長年英語を学習している大学生であっても、英語より母語である中国語に対する熟達度の方が高いと考えられる。しかし、この大学生が英語で反応する場合には、中国語干渉語より英語干渉語からの干渉が大きいという結果が得られた。このことから、単純に干渉言語に対する熟達度のみが言語間干渉の大きさに影響しているとはいえないと考えられたのである。Chen, & Ho (1986) はこの結果について、英語学習の初期段階にある小学生と後期段階に達した大学生の間の、2つの言語に対する処理経路の違いによって説明を試みている。

これまで、第2言語と母語の処理経路については、単語連結仮説 (word association hypothesis) と概念媒介仮説 (concept mediation hypothesis) という2つの仮説が出されている (Potter, Von Eckardt, & Feldman, 1984, Figure 1)。単語連結仮説では、第2言語の単語はそれに対応する母語の中の単語と直接結びついていると考える。そこで、第2言語へのアクセスは、母語を通して行われることになる。これに対して、概念媒介仮説では、第2言語と母語の単語同士は、2つの単語に共通の非言語的概念を媒介として結びついていると考える。つまり、2つの言語間で対応する単語は1対1の関係ではなく、その共通の概念を経由して結びついていると考えるのである。この2つの対立する仮説に対してChen, & Ho (1986) は、第2言語の学習者は、学習の初期段階では単語連結仮説に沿った処理を行い、次第に第2言語と概念の直接

の結びつきを発展させて、概念媒介仮説に沿った処理を行うようになると主張している。

この主張に沿って、先にあげた Chen, & Ho (1986) の実験結果を説明すると、以下のようになる。

一方の言語の単語と別の言語の単語同士が直接結びついている学習初期段階の被験者は、色の命名を第2言語で行う場合、色の概念処理の後、まず、その色の母語にアクセスしてから第2言語に直すため、母語干渉語からの干渉が大きくなる。それに対して、母語を介在せずに概念と第2言語の結びつきで反応する学習後期段階の被験者は、母語干渉語よりも第2言語干渉語からの干渉が大きくなるのである。

本研究の第1の目的は、Chen, & Ho (1986) の中国語—英語間にみられた、英語の学習段階に従って起こる言語間ストループ干渉効果の変化が、日本語—英語間でもみとめられるか否かを確認することである。Chen, & Ho (1986) の結果から予想される結果は以下の通りである。英語学習の後期段階にある大学生が日本語で反応する場合には、英語単語より日本語単語からの干渉が大きく、また英語で反応する場合には、日本語単語より英語単語からの干渉が大きいという結果が得られるであろう。それに対し、英語学習の初期段階にある中学生が日本語で反応する場合には、英語単語より日本語単語からの干渉が大きく、英語で反応する場合にも、英語単語より日本語単語からの干渉が大きいという結果が予想される。

本研究の第2の目的は、これまで扱われることのなかった言語間逆ストループ課題を用いて、先にあげた学習段階によって異なる処理経路について検討することである。従来の研究から、色を無視して単語の読み上げを行う逆ストループ干渉効果は、言語内ではみとめられないことがわかっている (Stroop, 1935)。これは、逆ストループ課題で求める単語の読み上げが、色と同じ概念処理を経ずに行われるためと考えられている。本研究では、色を無視して単語を別の言語に翻訳する課題を言語間逆ストループ課題として、この翻訳過程において、色からの干渉がみとめられるか否かを明らかにする。これまでの言語間ストループ課題を用いた研究では、まず概念処理を受けた色の情報が、どのような処理経路を経て命名されるかについての検討であった。本実験で言語間逆ストループ課題を用いることにより、一方の言語からもう一方の言語に翻訳される過程で共通の概念を経由するかどうかという、言語-概念-言語という経路の検討が可能である。

第2言語と母語の処理経路に関する先の2つの仮説からの結果の予測は、それぞれ以下の通りである。第2言語と母語の単語同士が1対1の関係で直接結びついていると考える単語連結仮説では、一方の言語から他方の言語への翻訳過程で色からの干渉効果は生じないと予想される。つまり2つの言語に共通の概念を媒介としない処理であるため、概念処理をうける色からの干渉は生じないのである。それに対し、単語と単語が共通の概念を媒介として結びついていると考える概念媒介仮説からは、一方の言語から他方の言語への翻訳過程で、概念処理をうける色からの干渉効果が生じるものと予想される。つまり、英語の学習初期段階にあり、単語連結仮説に沿った処理を行っている中学生では、言語間逆ストループ干渉効果はみられないのに対し、英語の学習後期段階にあり、概念媒介仮説に沿った処理を行っている大学生では、言語間逆ストループ干渉効果がみられるものと予想される。

さて、これまでの研究から、同じ日本語でも、仮名单語と漢字単語ではその処理が違っていることや (野村, 1981)、また、ストループ課題の干渉語として用いられた時に、漢字干渉語の方が、仮名单語と同じく表音文字であるアルファベット干渉語よりストループ干渉効果が大きいこと (Biederman, & Tsao, 1979) が報告されている。そこで、本研究において日本語と英語の処理関係を検討する上でも、仮名单語と漢字単語では、英語との関わりによどのような違いがあるかを明らかにする必要があると考えられる。本研究の第3の目的は、言語間・言語内ストループ干渉効果、言語間・言語内逆ストループ干渉効果を通して、仮名单語と漢字単語の処理の違いについて検討することである。

方 法

被験者 大学生と大学院生24名 (男子12名：女子12名) と中学1年生18名 (男子15名：女子3名) であった。中学1年生については、1991年12月第1週から第3週にかけて実験を行った。実験の2週間前に1週間を空けて2回色名単語について筆記テストを実施した。テストは実験で用いた色名単語を含む8つの英語色名単語を日本語に直す、また、日本語色名単語を英語に直すという形式のテストであった。各被験者についてすべて正答になるまでテストを繰り返した。なお、大学生、大学院生については、テストを実施しなかった。

刺激材料 1枚に60項目の刺激が書かれたストループカード3枚 (色づけされた仮名单語カード、漢字単語カード、英語単語カード) とストループコントロールカード1枚 (色片)、逆ストループコントロールカード3枚 (黒色で書かれた仮名单語カード、漢字単語カード、英語単語カード) の計7枚のカードを用いた。60項目の刺激は1列に10項目ずつ横6列に並べた。使われた色は、「一いろ」を付けて命名することの少ない「アカ」「ミドリ」「アオ」「ムラサキ」の4色と、それを仮名 (あか、みどり、あお、むらさき)、漢字 (赤、緑、青、紫)、英語 (red, green, blue, purple) で表わした色名単語であった。カードの大きさはタテ42cm×ヨコ52cmであり、コントロール刺激である色片は1片2cmの正方形、英語単語、漢字単語、仮名单語は、タテ×ヨコがそれぞれ1.5cm×3cm、2cm×2cm、1.5cm×3cm角の中に入る大きさに調整された。1枚のカードの項目同士は横5cm、縦2cm離して配列された。なお、今回の実験で用いた色づけされた色名単語は、色と単語の表わす色が不一致のもののみであった。また、ストループカード・コントロールカードを含む、すべてのカードに対して同じ順序で反応が生じるように刺激を配列した。また、同じ単語、同じ色が続かないように配列した。

手続き 実験は個別に行われ、1名の被験者に要した時間は30~40分であった。すべての被験者に課した課題は全部で20課題であった。つまり、1. ストループコントロールカード (色片) ×命名する言語 (日本語、英語)、2. 逆ストループコントロールカード (黒色で書かれた仮名单語、漢字単語、英語単語) ×読み上げる言語 (日本語、英語)、3. ストループカード (色づけされた仮名单語、漢字単語、英語単語) ×命名する言語 (日本語、英語)、4. 逆ストループカード (色づけされた仮名单語、漢字単語、英語単語) ×読み上げる言語 (日本語、英語) の20課題であった。色の命名を行う各種のストループ課題を先に行うか、それとも、単語の読み上げを行う各種の逆ストループ課題を先に行うかについての順番と、英語での反応と日本語での反応の順番についてはカウンターバランスが

とられた。また、3種のストループ、逆ストループカード（仮名单語、漢字単語、英語単語）の順番については、大学生の被験者群に対してはカウンターバランスがとられたが、中学生の被験者群に対しては、被験者数が少ないため、ランダムな順番とした。

実験の手続きについては、これまでのストループ課題を用いた実験に沿って以下のように行った。別の用紙でカバーされたストループカードを被験者の前に立て、実験者の「いいですか」の合図の後にカバーをはずした。カバーを外すとすぐに、被験者は左から右、上から下に向かって反応を行った。すべての被験者は、ストループ課題においても逆ストループ課題においても、最初にコントロールカードに対する反応から始めた。ストループ課題では、単語を無視して色に対してできるだけ速く指定された言語で命名するように教示を与え、逆ストループ課題では、色を無視して単語をできるだけ速く指定された言語で読み上げるように教示を与えた。それぞれの課題を行う前に、本試行の課題と同種の練習試行を4試行を行った。実験者は、エラーと1枚のカードに要した時間をストップウォッチにより、1msの精度で測定した。

結 果

大学生と中学生の結果を別々に記した。1枚のカードに対する反応時間をカード全体の項目数（60）で割った値を、各条件の反応時間とした。なお、コントロール条件での反応時間より、有意に長い反応時間が示された条件では、干渉が生じていると考えられる。そこで、コントロール条件との差を干渉量としてFigure 2,3に示した。また、コントロール条件より短い反応時間を示す条件で

は、促進が生じていると考えられる。しかし、今回は色名と単語が不一致の刺激のみを呈示したため、促進は有意にはみとめられなかった。しかし、コントロール条件よりも短い反応時間を示す条件では、その差をマイナスの数値で、プラスの数値で表わす干渉量とともに、Figure 2,3に示した。なお、今回エラーについては分析しなかったが、反応時間の結果とともにTable 1に示した。

① 男女比の違いについて

大学生群（男子12名：女子12名）と中学生群（男子15名：女子3名）では男女比が異なっていた。そこで、男女比の違いが結果に及ぼす影響について検討するために、以下の分析を行った。すなわち、反応言語別のストループ干渉量と逆ストループ干渉量について、単語（仮名单語、漢字単語、英語単語）×学年（大学生、中学生）×性差（男子、女子）の3要因分散分析を行った。その結果、反応言語が日本語、英語の場合ともに、性差の主効果も、性差と他の要因との交互作用もみとめられなかった。そこで、本研究の結果には、男女比の違いの影響はないと考えられる。

② ストループ課題の結果について

分析方法

ストループ課題については、3つの単語条件（仮名单語、漢字単語、英語単語）に対応するコントロール条件（色片カードに反応）が一つであるため、単語（仮名单語、漢字単語、英語単語）×ストループ要因（干渉条件、コントロール条件）の分析ができない。そこで、まず、反応言語別、単語別に、ストループ要因について、反応時間

Table 1 Mean reaction time (ms) and error rate (%)

	College students						Junior high school students					
	Stroop task						Stroop task					
	Response : Japanese			Response : English			Response : Japanese			Response : English		
word	Kana	Kanji	English	Kana	Kanji	English	Kana	Kanji	English	Kana	Kanji	English
Stroop RT (ms)	890	907	833	876	858	972	1288	1222	998	1236	1202	1265
error (%)	1	2	1	1	2	1	4	4	1	3	4	3
Control RT (ms)	641	641	641	708	708	708	750	750	750	894	894	894
error (%)	0.5	0	0	1	0	0.1	2	0	0	2	0	0
	Reverse Stroop task						Reverse Stroop task					
	Response : Japanese			Response : English			Response : Japanese			Response : English		
	word	Kana	Kanji	English	Kana	Kanji	English	Kana	Kanji	English	Kana	Kanji
Stroop RT (ms)	461	609	896	1011	906	512	482	733	1281	1309	1213	842
error (%)	0	1	1	2	2	0.3	0.1	2	2	4	3	1
Control RT (ms)	469	536	775	848	766	519	486	574	1149	1080	1011	774
error (%)	0.2	1	0.6	2	0.4	0.1	0.4	1	3	2	2	1

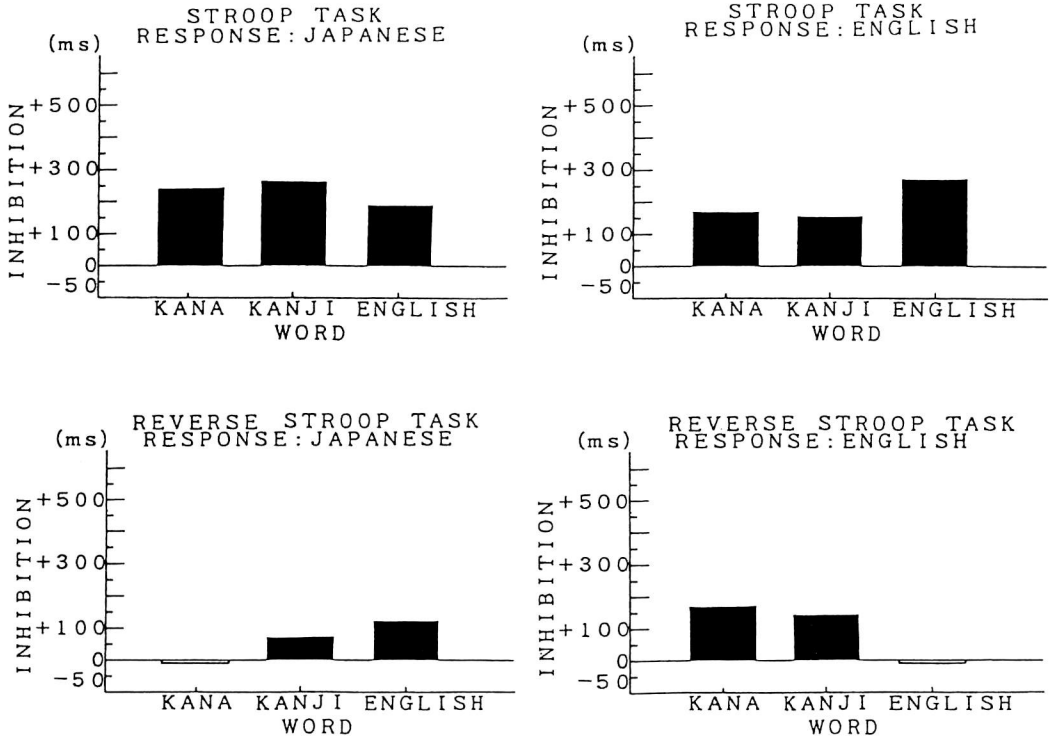


Figure 2 Inhibition observed in college students

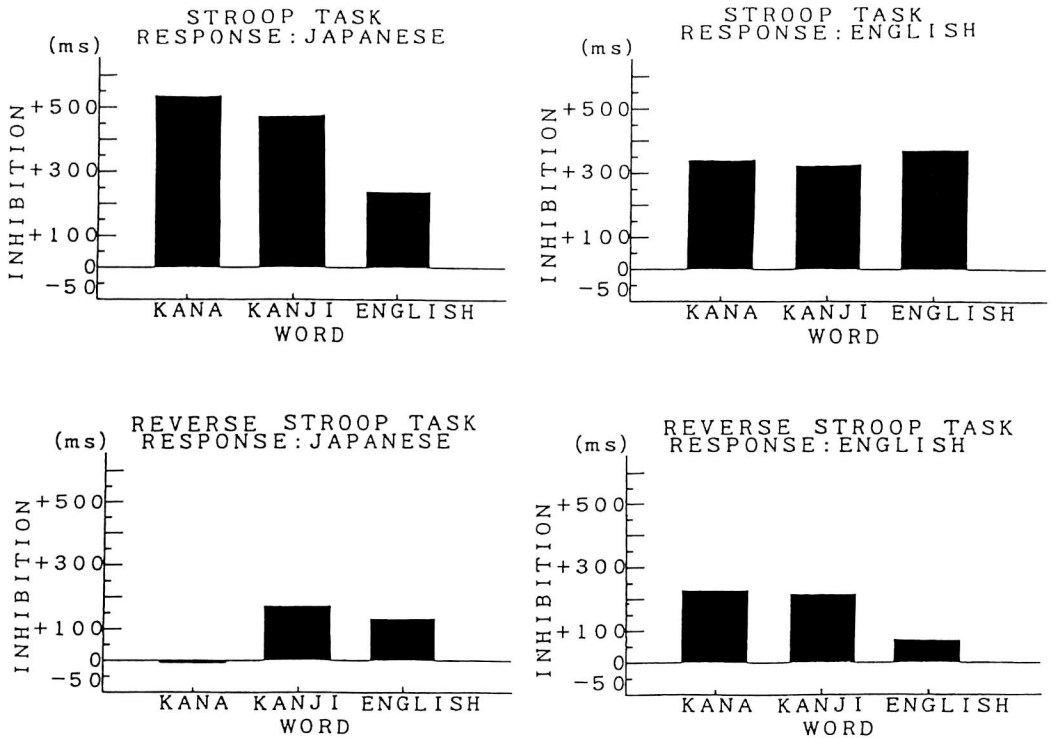


Figure 3 Inhibition observed in junior high school students

による1要因分散分析を行い、干渉の有無を確認した。その後で、干渉条件の反応時間とコントロール条件の反応時間の差を干渉量として、反応言語（日本語英語）×学年（大学生、中学生）×単語（仮名単語、漢字単語、英語単語）の3要因分散分析を行い、干渉量の違いを比較した。なお、干渉量の比較を行うのは、各条件で生じる干渉の大きさの違いを比較するためである。

ストループ課題における干渉の有無

大学生 反応言語が日本語の場合、単語が仮名単語 [F(1, 23)=159.95 $p<.001$], 単語が漢字単語 [F(1, 23)=153.66 $p<.001$], 単語が英語単語 [F(1, 23)=38.55 $p<.001$]の時に、ストループ要因(干渉条件, コントロール条件)についての主効果が有意であり、すべての干渉語の場合にストループ干渉効果がみとめられた。また、反応言語が英語の場合にも、単語が仮名単語 [F(1, 23)=67.28 $p<.001$], 単語が漢字単語 [F(1, 23)=52.57 $p<.001$], 単語が英語単語 [F(1, 23)=135.92 $p<.001$] の課題で、ストループ要因についての主効果が有意であり、すべての課題でストループ干渉効果がみとめられた。

中学生 反応言語が日本語の場合、単語が仮名単語 [F(1, 17)=28.82 $p<.001$], 単語が漢字単語 [F(1, 17)=53.07 $p<.001$], 単語が英語単語 [F(1, 17)=23.21 $p<.001$] の課題で、ストループ要因についての主効果が有意であり、すべての課題でストループ干渉効果がみとめられた。また反応言語が英語の場合、単語が仮名単語 [F(1, 17)=13.52 $p<.01$], 単語が漢字単語 [F(1, 17)=38.20 $p<.001$], 単語が英語単語 [F(1, 17)=30.13 $p<.001$] の課題で、ストループ要因についての主効果が有意であり、すべての課題でストループ干渉効果がみとめられた。

ストループ課題における干渉量の比較

干渉量について、学年（大学生、中学生）×反応言語（日本語、英語）×単語（仮名単語、漢字単語、英語単語）の3要因分散分析を行った結果、主効果については、学年 [F(1, 40)=8.14 $p<.01$], 反応言語 [F(1, 40)=8.26 $p<.01$], 単語 [F(2, 80)=4.47 $p<.05$] のすべてで有意であった。学年の主効果については、大学生より中学生で、また、反応言語については、英語より日本語で干渉量が多いことがわかった。また、単語の主効果について多重比較（以下、すべての多重比較はRyan's methodを用い、有意水準は5%に設定した）を行ったところ、仮名単語と漢字単語の生じる干渉量の間と、漢字単語と英語単語の生じる干渉量の間には差はないものの、英語単語より仮名単語の方が干渉量が多いことがわかった。交互作用は、学年×単語 [F(2, 80)=8.13 $p<.001$], 反応言語×単語 [F(2, 80)=44.68 $p<.001$] と学年×反応言語×単語 [F(2, 80)=4.61 $p<.05$] で有意であった。

学年×単語の交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、大学生では単語の主効果はみられなかったの

に対し、中学生では、単語の主効果 [F(2, 80)=12.28 $p<.001$] がみとめられた。そこで、中学生の結果における単語の要因について多重比較を行ったところ、仮名単語と英語単語間、漢字単語と英語単語間に差がみとめられ、日本語単語（仮名単語、漢字単語）の方が英語単語より、生じる干渉量が多いことがわかった。

また、反応言語×単語の交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、反応言語が日本語の場合の単語の主効果 [F(2, 160)=30.87 $p<.001$] も、反応言語が英語の場合の単語の主効果 [F(2, 160)=6.89 $p<.005$] も有意であった。そこで、多重比較を行ったところ、反応言語が日本語の場合、仮名単語と英語単語間、漢字単語と英語単語間に差がみられ、英語単語より、日本語単語（仮名単語、漢字単語）の方が生じる干渉量が多いことがわかった。また、反応言語が英語の場合、仮名単語と英語単語間、漢字単語と英語単語間に差がみられ、日本語単語（仮名単語、漢字単語）より英語単語の方が、生じる干渉量が多いことがわかった。

ここで最も重要なのは、学年×反応言語×単語の交互作用についての分析である。単純・単純主効果の検定の結果、大学生が日本語で反応する場合には、単語の主効果がみられないのに対し、英語で反応する場合には単語の主効果 [F(2, 160)=6.23 $p<.005$] が有意であった。一方、中学生が日本語で反応する場合には、単語の主効果 [F(2, 160)=41.08 $p<.001$] が有意であるのに対し、英語で反応する場合には、単語の主効果は有意ではなかった。多重比較の結果、大学生が英語で反応する場合には、仮名単語と英語単語間、漢字単語と英語単語間に差がみられ、日本語単語（仮名単語、漢字単語）より、英語単語の方が生じる干渉量が多いことがわかった。また、中学生が日本語で反応する場合には、仮名単語と英語単語間、漢字単語と英語単語間に差がみられ、英語単語より、日本語単語（仮名単語、漢字単語）の方が生じる干渉量が多いことがわかった。

本研究の第1の目的と第3の目的の一部に関わる、以上のストループ課題における干渉量の結果をまとめると、以下ようになる。大学生が日本語で反応する場合には、予想に反して、仮名単語、漢字単語、英語単語の生じる干渉量に差はなく、言語内ストループ効果と言語間ストループ効果に差はみられなかった。一方、大学生が英語で反応する場合には、日本語単語（仮名単語、漢字単語）より、英語単語の方が干渉量が多く、言語内ストループ効果の方が言語間ストループ効果より大きいという予想通りの結果が得られた。また、中学生が日本語で反応する場合には、英語単語より、日本語単語（仮名単語、漢字単語）の方が干渉量が多く、予想通り言語内ストループ効果の方が言語間ストループ効果より大きいという結果が得られた。それに対し、英語で反応する場合には予

想に反して、仮名单語、漢字単語、英語単語の生じる干渉量に差はなく、言語内ストループ効果と言語間ストループ効果に差はみられなかった。

③ 逆ストループ課題における干渉の有無と干渉量

分析方法 逆ストループ課題については、ストループ課題と異なり、3つの単語条件に対応する3種のコントロールカード（仮名单語カード、漢字単語カード、英語単語カード）に対する反応時間が測定された。そこで、反応言語別に、学年（大学生、中学生）×単語（仮名单語、漢字単語、英語単語）×ストループ（干渉条件、コントロール条件）の3要因分散分析を行い、干渉の有無と干渉量の比較を行った。

日本語で反応する場合 学年の主効果 $[F(1, 40)=35.76 \text{ } p<.001]$ 、単語の主効果 $[F(2, 80)=264.08 \text{ } p<.001]$ 、ストループの主効果 $[F(1, 40)=48.48 \text{ } p<.001]$ 、学年×単語の交互作用 $[F(2, 80)=29.82 \text{ } p<.001]$ 、単語×ストループの交互作用 $[F(2, 80)=20.04 \text{ } p<.001]$ が有意であった。学年の主効果が有意であったことから、大学生より中学生の反応時間の方が長いことがわかった。また、単語の主効果について多重比較を行ったところ、すべての条件間に有意差がみられ、仮名单語、漢字単語、英語単語の順に反応時間が長くなることがわかった。また、学年×単語の交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、仮名单語条件においてのみ学年の主効果がみとめられず、学年の主効果については、漢字単語条件 $[F(1, 120)=4.23 \text{ } p<.05]$ と英語単語条件 $[F(1, 120)=93.24 \text{ } p<.001]$ で有意であった。つまり、漢字単語条件と英語単語条件では、大学生より中学生の方が反応時間が長いことがわかった。また、単語×ストループの交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、仮名单語条件だけ、ストループの主効果がみられず、ストループの主効果は、漢字単語条件 $[F(1, 120)=43.78 \text{ } p<.001]$ と英語単語条件 $[F(1, 120)=51.61 \text{ } p<.001]$ でみとめられ、この2条件で、逆ストループ効果がみとめられたことになる。

本研究の第2の目的と第3の目的の一部に関わる、以上の結果をまとめると、大学生も中学生も日本語で反応する場合、漢字単語の場合に、仮名单語でみとめられなかった言語内逆ストループ効果がみとめられ、英語単語の場合も、予想された大学生だけでなく中学生においても、言語間逆ストループ効果がみとめられたことになる。

英語で反応する場合

学年の主効果 $[F(1, 40)=54.52 \text{ } p<.001]$ 、単語の主効果 $[F(2, 80)=155.73 \text{ } p<.001]$ 、ストループの主効果 $[F(1, 40)=46.61 \text{ } p<.001]$ 、単語×ストループの交互作用 $[F(2, 80)=17.05 \text{ } p<.001]$ が有意であった。学年の主効果が有意であったことから、大学生より中学生の反応時間の方が長いことがわかった。また、単語の主効果

について多重比較を行ったところ、すべての条件間に有意差がみられ、英語単語、漢字単語、仮名单語の順に反応時間が長くなることがわかった。また、単語×ストループの交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、英語単語の場合だけストループの主効果がみられず、ストループの主効果は、仮名单語条件 $[F(1, 120)=53.10 \text{ } p<.001]$ と漢字単語条件 $[F(1, 120)=40.58 \text{ } p<.001]$ でみとめられ、この2条件で逆ストループ効果がみとめられたことになる。

本研究の第2の目的と第3の目的の一部に関わる、以上の結果をまとめると、日本語で反応する場合、予想された大学生だけでなく、中学生においても、仮名单語条件と漢字単語条件で、同様に言語間逆ストループ効果がみとめられ、英語単語条件では予想通り、大学生、中学生ともに、言語内逆ストループ効果がみとめられなかったことになる。

考 察

以下、本研究の第1の目的であるストループ効果の検討と、第2の目的である逆ストループ効果の検討について、順次考察を行う。なお、第3の目的である、ストループ効果と逆ストループ効果にみられる、仮名单語と漢字単語の処理の違いの検討については、ストループ効果の検討と逆ストループ効果の検討の中で、それぞれ考察を行った。

まず、本研究の第1の目的である、言語内・言語間ストループ効果の結果についての考察を行う。大学生の被験者は、単語を無視して色の命名を行うストループ課題において、反応が日本語の場合は、予想に反して、日本語単語（仮名单語、漢字単語）からの干渉と英語単語からの干渉の大きさに差はなかったが、反応が英語の場合は、予想通り、英語単語からの干渉の方が、日本語単語（仮名单語、漢字単語）からの干渉より大きかった。つまり、反応言語が日本語の場合には、言語内ストループ効果と言語間ストループ効果に差はなかったが、反応言語が英語の場合には、反応言語と干渉言語が同じ場合に干渉が大きく、言語内ストループ効果の方が言語間ストループ効果より大きいという結果が得られたのである。

このうち、日本語で反応する場合、予想に反して、日本語単語と英語単語からの干渉量に差がみられなかったという結果は、Mägiste (1984) の研究でもみられた結果である。つまり、母語である日本語で反応する場合、大学生では、同じ日本語である仮名单語や漢字単語と同様に第2言語である英語単語からの干渉がみとめられたのである。Chen, & Ho (1986) は、長年第2言語である英語を学習している大学生であっても、母語である中国語で反応する場合、英語より中国語単語からの干渉が大きいという結果を得ている。それに対しMägiste (1984) は、

2つの言語に、よりバランスのとれたバイリンガルでは、母語で反応する場合でも母語と第2言語の干渉語からの干渉量に差がなくなるという結果を得ている。Chen, & Ho (1986) と Mägiste (1984) のこの結果の違いが何によるものかは明らかにされていないが、本実験の大学生も、Mägiste (1984) の被験者と同様、色の命名課題においては、日本語と英語におけるよりバランスのとれたバイリンガルと同様の処理を行う段階に到達しつつあり、その結果、言語内ストループ効果と言語間ストループ効果に差がみられなかったという解釈ができるだろう。

また、反応言語が英語の場合の結果から、大学生では概念と英語の結びつきができており、母語にアクセスする経路よりも直接英語にアクセスする経路が優勢であることが示唆された。しかし、反応言語が日本語の場合の結果から、よりバランスのとれたバイリンガルと同様の処理を行う大学生では、英語で反応する場合も日本語単語と英語単語からの干渉量に差がなくなるという結果が得られることも予想される。しかし、バランスのとれたバイリンガルが示す、言語内ストループ効果と言語間ストループ効果の間に差がないという結果は、反応言語が第2言語の場合には、反応言語が母語の場合よりも、第2言語習得段階のより遅い段階に得られるということがわかっている(Mägiste, 1984)。本研究の大学生の場合も、バランスのとれたバイリンガルの処理に近づきつつあるものの、第2言語である英語で反応する場合には、まだその段階までは到達していないことを示しているといえるだろう。

以上のように、大学生が英語で反応する場合、より熟達した母語である日本語からの干渉よりも、英語からの干渉が大きいため、概念と反応言語の直接の結びつきで処理される段階を想定したChen, & Ho (1986) のモデルが支持されたといえる。しかし、反応言語が日本語の場合、日本語単語と英語単語の干渉量に差がないという本実験の大学生の結果から、Chen, & Ho (1986) の想定した、概念と反応言語の直接の結びつきで処理される段階のさらに上に、概念と反応言語、そして、もう1つの言語という、3つの結びつきのできた経路を想定する必要が示唆されたといえるであろう。

一方、同様に、ストループ課題における中学生の結果を考察する。中学生においては、反応言語が日本語の場合には、日本語単語(仮名単語、漢字単語)からの干渉が英語単語からの干渉に比べて大きく、言語間ストループ効果より言語内ストループ効果の方が大きいという、大学生の結果とは異なる、予想通りの結果が得られた。また、もう1つ大学生と異なった結果としては、英語で色に命名する場合の結果があげられる。つまり、英語で色の命名をする場合には、日本語単語(仮名単語、漢字単語)と英語単語の及ぼす干渉の違いはみられなかった

のである。Chen, & Ho (1986) の結果から、英語の学習初期段階にある中学生が英語で反応する場合、英語単語より日本語単語からの干渉量の方が大きいと予想された。しかし、英語で反応する場合に、英語単語と日本語単語からの干渉量に差がないという本実験の結果からも、中学生では、被験者にとって優位な言語である日本語が、反応言語である英語と同様に関わってくることを示唆されたといえる。つまり、中学生では大学生にみられた、日本語にアクセスせずに、概念と英語の直接の結びつきで反応する経路がまだ優勢ではなく、母語である日本語を媒介とした経路も同様に用いられているものと思われる。

さらに、本研究の第3の目的の一つである、言語内・言語間ストループ課題における干渉語としての仮名単語と漢字単語の違いについて考察する。ストループ課題における干渉語として仮名単語と漢字単語の及ぼす干渉量には、Biederman, & Tsao (1979) でみられたような差が、本研究の大学生群、中学生群ともにみられなかった。Biederman, & Tsao (1979) は、本研究の仮名単語条件に対応する表音文字のアルファベット条件と表意文字である漢字条件に、別の被験者群をあてている。仮名単語条件と漢字単語条件に同じ被験者群をあてた本研究の結果では両条件に差がみとめられなかったことから、表音文字単語と表意文字単語の及ぼす干渉の大きさの違いについては、今後さらに検討してみる必要があることが示唆されたといえるだろう。

次に、本研究の第2の目的である、色を無視して単語に反応する逆ストループ効果の結果についての考察を行う。まず、本研究の第3の目的である、仮名単語と漢字単語の処理の違いに焦点を当てて、言語内逆ストループ効果についての考察を行う。大学生、中学生ともに、日本語の仮名単語を日本語でそのまま読み上げる、あるいは英語単語を英語で読み上げるという言語内逆ストループ課題においては、逆ストループ効果はみとめられなかった。これは、従来の逆ストループ効果課題における結果と一致した結果である。これまで、単語の読みは意味処理・概念処理を経ずに行われるため、色からの逆ストループ効果が生じないと考えられている(Glaser, & Glaser, 1989; Virzi, & Egeth, 1985)。本研究の結果からは、日本語においてのみならず、英語単語を英語で読み上げる場合にも、同様に意味処理・概念処理を経ない処理が行われていることが示唆された。しかし、同じ日本語単語でも漢字の読み上げを日本語で行う場合には、概念処理される色からの干渉が生じるという逆ストループ効果がみられたのである。このことは、従来言われている仮名単語と漢字単語の処理の違いを示すものである。これまで、一字一音の原則の確立した表音文字である仮名文字単語には、個々の文字から読みを形成していくという処

理が優位であるのに対し、漢字単語には抽出された意味に基づいて読みが行われるという仮単語と漢字単語の処理の違いが示唆されている(野村, 1981)。この漢字の処理を考慮すると、漢字色名単語の読み上げには、意味処理・概念処理が関わっているため、同様に概念処理される色からの影響として逆ストループ効果がみとめられたと考えられる。この漢字色名単語からの逆ストループ効果は中学生においても同様にみとめられ、漢字単語について中学生でも大学生と同様の処理が行われていることが示唆された。

次に英語単語を日本語に直して読む、あるいは日本語単語を英語に直して読む言語間逆ストループ課題の結果をみてみよう。

大学生においても中学生においても、単語を別の言語に直して読み上げる過程で色からの干渉が生じるという、言語間逆ストループ効果がみとめられた。また、言語間逆ストループ量については、仮単語条件と漢字単語条件の間に差はみられなかった。この言語間逆ストループ効果についての結果は、ある言語で表わされた単語が翻訳される過程で概念を経由するという、概念媒介仮説を支持する処理過程を示すものである。つまり、英語の学習初期段階にあると思われる中学生においても、単語を別の言語に直して読み上げる過程で概念の介入がみとめられたことになり、学習初期段階にある外国語の学習者は、単語同士の結びつきで単語を処理するという単語連結仮説に反する結果であるといえる。

本研究の英語で反応をもとめた場合のストループ課題の結果から、英語学習の後期段階にある大学生では、母語を介入させない概念と英語の結びつきが優勢であるのに対し、英語学習の初期段階にある中学生では概念と英語の結びつきに、母語が介入してくる処理が同時に行われていることが明らかになった。しかし、単語の読みをもとめる逆ストループ課題の結果から、日本語を英語に、英語を日本語に翻訳する過程では、予想に反して中学生、大学生ともに概念の介入がみとめられた。つまり、色を英語で命名する場合には、単語連結仮説に沿った2言語の単語同士の直接の結びつきのみとめられる中学生においても、翻訳の過程では、概念媒介仮説に沿った概念の介入がみとめられたのである。これまでの研究は、概念処理をうけた情報が、その後どのような処理経路を経て反応されるかという、ストループ課題を用いた検討によるものであった。しかし、本研究の言語間逆ストループ課題の結果から、一方の言語処理をうけた情報が別の言語情報に翻訳される過程では、該当する英語単語を習得直後の中学生から、長年の学習を経た大学生に至るまで、2言語に共通の概念を経由した処理経路がとられることが明らかになったのである。この結果は、単語の翻訳過程が、より概念処理に依存した処理過程であり、中学生、

大学生ともに、概念を経由した処理が行われることを示唆している。

これまで、記憶課題、プライミング課題、ストループ課題を用いて、単語連結仮説と概念媒介仮説という2つの仮説に関して、二者択一の検討が行われることが多かった。しかし最近の研究では、外国語学習者の学習段階(Chen, & Ho, 1986)や学習方法(Chen, & Leung, 1989)によって、処理経路が異なるといった結果が得られ、2つの仮説に対する二者択一の検討が適切でないことが示唆され始めている。本研究の結果はこれらの結果に加えて、命名、翻訳などもとめられる反応によっても、概念と2言語の間に異なる処理経路を想定する必要のあることを示唆している。今後は2言語の処理経路に関わる学習者の学習段階、学習方法、反応の種類という3つの要因がどのような関係で処理経路に影響していくのかについての検討が望まれる。

文 献

- Biederman, I., & Tsao, Y. -C. (1979). On processing Chinese ideographs and English words: Some implications from Stroop-test results. *Cognitive Psychology*, 11, 125-132.
- Chen, H., & Ho, C. (1986). Development of Stroop interference in Chinese-English bilinguals. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 12, 397-401.
- Chen, H. -C., & Leung, Y. S. (1989). Patterns of lexical processing in a non-native language. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*. 15, 316-325.
- Dalrymple-Alford, E. (1968). Interlingual interference in the Stroop task. *Psychonomic Science*, 10, 215-216.
- Dyer, F. N. (1971). Color-naming interference in monolinguals and bilinguals. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 10, 297-302.
- Glaser, W. R., & Glaser, M. O. (1989). Context effects in Stroop-like word and picture processing. *Journal of Experimental Psychology, General*, 118, 13-42.
- Kiyak, H. A. (1982). Interlingual interference in naming color words. *Journal of Cross Cultural Psychology*, 13, 125-135.
- Kolers, P. A. (1963). Interlingual word associations. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 2, 291-300.
- Kolers, P. A. (1966). Interlingual facilitation of short-term memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 5, 314-319.
- Lopez, M., & Young, R. K. (1974). The linguistic

- interdependence of bilinguals. *Journal of Experimental Psychology*, **102**, 981-983.
- Mägiste, E. (1984). Stroop tasks and dichotic translation: The development of interference patterns in bilinguals. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **10**, 304-315.
- MacLeod, C. M. (1976). Bilingual episodic memory: Acquisition and forgetting. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **15**, 347-364.
- 野村幸正. (1981). 漢字, 仮名表記語の情報処理—読みに及ぼすデーター推進型処理と概念推進型処理の効果—. *心理学研究*, **51**, 327-334.
- Potter, M. C., So, K. -F., Von Eckardt, B., & Feldman, L. B. (1984). Lexical and conceptual representation in beginning and proficient bilinguals. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **23**, 23-38.
- Preston, M. S., & Lambert, W. E. (1969). Interlingual interference in a bilingual version of the Stroop color-word task. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **8**, 295-301.
- Stroop, J.R. (1935). Studies of interference in serial verbal reactions. *Journal of Experimental Psychology*, **18**, 643-662.
- Tulving, E., & Colotla, V. A. (1970). Free recall of trilingual lists. *Cognitive Psychology*, **1**, 86-98.
- Virzi, R. A., & Egeth, H. E. (1985). Toward a translational model of Stroop interference. *Memory and Cognition*, **13**, 304-319.

Ikeda, Satoko (Hiroshima University): Matsumi, Norio (Hiroshima University) & Mori, Toshiaki (Hiroshima University). *Stroop and Reverse Stroop Interference in English and Japanese*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 31-40.

The purpose of the present study was to examine how Japanese college students and junior high school students process two languages (English and Japanese), using intra- and inter-lingual Stroop tasks and reverse Stroop tasks. On intra-lingual Stroop tasks, subjects were required to name the colors of the words while ignoring the words; on intra-lingual reverse Stroop tasks, subjects were required to read the words while ignoring the colors of the words. On these tasks, the language of the words was the same as that of the response. On inter-lingual Stroop tasks and inter-lingual reverse Stroop tasks, the language of the words was different from that of the response. The patterns of intra- and inter-lingual Stroop and reverse Stroop interference observed in the two groups suggested different pathways for processing two languages, according to the level of learning of the subjects in English and the type of responses required. These results were discussed in terms of a word association hypothesis, and a concept mediation hypothesis.

【Key Words】 Stroop task, Reverse Stroop task, English, Japanese, Psycholinguistics

1993. 8. 24受稿, 1994. 2. 2受理

未知物に関する説明が新奇なラベルの相互排他的な解釈に及ぼす効果

針生 悦子
(東京大学教育学部・
日本学術振興会特別研究員)

大村 彰道
(東京大学教育学部)

原 ひろみ
(東京大学経済学研究科)

これまでの研究(針生, 1991)から, 3歳児は, 新奇なラベルの指示対象を既知物と未知物の中から選択するよう求められると, 未知物を選択しがちであることが, 示されてきた。彼らは, 課題文脈にふさわしいのが既知物であることを示唆されたときですら, そのような選択を行った。これはおそらく彼らが, カテゴリ一名は相互に排他的だと仮定しているためである。本研究は, このようなとき幼児が, 未知物も文脈にふさわしいと考えることで, 相互排他性と文脈との葛藤を解決している可能性について検討した。研究1では, ラベルの指示対象は未知物だと一見, 文脈に反した解釈をする子どもに, 解釈内容の説明を求めると, その中に, 未知物が課題文脈にふさわしいことに言及する者のいることが見いだされた。研究2では, あらかじめ未知物が文脈にふさわしくないことを告げ, 上のようなかたちでの葛藤解決をできなくすると, ラベルの解釈において, 4歳児は相互排他性をういなくなるが, 3歳児はそれをうい続けることが見いだされた。ここから, 文脈中で提示された新奇なラベルを未知物の名称として解釈するとき, 4歳児だけが, 相互排他性と文脈との葛藤を解決していることが示唆された。

【キー・ワード】認知発達, 幼児期, カテゴリゼーション, 相互排他性, 事物名の解釈

問 題

事物を指して語を言うというやり方は, 語を定義する最も簡便な方法のように思われる。しかし実際にそれだけでは, 語が事物全体を指すのか, 部分を指すのか, あるいは属性を指すのかといったことは, 明らかにならない(Quine, 1960)。子どもは, このように曖昧な状況に置かれている。しかも, 考えうる仮説を系統的に検証していくことは彼らにとって困難だ(たとえば Sophian, & Somerville, 1988)。にもかかわらず, 子どもは, 驚異的なスピードで語彙を増やしていく。そこから察せられるのは, 語意に関して考え出すことのできる無数の仮説の中で, 特定のものを優先させるような原理を, 彼らは持つにちがいないということだ(Carey, 1982)。たとえば, まだ名称を知らない事物(未知物)を前にして発せられた語は, その事物の部分ではなく全体を指すと考え(事物全体原理), その事物を指す固有名詞ではなくカテゴリ一名だと見なす(事物カテゴリ原理)といった原理だ(Markman, 1987; Markman, & Hutchinson, 1984)。このような原理の1つと考えられるものに, 相互排他性原理がある(Markman, 1987; Markman, & Wachtel, 1988)。これは1つの事物にただ1つの名称しか認めないという原理である。

この原理の存在については, これまで, 次のような方法で検討されてきた(針生, 1991)。人形の前に, りんご(子どもが既にその名称を知っている事物; 既知物)とリップミラー(未知物)が並べてある。そこで子どもは, 「人

形はお腹がすいている。ヘク(新奇なラベル)を渡してあげたい」といった言語情報(文脈)を与えられ, 「ヘク」はりんごとリップミラーのうちどちらを指すのかについて, 判断を求められる。具体的には, りんごとリップミラーのそれぞれについて「これはヘク?」と尋ねられたのである。明らかにこの文脈にふさわしいのはりんごの方だ。だから, 年長(5歳後半)児はたいてい, ヘクはりんごを指すと判断した。これに対し, 年少(3歳後半)児は, ヘクはリップミラーを指すと判断した。ヘクがりんごを指すと判断すれば, 1つの事物に「りんご」と「ヘク」, 2つの名称を認めることになり, 相互排他性に反するからだ。

このように, 年少の子どもが相互排他性原理に強く縛られていると考えることで, 「子どもが初期に獲得する語の多くは, 相互に排他的な事物のカテゴリ一名である」(Macnamara, 1982; Mervis, 1980), 「(バラは「バラ」であると同時に「花」でもあるというように)1つの事物は複数の名称で指示されるが, このことを理解するのが就学前児には困難である」(Inhelder, & Piaget, 1964; Macnamara, 1982)などの現象も説明される。しかし, 子どもも最終的には, バラが「バラ」であると同時に「花」でもあることを受け入れるようになっていく。とすれば, 子どもはいずれ, 名称と事物とは1対1対応でなければならないといったこだわりを捨て, 文脈次第では1つの事物に複数の名称を認めるようになっていかなければならない。そして, 上の針生(1991)の結果は, 少なくとも3歳後半から5歳後半にかけて, そのような変化が生

じていることを物語っている。

もともと、針生(1991)で見出された発達的变化については、その実験状況を吟味して、「年長児は、どちらの事物がより文脈にふさわしいか(事物の文脈適合性)を判断する能力において、年少児よりすぐれていただけではないか」とする向きもあろう。しかし、同じ状況で課題を“人形にヘクを渡してやること(事物選択)”にすると、年少児も年長児と同じくらいよく既知物を選んだ(針生, 1991)。ということは、年少児とて既知物の方が文脈にふさわしいことはわかっていたのだが、ラベルの解釈では、敢えて相互排他性に従ったということなのだ。年少児と年長児の違いはまさに、言語にどう立ち向かうかという態度(言語観)の違いと言えよう。

では言語観が、年少児の“文脈はどうであれ1つの事物には1つの名称しか認めない”から、年長児の“文脈次第では1つの事物に複数の名称を認める”へと変化するとき、何がそのきっかけになっているのだろうか。針生(1992)は、次の2つを指摘する。

1つは、①日常生活の中で既知物が新奇的なラベルで呼ばれるのに出遭い、(新奇的なラベルの指示対象は既知物であるかのようにして)その場面で適応的に振る舞うことと、相互排他性に従ってラベルを解釈することとの矛盾(文脈と相互排他的解釈との矛盾)に気づくことである。子どもはこの矛盾を解決しようとする中で、“十分な根拠があるときには1つの事物に複数の名称を認める”という言語観を獲得していくことが考えられる。

もう1つは、②「日本語で“りんご”と呼ばれるものが英語では“apple”のように、言語が違えば¹⁾同じ事物が違う名称で呼ばれるかもしれないことを知ることである。このような知識は、より一般的に、1つの言語の中でも1つの事物が常にただ1つの名称で呼ばれるわけではないことを、子どもに気づかせていくかもしれない。

このうち②については針生(1993)で取り上げられているので、本論文は、子どもが相互排他性一辺倒から脱していくきっかけとして①文脈と相互排他的な解釈との矛盾認識に焦点をあてる。

さて、子どもが文脈次第では相互排他的な解釈を抑制するようになっていく、そのきっかけが、文脈と相互排他的な解釈との矛盾に気づき、それを解消しようとするところにあるなら、針生(1991)の年少(3歳後半)児が示したラベル解釈行動は興味深いものと言える。上でも述べたように、文脈にふさわしいのが既知物の方であることは彼らも理解していた。にもかかわらず、彼らは“ラベルは未知物を指す”と、一見、文脈に反した解釈をしたのである。これは、どういうことなのだろう。

第1に考えられるのは、子どもは文脈と相互排他的な解釈との矛盾に気づかなかったということである。彼らのラベル解釈過程が、機械的に相互排他性を適用して指示対象を割り出すだけのもので、そこに、自分が指示対象だと判断した事物が文脈にふさわしいかどうかを吟味する処理が含まれていないとすれば、当然このようなことは起こりうる。そもそも相互排他性など語意獲得上の原理が目されるようになってきたのは、子どもの情報処理能力は限られているが、そのことがかえって迅速な語意獲得を導いているに違いないといった視点からであった。子どもは、仮説生成に際して様々な可能性を考慮できなかったり、生成した仮説を適切な証拠(文脈)に照らして吟味できなかったりするが、だからこそ、原理から導かれる特定の仮説を、迷わず受け入れることができるのではないか。このように、子どもの相互排他性に頼ったラベル解釈が、“解釈過程で文脈を考慮しない”ことの産物であるなら、彼らがそもそも文脈と解釈との矛盾を矛盾と認識していないということは、十分ありうるわけだ。

第2に、子どもは、矛盾を認識していても、それを解決するのに適切な方策をとれないということが考えられる。文脈と相互排他的な解釈との矛盾に気づくには、ラベルの解釈過程で文脈にも注意を向ける必要がある。それができる分だけ、この第2の場合は、第1の場合より進んだ状態と言える。しかし、そのような矛盾認識が、最終的な解釈の中に生かされてこない点では、第1の場合と変わらない。

最後に、子どもは、未知物に文脈適合的な機能があると考え、見かけ上の矛盾を解消しているということが考えられる。空腹な人形が欲しがっているヘクとはりんごでなく未知物(リップミラー)のことだと判断しても、そのような判断は、未知物のことを“ごはんを作るときに使うもの”と考えることで合理化されてしまうのだ。

以上、3つの場合は、最終的なラベルの解釈の中に“文脈”が取り込まれているかどうかという観点から、第1と第2のa)(結果的に)ラベルの解釈に際して文脈を考慮していない(と見なせる)場合と、第3のb)未知物に文脈適合的な機能を想定することで矛盾を解消している場合に、2分されよう。

相互排他性への依存が、情報処理能力が不十分なことの産物であるなら、子どもが文脈に反してまで“ラベルは未知物を指す”と解釈する過程とは、a)のようなものであるに違いない。しかし、いつまでもa)ラベルの解釈に際して文脈を考慮しない状態が続くなら、“文脈次第では1つの事物に複数の名称を認める”ようになっていくきっかけも、永久につかめない。その点、b)は、ラベルの解釈に際して文脈を考慮するだけの情報処理能力がありながら、それを投入してギリギリ相互排他的な

1) ここで言う“違う言語”の中には、実在の外国語ばかりでなく、“お人形さんの国のことば”といったものも含めて考えることができるだろう。

解釈を保っている状態だと言える。未知物に文脈適合的な機能がないことがわかればb)は挫折するし、それでも文脈と解釈との整合性にこだわるなら、あとは相互排他的な解釈を諦めるしかない。その意味でb)は、子どもが“文脈次第では1つの事物に複数の名称を認める”ようになっていく契機を含んだものと言える。

本論文は、文脈から新奇なラベルの指示対象は既知物であることが示唆されるのに、“ラベルは未知物を指す”と、一見、文脈に反した解釈をする、年少児や年中児に注目する。そして、彼らがa) b)のうちどちらの処理を行っているか、明らかにすることが目的である。子どもが“文脈次第では1つの事物に複数の名称を認める”ようになっていくとき、そのきっかけが、文脈と相互排他的な解釈との矛盾を認識し解消しようとするところの中にあるなら、その変化の直前の段階で、矛盾はb)のようなやり方で解消されているにちがいない。

ただし、子どもが実際にb)の処理を行っているかどうかは、ラベルの指示対象がどの事物かを判断させてみただけではわからない。その点を明らかにしたいのであれば、子どもに「へくってどんなもの？」と尋ね、ラベルの解釈内容を説明させてみるのも1つの方法だ。もし子どもがb)によって文脈と相互排他的な解釈との矛盾解消を試みているなら、彼らは説明の中で、未知物に文脈適合的な機能があるということに触れるにちがいない。たとえば、お腹をすかせた人形が欲しがっているへくはりんごでなくリップミラーだと判断したあとで、このへくのことを「ごはんを作るときに使うもの」と説明するようにである。

そこで研究1は、子どもにラベルの解釈内容を説明させるという方法をとる。子どもが一見、文脈には反した解釈をするとき、それが、a) ラベルの解釈に際して文脈を考慮せず、機械的に相互排他性を適用したためであるなら、彼は、「** (新奇なラベル) ってどんなもの？」と尋ねられても、答えに窮するにちがいない。それに対して、b) 未知物に文脈適合的な機能を想定することで矛盾解消を試みていたのであれば、子どもは、自分がラベルの指示対象だと判断した未知物のことを、その文脈にふさわしい機能を持ったものとして説明するだろう。

この方法がかかえる問題点は、子どもの不十分かもしれない説明能力に依存する点である。彼らが、ラベルの解釈内容を説明できたときは、それでよい。しかし、説

明できなかったときはどうか。「彼らはラベルの解釈に際して文脈を考慮しなかった。だから、解釈内容を説明するのに文脈を援用できず、答えに窮したのだ」と結論する前に、単に「彼らの説明能力が不十分だった」可能性についても考える必要があるだろう。

そこで研究1では、子どもの説明能力をチェックするため、事物選択の理由についても尋ねることにする。これまでの研究(針生, 1991)から、事物選択課題では年少児も既知物をよく選ぶことがわかっている。このような選択は文脈にそったものだから、理由を尋ねられたら文脈に言及すればよい。したがって、選択理由を説明するのは、文脈に反した解釈をして解釈内容を説明するより、ずっと容易な課題だと考えられる。容易であるはずの選択理由の説明で、彼らが不十分な説明能力しか示さなければ、解釈内容の説明で彼らが示した沈黙についても、そのままa)を反映したものと考えるわけにはいかないだろう。

このように研究1では、文脈から新奇なラベルの指示対象は既知物であることが示唆されるとき、保育園の年少(3歳後半)から年長(5歳後半)の子どもは、(1) どのような事物選択を行うか(事物選択)、(2) その事物選択をどのように理由づけるか(事物選択の理由)、(3) ラベルの指示対象は既知物だと判断するか、未知物だと判断するか(ラベルの解釈)、(4) ラベルの指示対象だと判断した事物について、どのような説明を行うか(解釈内容の説明)を取り上げる。その中で特に注目したいのは、子どもが、“ラベルは未知物を指す”と一見、文脈に反した解釈をしたとき、その解釈内容をどう説明するかという点である。彼らが答えに窮するようであれば、それは、彼らがa) ラベルの解釈に際して文脈を考慮しなかったからなのかもしれない。また、未知物に文脈適合的な機能があるということに言及するのであれば、彼らは、文脈と相互排他的な解釈との見かけ上の矛盾を、b) 未知物に文脈適合的な機能があることによって解消していたということだろう。

研究 1

方法

被験児：保育園の年少児(平均3:10, レンジ3:4~4:2)、年中児(平均4:11, レンジ4:6~5:5)、年長児(平均5:11, レンジ5:6~6:4)各20名。男女比は、どの年齢

Table 1 研究1で用いた事物、ラベル、文脈

	既知物	未知物	ラベル	文脈
①	りんご	リップミラー	へく	おなががすいている
②	石けん	カンバスクリップ	ミュ	泥んこになってしまった
③	クレヨン	バッグハンガー	ソイ	お絵描きをする
④	ハブラシ	パイ車	ルチ	歯みがきをする
⑤	靴	ところてん押し出し器	オヌ	お外に行く

群でも1:1であった。

材 料：実験で使用した事物、ラベル、文脈は、Table 1に示す。事物は、被験児以外の年少児12名で全員が、既知物に命名でき、未知物の名称、用途、使用場面は知らないことを確かめてある。ラベルは、無連想価50以上の無意味音節（梅本・森川・伊吹、1955）の中から選択した。

手続き：1対1の面接で行った。(1)被験児にはまず人形を紹介し、事物選択課題を実施する。これは、子どもに、文脈と新奇なラベルとを含んだ教示（たとえば「メリーちゃん（人形の名）はお腹がすいています（文脈）。ヘク（新奇なラベル）を渡してあげて」）を与え、りんご（既知物）とリップミラー（未知物）の中から一方を選択させる課題である。子どもの側から「ヘクって？」というような反応が出たときには、「メリーちゃんはお腹がすいています。（既知物と未知物を交互に指さしながら）この中からヘクを渡してあげて」と教示を繰り返し、必ずどちらかを選択させるようにした（強制選択）。この課題がTable 1の①から⑤すべてのセットで終了したら、(2)再び①のセットを提示し、「さっき先生が【～（事物選択課題での教示）】と言ったら〇〇ちゃんはどちらを渡してくれた？」と事物選択時の記憶を確認する。その上で「どうしてそれを渡してくれたの？」と尋ねる（事物選択の理由）。(3)被験児の選んだ事物、選ばなかった事物を順に指さし「これはヘク？」と尋ね、それぞれの事物に対するラベルの受け入れをチェックする（ラベルの解釈）。(4)「ヘクってどんなもの？」と尋ねる（解釈内容の説明）。このあと、②～⑤の事物セットでも(2)～(4)の手続きを繰り返した。面接中の被験児の言動は、筆記とテープレコーダーで記録した。

結 果

(1) 事物選択 (2) 事物選択の理由 (3) ラベルの解釈 (4) 解釈内容の説明
の順に報告する。

(1) 事物選択：各セットで既知物を選べば1点として、被験児ごとに5セットの合計（既知物選択得点）を求めた（強制選択事態なので、未知物の選択は既知物の選択と相補的な関係にある。したがってここでは未知物選択得点に関する分析は省略する）。各年齢群の平均得点（SD）

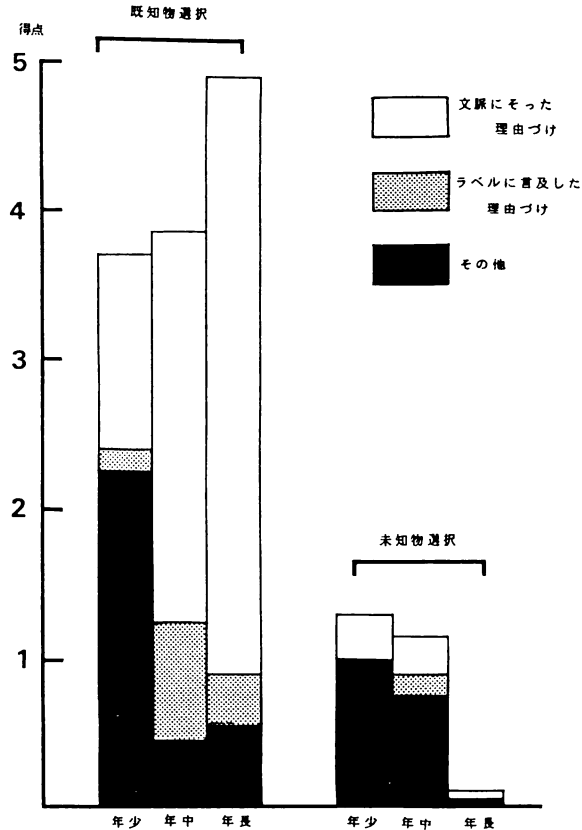


Figure 1 事物選択と選択理由 (研究1)

は、Table 2とFigure 1に示す。1要因配置の分散分析では、年齢の主効果が有意だった ($F(2, 57)=8.1, MSe=1.1, p<.001$)。対間比較 (Tukey法) で、年長児は、年少児や年中児より既知物を多く選択していたことが示された。

次に、それぞれの年齢集団の傾向を見るために、過半数の事物セットで既知物を選んだ被験児の数を数えた。その数は、年少児17名、年中児16名、年長児20名で、いずれも符号検定で有意 ($p<.05$) だった。こうして事物選択課題では、どの年齢の子どもも、既知物をよく選択しており、文脈にふさわしいのは既知物の方だと判断して

Table 2 各年齢児の既知物選択得点、既知物へのラベル受容得点、未知物へのラベル受容得点、解釈なし得点の平均 (SD)

	年少児	年中児	年長児
[事物選択]			
既知物選択得点	3.7(1.3)	3.9(1.2)	4.9(0.3)
[ラベル解釈]			
既知物へのラベル受容	1.0(1.5)	2.3(1.8)	4.5(0.9)
未知物へのラベル受容	2.2(2.0)	1.6(1.5)	0.2(0.5)
解釈なし	1.8(1.9)	1.2(1.6)	0.3(0.8)

いたことが示唆された。

(2) 事物選択の理由：文脈にそった理由づけ（「②で石けんを選び）泥んこをおとすから」など）、ラベルに言及した理由づけ（「（未知物を選び）これ（既知物）はルチじゃない」、「②で石けんを選び）石けんだから」など）、その他（「わからない」、「無反応」のほか、「（未知物を選択して見せ）これはこうやるから」²⁾、「ヘクに似ていたから」と述べた年中児の2反応をここに含めた）の3カテゴリーに分類された。事物選択で既知物を選んだ場合と未知物を選んだ場合で、各カテゴリーの平均反応数をFigure 1に、反応割合（%）をTable 3に示す。

おおざっぱに見て、既知物を選択した場合には文脈にそった理由づけが多く、未知物を選択した場合にはその他が多い。また、他の年齢の子どもに比べて年少児は、既知物を選択したときでも理由として文脈に言及することが少なく、その他が多くなっている。文脈にそった既知物を選択し、理由として文脈に言及することは、比較的容易な課題だと考えられたが、年少児に関するこの結果は、ことばで説明するという自体、彼らにとっては困難であったことを物語っている。

(3) ラベルの解釈：ラベルが一方の事物に受け入れられ（YES反応）、もう一方の事物には受け入れられなかった（NO反応）とき、ラベルは前者を指すと解釈されたと見なした。被験児が両方の事物にYES反応、あるいはNO反応、あるいは無反応であったとき、ラベルの解釈はされなかったもの（解釈なし）と見なした。こうして各事物セットでラベルが“既知物を指す”と解釈されれば1

Table 3 事物選択の理由づけ（各年齢児の、既知物を選択した場合と未知物を選択した場合でのうちわけ）

	文脈にそった理由づけ	ラベルに言及	その他
[既知物を選択した場合]			
年少児	35.1	4.1	60.8
年中児	67.5	20.7	11.7
年長児	81.6	7.1	11.2
[未知物を選択した場合]			
年少児	23.1	0.0	76.9
年中児	21.7	13.0	65.2
年長児	0.0	50.0	50.0

(単位：%)

2) これは、④の事物セットで、まずパイ車（未知物）を選択した被験児が、そのパイ車で、ハブラシをはさんでみせながら、このように言ったものである。これによって彼が、パイ車は“菌みがき”という文脈に使われることを示していたのだとすれば、これは文脈にそった理由づけととれないこともない。しかし、いかにも物をはさむことのできるような形をした未知物で、手近にあったハブラシをつかんでみたというだけなら、それは、文脈にそった理由づけとは言い難い。したがって、ここでは、一応、この反応を“その他”に分類しておくことにした。

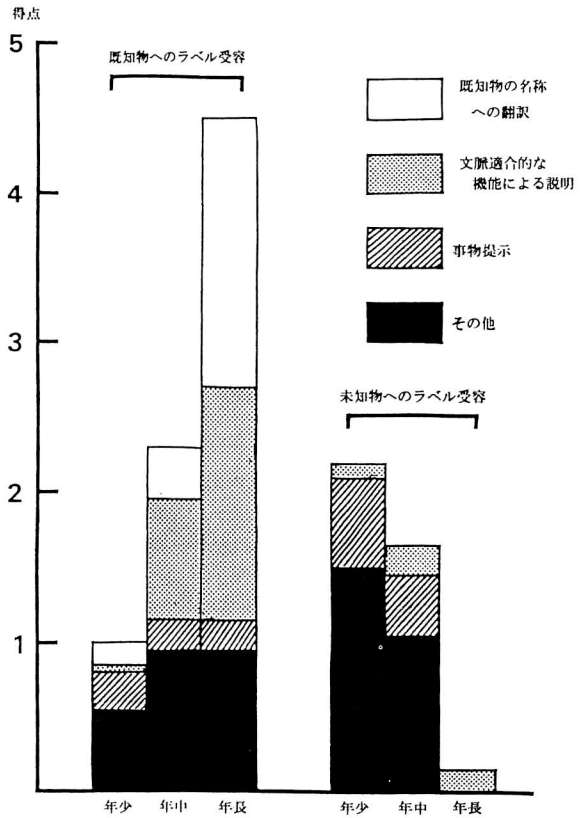


Figure 2 ラベルの解釈と解釈内容の説明（研究1）

点とし、5セットでの合計（既知物へのラベル受容得点）を求めた。“未知物を指す”と解釈された場合、解釈なしの場合についても同様に得点化し、未知物へのラベル受容得点、解釈なし得点を求めた。その平均得点（SD）を年齢ごとにTable 2に（既知物へのラベル受容得点と未知物へのラベル受容得点についてはFigure 2にも）示す。

既知物へのラベル受容得点は、1要因配置の分散分析で、年齢の主効果が有意であった（ $F(2, 57)=29.9$, $MSe=2.1$, $P<.001$ ）。対間比較（Tukey法）をすると、年少児<年中児<年長児で、年齢が高くなるほど、ラベルは“既知物を指す”と解釈されやすくなっていた。未知物へのラベル受容得点も年齢差が有意で（ $F(2, 57)=10.5$, $MSe=2.1$, $P<.01$ ），年少児=年中児>年長児，すなわち、ラベルが“未知物を指す”という解釈は、年齢が高くなるほど少なくなっていた。解釈なし得点も年齢差が有意で（ $F(2, 57)=5.0$, $MSe=2.3$, $P<.05$ ），ラベルの指示対象をはっきり定められないといったことは、年長児より年少児の方が多いたことが示された。

また、各年齢集団の傾向を知るため、5セット中、ラ

ベルは既知物を指すという解釈を未知物を指すという解釈より多く行っていた者と、どちらの解釈も同じだけしていた者の数をかぞえた。年少児は3名、6名、年中児は9名、2名、年長児は20名、0名で、符号検定から、年少児はラベルの指示対象を未知物としがちであるのに対して、年長児は既知物としがちであること、年中児に、このような解釈の偏りはないことが示された。

このほか、りんごがへくかどうかを問われて「(首を振りつつ) ううん。これりんご」と答える、というように、ラベルの指示対象が既知物であることを否定するとき、既知物の名称に触れる者が見られた。そこで、そのような反応を示した者の数をかぞえ、年少児14名、年中児11名、年長児0名であった。年少児、年中児では、事物の名称を既に知っていることが、新しいラベルをその事物の名称として受け入れることの妨げになっていることが伺われよう。

(4) ラベルの解釈内容：既知物の名称への翻訳（「靴のこと」など）、文脈適合的な機能による説明（「歯みがきするもの」「石けん、洗うもの」など）、事物提示（事物を指さす、「(事物を操作しながら) こういうの」など）、その他（「わからない」など）の4カテゴリーに分類された。ラベルの指示対象を既知物とした場合と未知物とした場合の、各カテゴリーの平均反応数を Figure 2 に、反応割合 (%) を Table 4 に示した。

当然のことながら既知物の名称への翻訳は、“ラベルは既知物を指す”と判断した場合にしか見られなかった。

事物提示に分類された反応はほとんどが、自分がラベルの指示対象だと判断した事物を指さすというものであった。ただし、年少児と年中児で各1例、②の未知物で歯をみがくまねをしてみせるといったことも観察された。このように子どもは、ことばで説明できなくても、未知物に文脈適合的な機能を想定し矛盾を解消していることがあるのだ。このことは、事物提示のみならず、その他にも当てはまることだろう。

“ラベルは未知物を指す”と解釈した場合の文脈適合的な機能による説明は、数として多くはなかったが、どの年齢の子どもにも見られた。少なくとも一部の子ども

は実際に、未知物に文脈適合的な機能を想定し、文脈と相互排他的な解釈との矛盾を解消していたのである。ここではそのことをとらえることができた。

考察

研究1では、まず事物選択やラベルの解釈に関して、先行研究(針生, 1991)の知見が追認された。すなわち、どの年齢の子どもも、事物選択課題では、文脈に適した既知物をよく選択していた。しかし、ラベルの解釈の仕方には年齢差が見られ、年長児は、“既知物を指す”としがちであったのに対して、年少児は、“未知物を指す”とすることが多かった。

また、解釈内容の分析から、子どもは、“未知物を指す”と一見、文脈に反した解釈をしても、b) 未知物に文脈適合的な機能があると考え、文脈と解釈の矛盾を解消している場合のあることが確認された。

この解釈内容の説明では、年少児や年中児に、その他や事物提示が多く見られた。研究1の予想の1つは、“未知物を指す”という一見、文脈に反した解釈が、a) 解釈に際して文脈を考慮しなかったことの結果であるなら、子どもは、解釈内容を説明するのに文脈を援用できず、答えに窮するだろうということだった。無反応や事物提示に関するこの結果は、この予想を支持するもののように見える。しかし、選択理由の分析からは、年少の子どもは、既知物を選んだ場合でも理由を述べられないことが多く、彼らにとっては、ことばで説明するという課題そのものが困難であることが示唆された。したがって、解釈内容の説明で、無反応や事物提示が多かったことについても、そのまま、a) ラベルの解釈に際して文脈を考慮しなかったことの反映と考えるわけにはいかない。

このように研究1では、“ことばで説明させる”という方法を用い、どの年齢でも一部の子どもたちは確かにb)の処理をしていることをとらえることができた。しかしその一方で、このような方法では、ある年齢の子どもたちの中で、どれだけ広くb)の処理が行われているかを、とらえきれないことも明らかになった。そこで、研究2では、子どもの説明能力に依存しないような方法をとる。具体的には、未知物には文脈適合的な機能がないことを

Table 4 ラベルの解釈内容(各年齢児の、“ラベルは既知物を指す”と判断した場合と“ラベルは未知物を指す”と判断した場合でのうちわけ)

	既知物の名称 への翻訳	文脈適合的な機能 による説明	事物提示	その他
“ラベルは既知物を指す”				
年少児	15.0	5.0	25.0	55.0
年中児	15.2	34.8	8.7	41.3
年長児	40.0	34.4	4.4	21.1
“ラベルは未知物を指す”				
年少児	0.0	9.1	25.0	65.9
年中児	0.0	12.1	24.2	63.6
年長児	0.0	100.0	0.0	0.0

(単位: %)

予め子どもに説明する条件を設定する。未知物に文脈適合的な機能がないということになれば、もはやb)の処理によって、文脈と相互排他的な解釈との矛盾を解消することはできない。それでも、文脈と解釈との整合性を保とうとするなら、あとは相互排他的な解釈を諦めるしかない。したがって、もし年少児や年中児が、それ以前に、b) 未知物に文脈適合的な機能を想定することで相互排他的な解釈を維持していたのであれば、そのような説明が与えられることによって、“既知物を指す”という解釈が増えるにちがいない。一方、彼らが文脈に反した解釈をするのが、a) ラベルの解釈に際して文脈を考慮しないためであるなら、未知物に文脈適合的な機能がないことを知らされようと、その解釈行動にほとんど変化はないと予想される。

研究 2

方法

被験児：年少児（平均3：11，レンジ3：7～4：5，男女比5：7），年中児（平均5：0，レンジ4：6～5：5，男女比1：1），年長児（平均6：1，レンジ5：6～6：5，男女比1：1）各36名を12名ずつ，以下の3条件に割り当てた。

条件設定：新奇なラベルが既知物の名称であることを示唆する文脈（Context；C）と，既知物には文脈適合的な機能があり未知物にはそのような機能がないことを述べる事物説明（Explanation；E）との組み合わせで，文脈あり・事物説明あり（C[+]E[+]），文脈あり・事物説明なし（C[+]E[-]），文脈なし・事物説明なし（C[-]E[-]）の3条件を設定した。

材 料：研究2で用いた事物，ラベル，文脈は，Table 5に示した。既知物と未知物は，未知物に文脈適合的な機能を想定しやすいよう，形の類似性を考慮して選んだ。これらの事物については，予め被験児以外の年少児，年中児，年長児各10名を対象に調査し，ほぼ全員³⁾が既知物には命名でき，未知物の名称，用途，使用場面は知らないことを確かめてある。ラベルは，梅本・森川・伊吹（1955）の無連想価50以上の無意味音節の中から選んだ。

Table 5 研究2で用いた事物，ラベル，文脈

	既知物	未知物	ラベル	文脈
①	ハブラシ	マスカラ	ヘク	歯をみがく
②	石けん	靴墨	レサ	手が汚れた
③	クレヨン	コンパス	ケミ	お絵描きをする
④	ブラシ	試験管洗い	ヌサ	髪をきれいにする
⑤	はし	茶勺	ニメ	ご飯を食べる

3) マスカラについては，年長の女兒2名が，使用場面を知っていた。

4) 事物説明としては，このように“文脈”を用いて「既知物は～するときに使う。未知物は～するときに使わない」といったものを与えた。

手続き：1対1の面接で行った。課題は，目の前に並べられた未知物と既知物のうちから一方を選び，人形に渡してやること（事物選択）と，教示中の新奇なラベルの指示対象はどちらの事物であるか判断すること（ラベルの解釈）である。

事物選択課題では，たとえばハブラシ（既知物）とマスカラ（未知物）を前にして，C[+]E[+]群には，「こっち（ハブラシ）は，歯をみがくときに使います。こっち（マスカラ）は歯をみがくときに使いません（事物説明）⁴⁾。今，ミッキー（人形の名）は歯をみがきたいと思っています（文脈）。ヘクを渡してあげて」といった教示が与えられた。C[+]E[-]群には，事物説明（部）がない教示「今，ミッキーは歯をみがきたいと思っています。ヘクを渡してあげて」が，C[-]E[-]群には，事物説明（部）も文脈（部）もない教示「ヘクを渡してあげて」が与えられた。事物選択は，研究1と同様，強制選択であった。

このようにして，事物選択がすべての事物セットで終了したあと，ラベルの解釈課題を行った。具体的には，まず再び①の事物セットを示し「さっき先生が『～（事物選択時の教示）』と言ったとき，〇〇ちゃん（被験児の名）はどっちを渡してくれた？」と尋ね，事物選択時の記憶を確認した。その上で，被験児の選んだ事物，選ばなかった事物それぞれについて「これはヘクだと思った？」と尋ね，ラベルの受け入れを問うた。この手続きを②から⑤の事物セットについても繰り返した。

デザイン：年齢(3)×条件(3)

結果と考察

(1) 事物選択 (2) ラベルの解釈の順に報告する。(1) 事物選択：各セットで既知物を選べば1点とし，5セットでの合計を既知物選択得点とした。各群の平均得点(SD)は，Table 6に示す。

年齢(3)×条件(3)の分散分析では，条件の主効果(F(2, 99)=40.0, P(.001)だけが有意で，年齢の主効果(F(2, 99)=0.2)や，年齢と条件の交互作用(F(4, 99)=0.9)は有意にならなかった(MSe=2.2)。対間比較(Tukey法)から，条件に関しては，C[-]E[-]群<C[+]E[-]

Table 6 各群の既知物選択得点と既知物へのラベル受容得点の平均(SD)

	C[+]E[+]	C[+]E[-]	C[-]E[-]
[既知物選択得点]			
年少児	4.1(1.2)	3.0(1.8)	1.3(1.3)
年中児	3.9(1.4)	3.3(1.7)	1.3(1.5)
年長児	4.3(1.4)	4.0(1.4)	0.8(1.6)
[既知物へのラベル受容得点]			
年少児	1.8(2.1)	1.2(1.6)	0.8(1.1)
年中児	3.2(1.7)	2.0(1.8)	0.8(1.5)
年長児	3.8(1.4)	4.0(1.4)	0.5(1.3)

群=C[+]E[+]群であることが示された ($p < .05$)。また、交互作用が有意にならなかったことから、文脈が与えられれば既知物がよく選択されるようになるといったこのパターンに、年齢差はなかったことが示唆された。

さらに、各群の選択傾向を知るために、5セットの中で未知物より既知物を多く選んでいた被験児の数をかぞえた。その人数は、年少児C[+]E[+]群が11*名、年少児C[+]E[-]群が9*名、年少児C[-]E[-]群が2*名、年中児C[+]E[+]群が11*名、年中児C[+]E[-]群が9*名、年中児C[-]E[-]群が2*名、年長児C[+]E[+]群が11*名、年長児C[+]E[-]群が11*名、年長児C[-]E[-]群が2*名で、すべて符号検定において有意だった(* $p < .05$; + $p < .10$)。すなわち、どの年齢においても、C[+]E[+]群とC[+]E[-]群は既知物を、C[-]E[-]群は未知物をよく選択していた。

以上、どの年齢の子どもも、ラベルだけが提示された場合 (C[-]E[-]群) には未知物を選択しがちだが、文脈が提示されれば既知物をよく選択するようになることが見いだされた。特にC[+]E[+]群とC[+]E[-]群のあいだに差がなかったことから、事物選択で被験児の注意を既知物に向けさせるには、文脈の提示だけで十分だったことが示唆される。また、文脈が提示されると既知物が選択されやすくなるといったパターンに年齢差がなかったことから、文脈にふさわしいのは既知物の方だと判断する点で、どの年齢の子どもも同じであったと言える。(2) ラベルの解釈: 研究1にならい、“既知物を指す”という解釈を得点化し、5セットでの合計を既知物へのラベル受容得点とした⁵⁾。各群の平均得点 (SD) は、Table 6とFigure 3に示す。

年齢(3)×条件(3)の分散分析では、年齢の主効果 ($F(2, 99)=8.3, p < .001$)、条件の主効果 ($F(2, 99)=18.7, p < .001$)、年齢と条件の交互作用 ($F(4, 99)=3.7, p < .01$) のすべてが有意になり ($MSe=2.5$)、対間比較 (Tukey法) から、既知物へのラベル受容得点は、①年長児C[+]E[+]群と年長児C[+]E[-]群が、年少児C[+]E[+]群、年少児C[+]E[-]群、すべての年齢のC[-]E[-]群より高いこと、②年中児C[+]E[+]群が、すべての年齢のC[-]E[-]群より高いことが示された。この結果は、年齢ごとに見れば、年長児はC[+]E[+]群=C[+]E[-]群>C[-]E[-]群、年中児はC[+]E[+]群>C[-]E[-]群、年少児ではどの群間にも差がなかったということである。

すなわち、年長児は、文脈がありさえすれば、未知物には文脈適合的な機能がないという説明を与えられるま

5) 研究2で、研究1の“解釈なし”にあたる反応を示した者は、年少児4名、年中児1名、年長児1名と非常に少なかった (未知物へのラベル受容は既知物へのラベル受容とほとんど相補的な関係にあると考えてよい)。したがって、ここでは、未知物へのラベル受容得点、解釈なし得点に関する分析は省略する。

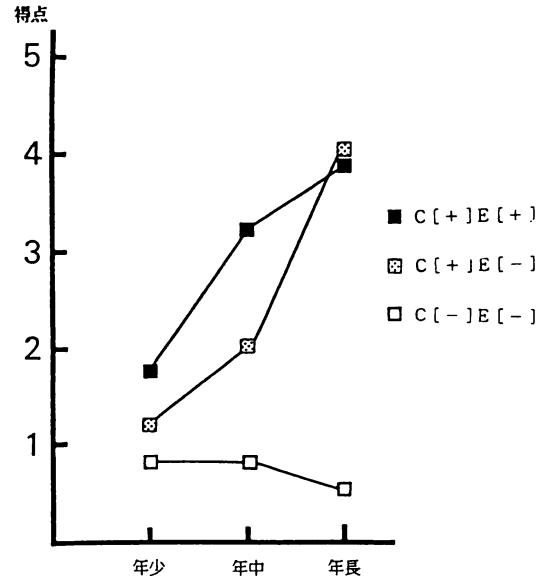


Figure 3 既知物へのラベル受容得点 (研究2)

でもなく、ラベルは“既知物を指す”と解釈していた。また、年中児の場合は、文脈だけの提示 (C[+]E[-]条件) で“既知物を指す”と解釈する程度は、文脈がないとき (C[-]E[-]条件) と同レベルにとどまっていたが、文脈に加えて事物説明が与えられれば、彼らの“既知物を指す”という解釈は、文脈がないとき (C[-]E[-]条件) より明らかに多くなった。最後に、年少児については、3群の間にははっきりした差を見いだすことはできなかった。

このほか、各群でどのような解釈が優勢だったのかを明らかにするため、“既知物を指す”という解釈が優勢であった者、“未知物を指す”という解釈が優勢であった者の数を群ごとに数え、符号検定を行った (Table 7)。ここでも、年中児は、事物説明が与えられると、“既知物を指す”という解釈が優勢になることが見いだされた。

未知物に文脈適合的な機能がないという説明は、b) の矛盾解消をできなくさせ、結果として、相互排他的な解釈の維持を困難にすると考えられるが、ここでは、そのような事物説明の効果は、年中児でのみ認められた。このことから、少なくとも年中児については次のようなことが言えるだろう。未知物には文脈適合的な機能がないことを説明される以前、彼らが一見、文脈に反した解釈を行っていたのは、必ずしも、解釈にあたって文脈を考慮しなかったためではない。彼らの多くは、b) のようなやり方で矛盾解消を試みていたのだ。そのため彼らは、そのようなやり方で矛盾解消が不可能になったと

Table 7 各群においてラベルは“既知物を指す”または“未知物を指す”という解釈をより多く行った者の数

年齢	優勢な解釈条件	“既知物を指す”	“未知物を指す”
年少児	C[+]E[+]	4	8
	C[+]E[-]	3	7
	C[-]E[-]	1	9*
年中児	C[+]E[+]	9*	3
	C[+]E[-]	5	7
	C[-]E[-]	1	11*
年長児	C[+]E[+]	11*	1
	C[+]E[-]	11*	1
	C[-]E[-]	1	11*

(単位：人；*… $p < .05$, **… $p < .10$)

き、相互排他的な解釈を諦めざるをえなくなった。その意味で、b) 未知物に文脈適合的な機能を想定することで相互排他的な解釈を維持している状態というのは、まさに、“文脈次第では1つの事物に複数の名称を認める”ようになっていく、その契機をはらんだものと言えるだろう。

一方、年少児が一見、文脈に反した解釈をする場合は、b) の処理によって矛盾を解消している者は多くなく⁶⁾、大部分の者が a) ラベルの解釈に際して文脈を考慮していないことが示唆された。

全体的考察

文脈から新奇なラベルの指示対象は既知物であることが示唆されるときにも、年少児や年中児は相互排他性に従い“ラベルは未知物を指す”と解釈したりする(針生, 1991)。このような解釈は文脈に反するもののように見えるが、このとき彼らは、a) 文脈を考慮しないでラベルの解釈をしていたのだろうか。それとも、b) 未知物に文脈適合的な機能があると考えることで、文脈と相互排他的な解釈との見かけ上の矛盾を解消していたのだろうか。この点を明らかにすることが、本論文の目的であった。

研究1では、子どもが“ヘク(新奇なラベル)は未知物を指す”のように、一見、文脈に反した解釈をするとき、“ヘク”のことをどう説明するのかに注目した。すると、自分がラベルの指示対象だと判断した未知物のことを、「ごはんを作るときに使うもの」のように文脈適合的な機能をそなえたものとして説明する者が、どの年齢の子どもの中にも見いだされた。こうして研究1は、子どもは実際b) の処理をしている場合があることをとらえることができた。しかし同時に、子どもの説明能力は限られたものであり、ことばで説明させるという方法では、

6) 研究1では、年少児でも一部の者は、b) の処理を行っていたことが示されている。

その年齢段階の子どもがどれだけb) の処理を行っているか、明らかにできないこともわかった。

そこで研究2は、子どもの説明能力に左右されないような方法での検討を試みた。すなわち、未知物には文脈適合的な機能がないことを説明した場合、子どもの解釈行動が変化するかどうかを見た。もし彼らが b) 未知物に文脈適合的な機能を想定することで相互排他的な解釈を維持しているなら、そのような説明は、b) の処理を挫折させ、相互排他的な解釈の維持を困難にする。結果として、“既知物を指す”という解釈が増えると予想された。このような予想は、年少児では確かめることができなかったが、年中児では、ほぼ確かめられた。すなわち、年少児の文脈に反したラベル解釈は、彼らが a) ラベルの解釈に際して文脈を考慮しないためであること、一方、年中児の場合は、b) 未知物にも文脈適合的な機能があると考え、文脈と相互排他的な解釈との見かけ上の矛盾を解消していることが示唆された。

このように研究2では、文脈に反してまで新奇なラベルを相互排他的に解釈する、その内的なプロセスは、年少児と年中児で大きく異なることが示された。年少児の解釈過程とは、言ってみれば、ラベルの解釈という課題に対して、文脈など考慮しないで機械的に相互排他性を適用するといったものである。それに対して年中児は、相互排他的な解釈にこだわりながらも、文脈をも考慮に入れ、解釈との整合性を保とうと試みている。それが b) 未知物に文脈適合的な機能を想定することである。

このb) の処理は、未知物に文脈適合的な機能がないことがわかれば挫折する。そして、それでも文脈と解釈との整合性を保とうとするなら、あとは相互排他的な解釈を諦めるしかない。その意味でb) の挫折は、相互排他性に反した解釈をするよう、直接、子どもを導くものと言える。

一方、b) の処理がこのように明示的なたちで挫折させられることがなかったとしても、1回1回のラベル解釈で、文脈にふさわしいことが明らかな既知物を避け、未知物に文脈適合的な機能を想定することは、煩雑であるし、リスクも大きい。“文脈を意識しつつ、より安定した解釈方略を求めていくなら、子どもは遅かれ早かれ、“文脈次第では1つの事物に複数の名称を認める”といった言語観に達することになるのだろう。

いずれにせよ、ラベルの解釈に際して文脈を考慮に入れ、文脈と矛盾しない解釈を志向していく中で、子どもは、“適切な文脈があるときには既知物にも複数の名称を認める”ようになっていくのだと考えられる。

文 献

- Carey, S. (1982). Semantic development: The state of the art. In E. Wanner & L. R. Gleitman (Eds.),

- Language acquisition: The state of the art.* Cambridge, England: Wiley.
- Inhelder, B., & Piaget, J. (1964). *The early growth of logic in the child.* London: Routledge & Kagan Paul.
- Macnamara, J. (1982). *Names for things: A study of human learning.* Cambridge: MIT Press.
- Markman, E. M. (1987). How children constrain the possible meanings of words. In U. Neisser (Ed.), *Concepts and conceptual development.* Cambridge: MIT Press.
- Markman, E. M., & Hutchinson, J. E. (1984). Children's sensitivity to constraints on word meaning: Taxonomic versus thematic relations. *Cognitive Psychology*, 16, 1-27.
- Markman, E. M., & Wachtel, G. F. (1988). Children's use of mutual exclusivity to constrain the meanings of words. *Cognitive Psychology*, 20, 121-157.
- Mervis, C. E. (1980). Category structure and the development of categorization. In R. J. Spiro, B. C. Bruce & W. F. Brewer (Eds.), *Theoretical issues in reading comprehension.* Hillsdale: LEA.
- 針生悦子. (1991). 幼児における事物名解釈方略の発達の検討～相互排他性と文脈の利用をめぐる～. *教育心理学研究*, 39, 11-20.
- 針生悦子. (1992). 事物選択経験がラベルの解釈に及ぼす効果～幼児期における解釈方略の発達の变化との関連で～. *教育心理学研究*, 40, 170-177.
- 針生悦子. (1993). 外国語ラベルに対する幼児の解釈方略～相互排他性原理との関連で～. *教育心理学研究*, 41, 349-357.
- Quine, W. V. O. (1984). *ことばと対象* (大出晃・宮館恵, 訳) 東京: 勁草書房. (Quine, W. V. O. (1960). *Word and object.* MIT Press.)
- Sophian, C., & Somerville, S. C. (1988). Early development in logical reasoning: Considering alternative possibilities. *Cognitive Development*, 3, 183-222.
- 梅本堯夫・森川弥寿雄・伊吹昌夫. (1955). 清音2字音節の無連想価及び有意味度. *心理学研究*, 26, 148-155.

付 記

研究にご協力くださった保育園、幼稚園の先生方、園児の皆様にご心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成3・4年度文部省科学研究費補助金（一般研究B：課題番号03451014）の援助を受けました。

Haryu, Etsuko (University of Tokyo · JPSP Fellowships for Japanese Junior Scientists); Omura, Akimichi (University of Tokyo) & Hara, Hiromi (University of Tokyo). *Children's Use of Mutual Exclusivity in Interpreting Novel Labels: Effects of Explanations about Unfamiliar Objects.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 41-50.

In a previous study (Haryu, 1991), three-year-old children, when asked to choose a familiar vs. unfamiliar object as a referent for a novel label, tended to choose the unfamiliar object. They did so even though they were told that the familiar object was related to the task context, probably because they assumed category terms to be mutually exclusive. The present study examined the possibility that children may resolve the conflict between mutual exclusivity and context by thinking that the unfamiliar object was also relevant to the context. In Study 1, some children explained their interpretations, saying that the unfamiliar object was relevant to the task context. In study 2, when children were told in advance that the unfamiliar object was not relevant to the context, four-year-olds suspended the use of mutual exclusivity, but three-year-olds persisted in its use. This suggests that when interpreting the novel label given in the context as referring to the unfamiliar object, only four-year-olds were able to resolve the conflict between the mutual exclusivity and context.

[Key Words] Cognitive development, Early childhood, Categorization, Mutual exclusivity, Object labeling

チンパンジー幼児における自己鏡映像認知 —縦断的研究と横断的研究—

井上 徳子

(関西学院大学文学研究科)

チンパンジー幼児の自己鏡映像認知の発達過程を、縦断的観察(実験Ⅰ)と横断的観察(実験Ⅱ)によって検討した。実験Ⅰの被験体は生後9週齢から人工哺育で育てられたメスのチンパンジー1頭で、実験開始時に76週齢、実験終了時に87週齢だった。ケージ内に鏡を設置し、1日1試行10分間の呈示を47試行おこなった。被験体が鏡呈示事態において示したさまざまな行動を50種の行動型として記述した。さらにこれらを社会的反応、探索反応、協応反応、自己指向性反応、複合反応の5つの行動カテゴリーに分類した。被験体は社会的反応や探索反応から、協応反応や自己指向性反応へと出現行動カテゴリーを変化させ、最終的には複合反応を示すに至った。いわゆる「自己意識」の成立の指標とされる自己指向性反応を被験体が示したのは1歳半を過ぎてからだった。実験Ⅱでは、過去に鏡に関する経験を持たない1歳4カ月から4歳11カ月のチンパンジー幼児17頭を被験対象とした。1試行40分間の鏡呈示を実施し、試行中に出現した鏡に関する行動を、実験Ⅰと同様の行動カテゴリーに分類した。40分間の試行内における鏡に関する行動は3歳半以上の被験体で特に変化した。社会的反応は最初の10分間で急減し、その後、自己指向性反応および複合反応が出現した。各行動カテゴリーの加齢に伴う出現変化も同様の傾向がみられた。年少の被験体は社会的反応を主に示し、年長の被験体は自己指向性反応や複合反応を示した。横断的観察で得られた自己鏡映像認知の発達過程は、縦断的に観察したチンパンジー幼児やヒト乳幼児の例と同様だった。だが自己指向性反応が現われ始めた時期は横断的観察では3歳半頃で、繰り返し鏡が呈示された実験Ⅰの被験体よりも、約2年遅れていた。自己鏡映像の認知能力は、加齢に伴う成熟と、自己鏡映像に関する学習経験量によって決まることが示唆された。

【キー・ワード】チンパンジー、自己認知、鏡映像、縦断的方法、横断的方法

ヒトの自己鏡映像認知過程に関する研究は、その多くが乳幼児を対象としている(Amsterdam, 1972; Wallon, 1934)。たとえばAmsterdam (1972)は、乳幼児の鏡に対する反応には次の3段階に分けられる発達の変化が認められると報告した。まず第1段階(およそ6カ月から11カ月)は、「他者への反応」の時期である。鏡映像に対して笑いかけたり、発声したり、ほおずりしたりなどの反応がみられ、やがて1歳半にかけて急速に減少する。第2段階(およそ9カ月から14カ月)は、「鏡映像の探索」の時期で、やはり1歳半頃まで続く。鏡映像を観察したり、鏡の後ろを探索する行動がみられる。鏡に映った像の運動を積極的に観察するようになるのもほぼこの時期である。探索の時期の後には「鏡から回避する反応」の時期が続く。鏡映像に対して後込みしたり、泣きだしたりする。第3段階(18カ月から24カ月)は、「自己認識」の時期である。この頃になると、鏡映像に対する社会的反応はほとんどみられなくなり、恥ずかしそうにチラッと鏡を見たり、おどけた顔をしてみせたり、自分の顔にみとれたりという反応が見られるようになる。さらに、鼻の横につけられた口紅を鏡に映してよく見ようとしたり、手で触れたりするような反応も出現する。また母親の「あ

れは、誰？」との問いかけに対して、自分を指さしたり、自分の名前で答えることができるようになる。このような鏡映像認知の問題は、幼児における自己意識の発達の指標として古くから論じられてきた。

このような認知能力はヒトに特有な行動として考えられてきたのだが、ヒトに限定された特性ではないと主張したのがGallup (1970)である。彼は、ヒト以外の霊長類を対象にして自己鏡映像認知に関する実験をおこない、霊長類のなかでもチンパンジーは鏡映像を自己と認識できると報告した。鏡呈示の初期の段階では、チンパンジーは鏡映像に対して親和的行動や威嚇行動など社会的反応を示した。しかし、しだいにそのような社会的反応は減り、そのかわりに自分に向けられる反応(以下自己指向性反応と呼ぶ)が増えた。自己指向性反応とは、鏡がなければ直接見ることができない部分を鏡を見ながら毛づくろいしたり、鏡を見ながら口を大きくあけて歯にはさまったものをとったりする反応である。この他、鏡に向かっておかしい顔をつくったり、鏡映像を見ながら口から唾をだしたりする反応も含まれる。また、10日間の観察が終了した翌日に被験体に麻酔処置を施し、左隆眉(眼窩上隆起の上部)と右耳上部に赤い染料をつけた。麻酔

Table 1 鏡に対する各行動カテゴリーの初出時期：マカザル・類人猿・ヒトの比較

		Infant (in months)						Young Adult (in years)	
		Monkey : 0-6	7-11	13-18	19-24	25-30	31-59	1-4	5-16
Monkey	Gallup (1977)							a	
	Gallup et al. (1980)								a
	Anderson (1986)								abc*
	Itakura (1987)							abcdf*	
Gorilla	Suarez et al. (1981)							a	a
	Ledbetter et al. (1982)							a	
Orangutan	Suarez et al. (1981)								adf
	松沢 (1985)	a	b						
	Robert (1986)					abcd			
Chimpanzee	Gallup (1970)							abcdf	
	Menzel et al. (1985)								abcdf
	松沢 (1985)	a	b						
	Robert (1986)		a	b					
	井上 (実験 I)			a	bcde				
Human	Amsterdam (1972)	a	bd	d	f				
	Wallon (1965)	a	b	cd					

(a) 社会的反応, (b) 探索反応, (c) 協応反応, (d) 自己指向性反応, (e) 複合反応, (f) 染料テスト

*: 訓練試行あり

から醒めたのち、鏡呈示条件と鏡なし条件とで、染料付着部位に触れる回数を数えたところ、鏡呈示条件下のほうが、鏡なし条件下よりも有意に多かった。さらに染料付着部位に触れた指先の匂いを嗅ぐ反応さえみられた。これら自己指向性反応は、鏡映像の視覚的情報を、身体の内受容的感覺や、動作に伴う筋肉のフィードバック情報と重ね合わせる必要があると、自己鏡映像認知の指標になり得るものと考えられてきた(室伏, 1978)。

このように、チンパンジーにおける自己鏡映像認知能力は、ヒト乳幼児のそれと非常に類似していることが明らかにされてきた。しかしながら、これまでの霊長類に関する自己鏡映像認知実験は、そのほとんどが成体あるいは若者を対象としていた (Table 1)。研究の焦点は、チンパンジーが鏡映像を認知できるか否かに絞られ、その発達過程を検討するものではなかった。そこで本研究では、チンパンジー幼児の自己鏡映像認知の発達過程を検討するために縦断的観察と横断的観察をおこなった。

実験 I

目的

実験 I では、チンパンジー幼児を対象として、鏡に対する反応を縦断的に観察することを目的とした。これまでの報告 (Gallup, 1970 など) では、被験体の示す行動型の詳細を記述した例はなく、具体的にどのような行動が、いかなる順序であらわれてくるのかについての記載はなかった。そこで、被験体の示す具体的な行動を詳細に記述し、鏡に対する反応の行動目録を作ることを目的とした。

方法

被験体 被験体は1990年1月9日生まれのメスのチンパンジー幼児1頭(愛称マヤ、日本モンキーセンター所属)。このチンパンジーは、出生から約2カ月間は母親のチンパンジーに育てられたが、そのあいだ母親が著しく衰弱し育児を放棄したために、3月13日(生後9週齢)に人工哺育に移された。その後ほぼ毎日約2時間、被験体の行動発達の直接観察をおこない、毎回授乳後に約20分間のビデオ録画をした。なお本研究と並行して、6カ月齢から12カ月齢までは、2週に1回、約10分間の鏡呈示を含む対象操作・姿勢発達の検査がおこなわれた(竹下、未発表)。また8カ月齢時には「愛着」に関する実験(井上・日上・松沢, 1992)をおこなった。被験体の身体的発達は、人工哺育で育てられた他のチンパンジーの事例(熊崎, 1983)と比較して差異はなかった。本実験における被験体の年齢は、開始時76週齢、終了時87週齢だった。**装置** 実験は室内に設置された飼育ケージ(2.3m×1.2m×0.7m)内でおこなった。このケージは前面が透明なアクリル板で、後面および片側面が不透明なステンレス、他側面が金網状の開閉扉だった。ケージ内には1本のロープを吊り、その先端におもちゃを結び付けた。その他に随時、リンゴ片、おもちゃ、紙きれなどをケージ内に置いた。ステンレスの側面から約20cm離し、床から約30cmの高さに中心が位置するよう1枚の鏡(25cm×30cm)を吊り下げた。したがって、被験体は鏡の後ろを見ることが可能だった。ビデオカメラ(ソニー株式会社製、CCD-TR55/NTSC8)を前面側のケージの外に設置した。

Table 2 行動カテゴリーと定義とその例

カテゴリー	定義	行動型の例
(a) 社会的反応 Social behavior	鏡映像を他個体とみなしているような反応。	鏡面に対して口を開けて歯をむき出す 鏡映像にキスをする
(b) 探索反応 Exploratory behavior	鏡あるいは鏡映像を探索する反応。	鏡の裏をのぞき込む 鏡に手を触れる
(c) 協応反応 Contingent behavior	鏡映像の視覚イメージと、自分の運動感覚とを結びつけていると思われる反応。身体動作の開始が、鏡に視線を向けることよりも先行する。	身体を動かしながら鏡を見る 手をなめながら鏡を見る 紙を破りながら鏡を見る
(d) 自己指向性反応 Self-directed behavior	自分の身体に対して向けられた反応。身体動作の開始前に、鏡を見る状態が先行する。	鏡を見ながら自己の身体部位を触る 鏡を見て舌を出す 鏡を見ながら口からあわをふく
(e) 複合反応 Complex behavior	自己指向性反応、協応反応あるいは探索反応を2つ以上組み合わせる。	鏡を見て、手の玩具と口を同時に動かす 鏡面を指さしながら他方の手で裏を探索

手続き 1 試行10分間の鏡呈示をおこなった。試行中には、鏡に映るように被験体の背後におもちゃを1個呈示した。第1試行から第4試行までは、ほぼ1週間に1回、第5試行から第47試行までは、ほぼ1日に1回おこなった。試行中の被験体の行動をビデオカメラで録画した。直接観察とビデオ録画の再生によって、チンパンジーが鏡に対して示した行動の目録を作った。さらに、鏡に対する個々の行動型を Table 2 に述べる5つの行動カテゴリーにまとめた。

結果

被験体は鏡を呈示する事態において、鏡に対してさまざまな行動をあらわした。Table 3は各試行においてみられた被験体の鏡に対する行動を示している。左欄は上段より行動を出現順に配列している。右欄には各試行においてみられた行動型を各カテゴリーに対応する印で示した。鏡に対する行動型が全部で50種識別できた。初期の試行では、鏡に顔を近づけたり(1)、鏡映像の目を見つめながら鏡にキスをする(2)といった社会的反応や、鏡の横に回り込んだり(5)、裏を横からのぞき込む(6)といった探索反応しかみられなかった。おもちゃを手にもって鏡をながめたり(14)、鏡面で他者と目が合うと振り向いて見る(16)といった協応反応が初めてみられたのは77週齢で、頻発するようになったのは82週齢を過ぎてからであった。鏡を見ながら自分の口を指さしたり(21)、下唇を突き出したりする(25)のような自己指向性反応は82週齢に初出して、85週齢にかけるまでよく見られた。鏡を見ながら手にもったおもちゃを動かして同時に口も動かす(41)といった複合反応が初めてみられたのは85週齢であった。この他に複合反応として、鏡を見ながら自分の左手をなめて同時にロープに吊されたおもちゃを右手で動かす行動(44)や、鏡に近づいて鏡映像を見ながら右手で鏡を指さし、左手で鏡の裏を探索(50)

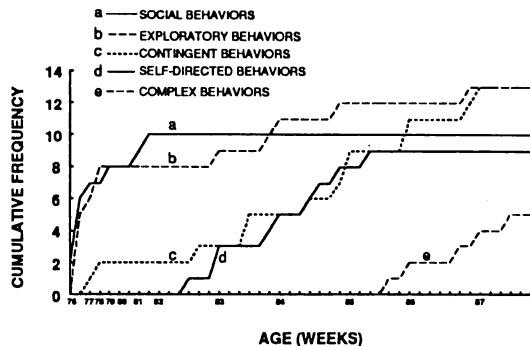


Figure 1 鏡に対する各行動カテゴリー別にみた初出行動項目の累積頻度

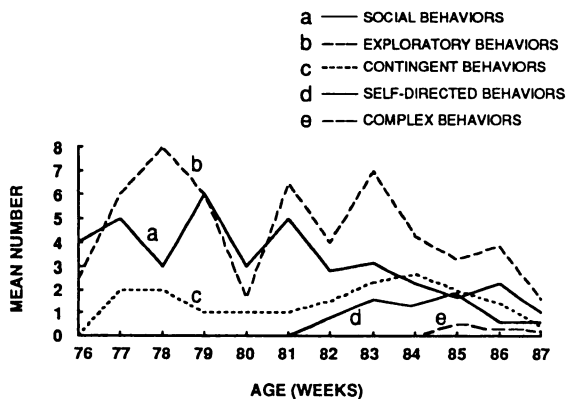


Figure 2 鏡に対する各行動カテゴリー別にみた1試行あたりの行動型の平均出現回数

といった行動が見られた。

Figure 1は、5つの行動カテゴリー別にみた初出行動項目の累積頻度を表したものである。社会的反応や探索反応は、初期の試行から出現し、続いて協応反応、自己

Table 3 チャンパンジー幼児が鏡に対して示した行動目録とその発達的变化

出現順	試行 週齢 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50		
行動型	76 01	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87																																									
年齢	05	06				07																																															
日	19:25	02:10	22:25	28:30	01:07	08:10	11:12	13:14	15:17	17:18	19:20	21:22	23:24	25:26	27:28	29:30	31:32	33:34	35:36	37:38	39:40	41:42	43:44	45:46	47																												
行動型	鏡の映像の目を見つめながら鏡にキスをする	鏡の映像を見つめながら移動する	鏡の顔を覗き込む	鏡の横に回り込む	鏡の真の横からのぞき込む	鏡の真の前で立ったり座ったりする	鏡の前で両手で床を叩く	鏡を何度も振り向く	鏡の顔を指で触る	鏡面を指で触る	端をもって鏡を倒そうとする	鏡面に覆いかぶさる	物を手にしながら鏡を見る	鏡の真を上からのぞき込む	鏡面で他者と目が合うと振り向く	鏡面の真を手で探る	鏡面に頭突きする	口を開けて鏡をひき出す	鏡を見て口を指さす	一回転しながら鏡を見る	鏡を吊るヒモをもつ	鏡を見て「ア・オ・ウ」判の口に動かす	鏡を見て下唇をぶろと突き出す	吊つてある玩具を背中にもわらしながら鏡を見る	鏡を裏返して調べようとする	鏡を見て鏡の横からツバを吐く	鏡の下をのぞき込む	鏡を見て自分の身体をかく	鏡を見ながら物をかむ	背後に新奇物を示すと振り向く	鏡を見て口をわすかに開ける	背後のロープをつかみながら鏡を見る	鏡を見て舌を出す	顔をゆつくり上下に揺りながら鏡を見る	顔をゆつくり手を鏡前に出してから上に挙げる	鏡を見てリングのかさを舌先に出す	鏡を見て手にもった玩具を動かしながら口も動かす	上体を動かしてはじめて鏡を見る	手をなめながら鏡を見る	鏡を見て手をなめながらロープの玩具も動かす	玩具を口に入れながら立って身体を動かす	手で物を口に入れていたり出して鏡を見る	鏡の真に指先をまわす	対象物を持ちながら口を大きく開けて鏡を見る	紙を破りながら鏡を見る	鏡を見て鏡面を指さしながら他方の手で真を探る							

○社会的反応、□探索反応、◇協応反応、◆自己指向性反応、★複合反応

指向性反応、さらに後になってから複合反応が出現したのがわかる。また、社会的反応に分類される行動型は82週齢以降はまったく初出しなかった。協応反応は前半から後半にかけて持続的に出現した。

Figure 2は、各行動カテゴリー別にみた1試行あたりの行動型の平均出現回数を被験体の週齢ごとに示したものである。すなわち、どのカテゴリーの行動がどれだけ多様に観察されたかを示している。社会的反応や探索反応は前半に多く出現し、後半になると減少した。協応反応は前半から後半にかけて持続的に出現した。また自己指向性反応は、後半になってからよく出現するようになり、複合反応はさらに後になってからわずかに観察された。

考 察

Table 2に示されたように、チンパンジー幼児は鏡呈示試行においてさまざまな行動をあらわした。Figure 1の初出行動項目の累積頻度、ならびにFigure 2の行動型の平均出現回数からは、チンパンジー幼児の鏡映像に対する行動が、社会的反応、探索反応、協応反応、自己指向性反応、複合反応の順に発達することがわかった。

マカザル類は、特別に訓練されない場合、社会的反応と探索反応しかあらわさない(Gallup, 1970など)。またチンパンジーでは、自己指向性反応まで示すが、それがいつ頃初出するのかわからない。本実験の結果より、1歳半のチンパンジー幼児でも、鏡を毎日10分間呈示するだけで特別な訓練なしに自己指向性反応をあらわすようになることがわかった。

Table 1に示したように、ヒトの子どもと今回の結果も含めたチンパンジー幼児との自己鏡映像認知の発達を比較すると、両者は非常に類似していることがわかる。チンパンジーに関する松沢(1985)およびRobert(1986)の結果と今回の結果で、社会的反応(a)と探索反応(b)の初出時期に多少のずれが生じている。これは本実験が開始されたとき、被験体がすでに76週齢になっていたことが原因と考えられる。本実験でも、被験体の年齢がもっと低いころから開始されていたら、12カ月齢以前にすでに社会的反応や探索反応があらわれていたと思われる。実際に、2週間毎におこなった短時間の鏡呈示では、被験体は6~12カ月齢においては社会的反応を示し、10カ月齢頃に探索反応も示し始めた(竹下, 私信)。以上をまとめて考えると、ヒトとチンパンジーの幼児は、鏡に対して示す行動の種類のみならず、その行動をあらわす順序に関しても類似していることがわかった。

Figure 1とFigure 2に示したように、協応反応と自己指向性反応の出現の仕方は、前者が後者にやや先行してほぼ重なり合っていた。協応反応と自己指向性反応は、ともに鏡を見ながら身体の一部を動かす反応であったが、

身体動作と鏡に視線を向ける行動が生起する時間的順序によって区別された。すなわち、ある身体動作が鏡を見る行動に先行する場合は協応反応であり、自分の運動感覚と鏡映像の視覚イメージとを結びつけている状態であると考えられる。いっぽう、鏡を見る行動がある身体動作に先行する場合は自己指向性反応であり、自分の身体に対して行動を向けるために積極的に鏡を利用している状態と考えられる。したがって、協応反応がみられる段階は、鏡の性質を学習している状態であり、自己指向性反応がみられたということは、被験体が鏡の性質を理解したといえるだろう。ヒトの幼児における自己認知実験(Johnson, 1983)でも、「随伴行動(本実験でいう協応反応)は、発達的に自己認知に先んずる」といわれている。

また、本実験ではこれまでの報告にはなかった行動カテゴリーとして複合反応がみられた。この反応は、自己指向性反応、協応反応あるいは探索反応を2つ以上組み合わせる行動である。Piaget(1967)によると、認知発達の段階は感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の4段階に区分されており、そこでは感覚運動期の第4、5段階あたりになって「2次のシエマの協応や既知手段の新しい場面への適応が可能となる」と述べられている。鏡映像に興味をもって遊ぶ、鏡の性質を調べる、あるいは鏡を利用するといったことのために、2つ以上の動作を同時におこない得ることは、認知発達のみにみても非常に重要な意味をもつと思われる。

各行動カテゴリー別にみた1試行あたりの行動型の平均出現回数はFigure 2に示された。これによると、社会的反応や探索反応は、加齢とともに減少する傾向が認められる。ヒトの幼児でも、鏡映像にさわるといった社会的反応や、鏡をさわったり調べる探索反応は2歳をすぎたころには減少する(Amsterdam, 1972; Dickie, & Strader, 1974; Schulman, & Kaplowitz, 1977)。しかしながら本実験のチンパンジー幼児の場合、社会的反応や探索反応は実験終了時まで、消失してしまっているのではなく、頻度は減少しているが最後まで残っていた。これはヒトの幼児でも同様の結果が報告されている(Schulman, & Kaplowitz, 1977; Lewis, & Brooks-Gunn, 1979)。Schulman, & Kaplowitz(1977)は「初期の行動は、加齢とともに消失するものではなく、むしろ、後の、さらに複雑な行動が形成されるための基礎として働くものである」と結論づけた。このように考えると、本実験においても実験開始初期にあらわれた行動が後半まで残り、その間に新たな行動もあらわれたと理解できるだろう。

このように、チンパンジー幼児は鏡を呈示する事態において、鏡に対するさまざまな行動を示した。自己指向性反応があらわれ、鏡に映った自己像と自分の動きとの随伴性を理解することが可能になるのは1歳半をすぎたか

らだった。また、チンパンジー幼児があらわした行動の種類や、その行動が出現する時期・順序は、ヒトの幼児に非常に類似していることが明らかになった。

実験 II

目的

実験 I では、チンパンジー幼児の鏡映像認知を検討するために、1頭の被験体を対象として、行動を詳細に記載する縦断的研究をおこなった。被験体は、ほぼ毎日おこなわれた10分間の鏡呈示試行において、さまざまな自発的反応を示した。その結果、直接には見ることでできない身体の一部を鏡を利用してさわったり、あるいは鏡映像を見ながら舌を出すといった自己指向性反応を、1歳半を過ぎた頃から早くもあらわし始めた。この実験では、鏡の呈示が繰り返しおこなわれたので、被験体の自己鏡映像認知学習が促進された可能性がある。したがって、過去に鏡に関する経験を持ったことのないチンパンジー幼児が、1回の鏡呈示試行で、鏡に映った自己像と自分の動きとの随伴性を理解し、自己指向性反応をあらわすことが可能になる年齢は、1歳半よりもかなり後になってからだろうと予想される。

そこで実験 II では、過去に鏡に関する経験を持ったことのない1歳4カ月から4歳11カ月のチンパンジー幼児17頭を対象にして鏡呈示試行をおこない、鏡に対する反応の横断的研究を実施することを目的とした。

方法

被験体 被験体は、(株)三和化学熊本研究所霊長類センター所属のチンパンジー幼児17頭(オス6, メス11)だった。これらのチンパンジーは、すべて人工哺育であり、数名の飼育担当者によって身の世話等がなされた。被験体は、2頭から4頭ずつ年齢別にホームケージ内でグループ飼育されていた。年齢による内訳は Table 4 (年齢は下限以上で上限未満)の通りである。

装置 実験は被験体のホームケージ(1.2m×2.4m×2.5m)内でおこなわれた。このケージは、天井と床および全側面が鉄柵で、前面は開閉扉になっていた。

鏡(25cm×30cm)は、鉄柵扉のすぐ外側に設置された。したがって、被験体は鏡の後ろを完全に見ることは不可

能だったが、鏡をのぞき込んだり、触れたりすることは可能だった。被験体の行動は鏡の後方上部から、ビデオカメラによって録画された。被験体を追うためにカメラを随時動かした。

手続き 全被験体はホームケージにおいて同室の仲間とともに、1試行40分間の鏡呈示試行を受けた。これは、グループから1個体のチンパンジーを引き離すと、安定した情動状態が損なわれ、認知能力の正確な検査が不可能と判断されたためである。ただし、他個体が存在する状況下でも、鏡に対する各種反応の生起に及ぼす影響はほとんどなかったと考えられる。実際に、グループ内の特定個体だけが鏡を占有することはなかった。また、全被験体ともまだ身体が小さかったので、数個体が同時に鏡面に映ることが可能だった。試行は、被験体に鏡を呈示するだけで、他の実験操作はいっさいおこなわなかった。

試行中に出現した鏡に対する個々の行動型は、実験 I のそれと基本的に違いはなかったので、実験 I と同様の(a)社会的反応、(b)探索反応、(c)協応反応、(d)自己指向性反応、(e)複合反応の5つの行動カテゴリーに分類した。

結果

Figure 3は、被験体の鏡に対するすべての行動の総生起時間を、各年齢群ごとに平均して示している。年齢が高くなるにつれて、より長い時間、鏡に関する行動をあらわしていることがわかる。また、2歳半以上の年齢群において、時間の経過にしたがって、鏡に関する行動の生起時間は減少している(Figure 4)。

Figure 5は、生起したすべての行動に対する各行動カ

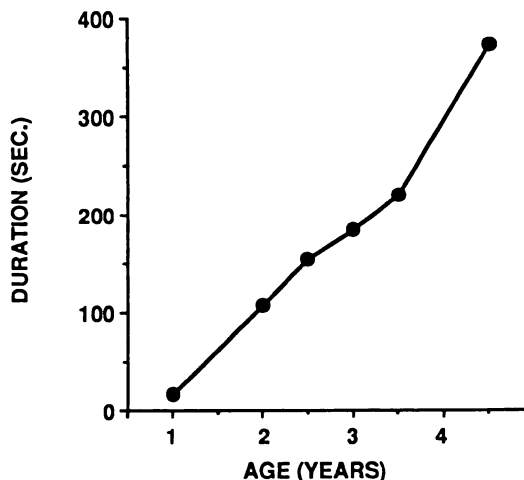


Figure 3 各年齢群における鏡に対する行動の総生起時間

Table 4 年齢群の構成

GROUPS	RANGE OF AGE (in years and months)	NUMBER OF SUBJECTS
1.0 year	1:0~1:6	3 (♀3)
2.0 year	2:0~2:6	2 (♂1, ♀1)
2.5 year	2:6~3:0	2 (♂1, ♀1)
3.0 year	3:0~3:6	4 (♀4)
3.5 year	3:6~4:0	4 (♂3, ♀1)
4.5 year	4:6~5:0	2 (♂1, ♀1)

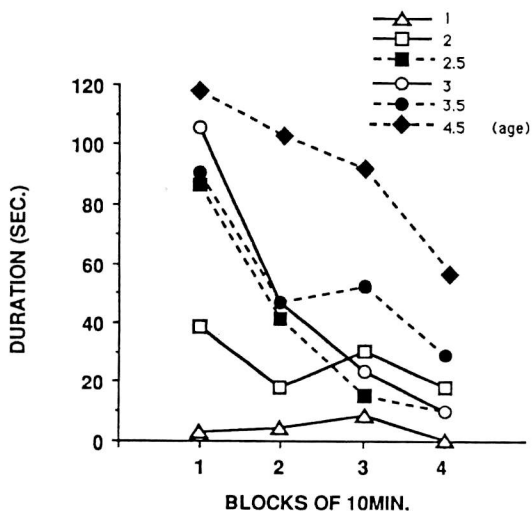


Figure 4 各年齢群における鏡に対する行動の総生起時間の時間的変化

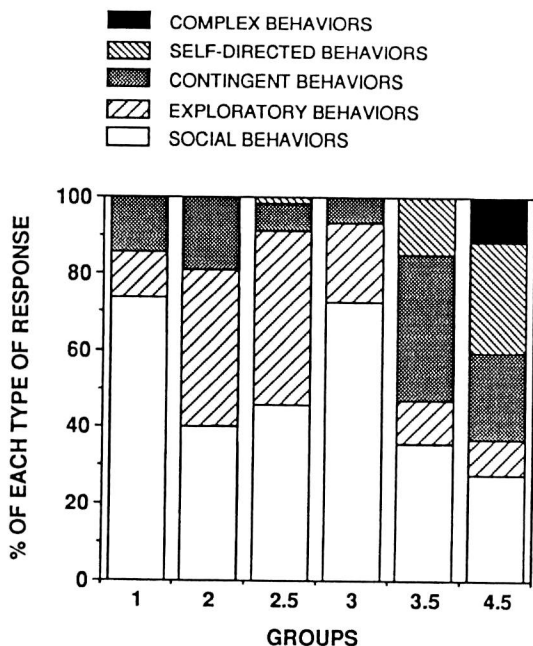


Figure 5 各年齢群における鏡に対する各行動カテゴリーの割合

テゴリーの割合を年齢群別に表したものである。3歳までの低年齢群では社会的反応、探索反応および協応反応しか生起しないが、3歳半以上の高年齢群では自己指向性反応と複合反応も生起している。また、社会的反応と探索反応の割合は加齢とともに減少しているが、自己指

向性反応および複合反応の割合は加齢とともに増加していることがわかる。

Figure 6は、試行内での各行動カテゴリーの生起時間の変化を年齢群別に表している。1歳群を除くすべての年齢群において、社会的反応と探索反応の生起時間が時間経過にしたがって減少している。とくに社会的反応は、高年齢群ほど急激に減少していることがわかる。協応反応にかんしては、3.5歳群と4.5歳群では試行を通して持続的に多くみられたが、2歳群、2.5歳群、3歳群では時間経過にもなつてあらわれた。また自己指向性反応は、ほとんど3.5歳群と4.5歳群でしか見られなかった。複合反応は、全年齢群とも1ブロック目では生起せず、その後も4.5歳群のみに徐々にあらわれ始めたただけであった。

考 察

本実験から、チンパンジーの鏡に対する行動の発達の变化がいくつか指摘できる。Figure 3からは、鏡にかんする行動の総生起時間は高年齢ほど長いことがわかった。1歳から2歳の低年齢のチンパンジーは鏡に対する積極的な関わりをほとんど示さなかった。これは鏡映像に対する強い恐怖が鏡それ自体を回避させたため、対鏡映像反応そのものが抑制されたからだと思われる。低年齢のチンパンジー達は、数個体が必ずびったりと身体を接触させなければ鏡面へ進み出ることではなく、ほとんどの場合くつつきながら走って鏡面を通り過ぎた。また、鏡をのぞき込む際も腰を退きながら恐る恐る見るような行動を示した。実験Ⅰの被験体は実験開始時は1歳5カ月齢だったが、本実験の1歳群に比べ鏡に対してより積極的な反応を示した。この原因としては、実験Ⅰの被験体が生後約6カ月から鏡に関する経験を持っていたことと、ケージの広さによる鏡の目立ち易さの違いが挙げられるだろう。実験Ⅰの被験体も鏡呈示の初期の頃は実験Ⅱの低年齢群と同様に、あまり鏡に対して積極的な関与を示さず、多くの場合は鏡を避けてタオルにしがみついていた。比較的狭いケージ内で何度も鏡を呈示されることによって、鏡に対する恐怖が急速に低減されたと思われる。

またFigure 5に示されたように、社会的反応、探索反応、協応反応は低年齢のころから、自己指向性反応は3.5歳、複合反応は4.5歳から多くみられた。これらの行動の出現順序は、実験Ⅰの縦断的研究やヒトを対象にした研究の結果と一致していた。本実験の被験体でも、社会的反応から探索反応、協応反応、自己指向性反応、複合反応の順に行動が出現した。また、社会的反応や探索反応が徐々に減少し、その他の反応が増加するもの同様だった。

本実験から、過去に鏡に関する経験を持っていないチンパンジー幼児が特別な訓練をうけることなく自己鏡映像を認知できるようになるのは、自己指向性反応が頻発

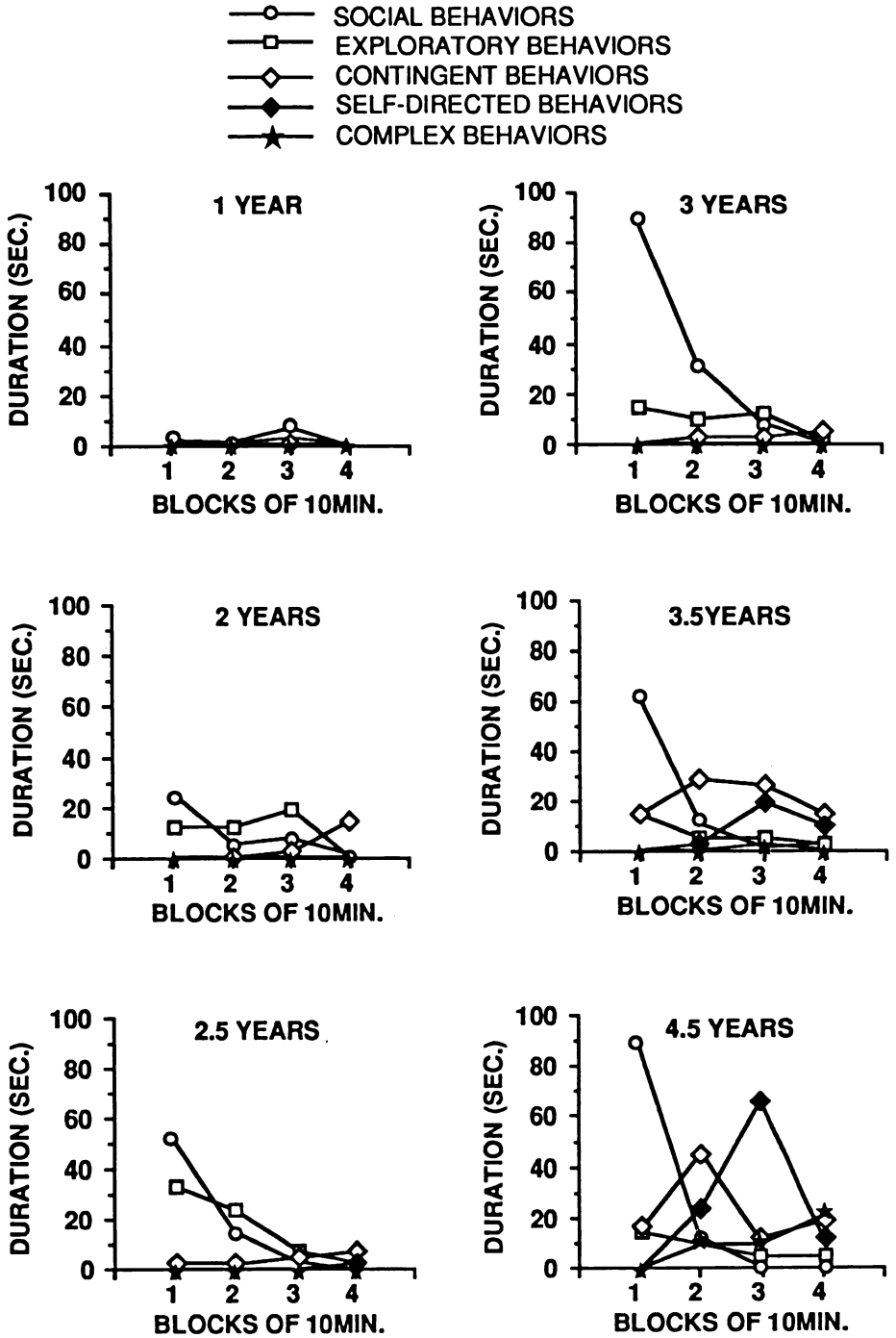


Figure 6 各年齢群における試行内での鏡に対する各行動カテゴリーの生起時間の変化

する3.5歳を過ぎてからだろうと考えられる。この結果は実験Ⅰの結果と比べると、以下の2点で違っている。第1に、自己指向性反応があらわれて自己鏡映像を認知していると思えるような時期が、実験Ⅰに比べてかなり遅い。実験Ⅰの被験体は、1.5歳を過ぎた頃には自己鏡映像を認知していると思える時期が得られた。したがって、本実験の被験体は約2年遅れていることになる。過去に鏡を見た経験がなく、しかも1試行40分の鏡呈示のみによって、鏡の性質を理解して利用することが可能になるには、かなりの年齢的成熟が必要なだろう。実験Ⅰと違っている第2点は、3.5歳をすぎると、協応反応、自己指向性反応、複合反応を急激にあらわし始めたことである。3.5歳になるまでは、これらの反応はほとんど出現しておらず、大半が社会的反応や探索反応だった。これに対して、実験Ⅰの被験体は、協応反応や自己指向性反応、および複合反応を急激に出現させることはなく、社会的反応や探索反応も繰り返しながら、それらの行動を徐々に出現させた。したがって、そこでは明確な段階的变化というよりも、緩やかな漸増的变化が見られた。これは、縦断的方法と横断的方法という研究手段の違いだろう。縦断的方法は、特定の個体または集団を追跡して発達的变化を取り出し、そこから発達の現象や道筋を研究する方法であり、横断的方法とは、ある時点で同時に多くの年齢群を調べることから、発達的变化を取り出そうとする方法である。したがって、縦断的研究法では繰り返し同じことが調べられるため、学習の面が色濃くあらわれ、逆に横断的研究法では成熟の面がより強くあらわれてくるのが予想される。幼児期から繰り返し鏡を呈示することによって、その性質の学習が急速に進行し、自己認知の発達はかなり促進されるといえる。

Figure 6 から、試行内における各行動カテゴリーの生起には時間的な変化のあることが示された。こうした試行内で出現した行動カテゴリーの順序は、年齢にともなう各行動カテゴリーの出現順序や、実験Ⅰの縦断的研究およびヒトを対象にした研究の結果と一致していた。つまり3.5歳以上の個体でも、いきなり自己指向性反応が出るのではなく、試行内において発達の変化を繰り返すといえる。2.5歳群で自己指向性反応を例外的に示した早熟な個体(2歳10カ月のメス)に関しても同様で、自己指向性反応は最終ブロックになってようやくあらわれている。つまりこの場合は、少し早熟な個体が40分間の鏡呈示を受けるうちに、自己鏡映像を認知できるに至ったと考えられる。実験Ⅰの被験体は、鏡の性質にかんする学習を76週齢から87週齢にかけておこなったが、過去に鏡に対する経験を持たない本実験の被験体でも3.5歳をすぎた個体は、40分間で鏡の性質を学習できる程度までに成熟した認知能力を備えているのである。

本実験では、過去に鏡の経験を持ったことのないチン

パンジー幼児に鏡を呈示して、どのような反応が、いつごろあらわれるのかを調べた。その結果、縦断的に観察した個体やヒト乳幼児が示したのと同様の行動が同じ発達順序で出現した。しかしながら、自己指向性反応があらわれ始めた時期は、繰り返し鏡が呈示された実験Ⅰの被験体よりも、約2年ほど遅れていた。

実験Ⅰと実験Ⅱの結果をあわせて考えると、鏡映像を認知する能力は、加齢に伴う成熟と鏡に関する経験量によって決まることが示唆された。すなわち過去に鏡に関する特別な経験を持たないチンパンジーの場合、約40分間の鏡呈示試行で自己鏡映像認知が可能になるのは3.5歳を過ぎてからである。ただし1.5歳のチンパンジーでも、鏡に関する経験を集中的に積むと、自己鏡映像認知が可能になることが本研究によって示された。

文 献

- Amsterdam, B. (1972). Mirror self-image reactions before age two. *Developmental Psychobiology*, 5, 297-305.
- Anderson, J. R. (1986). Mirror-mediated finding of hidden food by monkeys (*Macaca tonkeana* and *Macaca fascicularis*). *Journal of Comparative Psychology*, 100, 237-242.
- Dickie, J. R., & Strader, W. H. (1974). Development of mirror image responses in infancy. *Journal of Psychology*, 88, 333-337.
- Gallup, G. G., Jr. (1970). Chimpanzees: Self-recognition. *Science*, 167, 86-87.
- Gallup, G. G., Jr. (1977). Absence of self-recognition in a monkey (*Macaca fascicularis*) following prolonged exposure to a mirror. *Developmental Psychology*, 10, 281-284.
- Gallup, G. G., Jr., Wallnau, L. B., & Suarez, S. D. (1980). Failure to find self-recognition in mother-infant and infant-infant rhesus monkey pairs. *Folia Primatologica*, 33, 210-219.
- 井上徳子・日土耕司・松沢哲郎. (1992). チンパンジー乳児における愛着の研究—Strange Situationにおける行動と心拍変化—. *発達心理学研究*, 3, 17-24.
- Itakura, S. (1987). Use of a mirror to direct their responses in Japanese monkeys (*Macaca fuscata fuscata*). *Primates*, 28, 343-352.
- Johnson, D. B. (1983). Self-recognition in infants. *Infant Behavior and Development*, 6, 211-222.
- 熊崎清則. (1983). チンパンジー「ポポ」の成長記録. *モンキー*, 191/192, 35-39.
- Ledbetter, H. D., & Basen, A. J. (1982). Failure to demonstrate self-recognition in gorillas. *American Journal of Primatology*, 2, 307-310.

- Lewis, M., & Brooks-Gunn, J. (1979). *Social cognition and the acquisition of self*. New York: Plenum Press.
- 松沢哲郎. (1985). 鏡のなかの「わたし」. *発達* 22, 6, 76-85.
- Menzel, E., Savage-Rumbaugh, S., & Lawson, J. (1985). Chimpanzee (*Pan troglodytes*) spatial problem solving with the use of mirrors and televised equivalents of mirrors. *Journal of Comparative Psychology*, 99, 211-217.
- 室伏靖子. (1978). 霊長類の認知行動に関する比較研究—鏡による自己の認知と感覚統合—. *脳研究会会誌*, 4, 1-8.
- Piaget, J. (1967). *知能の発達* (波多野完治・滝沢武久, 訳). 東京: みすず書房.
- Robert, S. (1986). Ontogeny of mirror behavior in two species of great apes. *American Journal of Primatology*, 10, 109-117.
- Schulman, A. H., & Kaplowitz, C. (1977). Mirror-image response during the first two years of life. *Developmental Psychobiology*, 10, 133-142.
- Suarez, S. D., & Gallup, G. G., Jr. (1981). Self-recognition in chimpanzees and orangutans, but not gorillas. *Journal of Human Evolution*, 10, 175-188.
- Wallon, H. (1965). *児童における性格の起源* (久保田正人, 訳). 東京: 明治図書.

付 記

本研究実施にあたり、日本モンキーセンターおよび三和化学熊本研究所霊長類センターの皆様にご協力いただきました。また、関西学院大学文学部今田寛先生、京都大学霊長類研究所松沢哲郎先生、日本学術振興会特別研究員日上耕司氏に貴重なご助言をいただきました。以上の皆様に心より感謝申し上げます。なお、実験Ⅰは日本動物心理学会第52回大会、実験Ⅱは日本発達心理学会第4回大会にて、それぞれ発表しました。

Inoue, Noriko (Kwansei Gakuin University). *Mirror Self-Recognition among Infant Chimpanzees: Application of Longitudinal and Cross-Sectional Methods*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 51-60.

Two experiments were conducted to investigate the development of self-recognition in infant chimpanzees (*Pan troglodytes*). In Experiment I, an artificially raised female infant chimpanzee was exposed to a mirror for ten minutes daily, between 76 and 87 weeks of age. She exhibited fifty different behaviors toward the mirror. These were classified into five behavioral categories: social, exploratory, contingent, self-directed, and complex behaviors. The subject's behavior showed the transition from social, exploratory, and contingent behaviors, to self-directed and complex behaviors. She exhibited self-directed behaviors, which is evidence of self-recognition, after 82 weeks (1.5 years) of age. Seventeen infant chimpanzees, ranging in age from 16 to 59 months, were observed in Experiment II. None of them had previously been exposed to a mirror. They were grouped by age and given one 40 minute session of mirror exposure. Mirror-related behaviors were video-recorded and classified as in Experiment I. Behaviors toward the mirror in the 40 minute session changed significantly, especially after 42 months of age. Social behaviors decreased in frequency in the first 10 minute of the session, and were followed by self-directed and complex behaviors. Social behaviors were the most notable in younger subjects, while self-directed and complex behaviors were more prevalent among older subjects. The rapid behavioral change to the mirror within a session in the older subjects was corresponding to the developmental change by aging. The developmental process of mirror self-recognition was similar between longitudinal Experiment I and cross-sectional Experiment II, and was similar to that observed among human infants. However, self-recognition occurred at 42 months (3.5 years) of age in Experiment II, about two years later than was the case for the chimpanzee who received intensive mirror exposure in Experiment I. These results suggest that self-recognition is related to age in the maturation of cognitive abilities, and also to the quantity of learning experiences.

[Key Words] Chimpanzee, Self-recognition, Mirror-image, Longitudinal method, Cross-sectional method

子どもの死の概念

仲村 照子

(調布市教育相談所)

この研究の目的は子どもの死の概念の発達を調べるものである。3歳から13歳までの男女205名の子どもたちに個別に面接し、死に関する9の質問に答えてもらった。結果は、幼児期の子どもは大人がもつような死の意味とは違ったものとして理解している。生と死は未分化であり、現実と非現実の死の区別がなされておらず、その子ども独自の自由な死の概念を形成していると思われる。そして自分は死なないと思っている。児童期あたりから死の現実的意味である普遍性、体の機能の停止、非可逆性を理解するようになる。彼らは誰でもいつかは死ぬし、死によって体の機能は停止するし、再び生き返ることは出来ないことを理解する。これらの自覚から死は自分にも起こり得ると考えるようになり、それはやがて死後の世界への想像、願望、希望が膨らみはじめると思われる。特に年齢が高くなるにつれて人間は死んだらまた生まれかわるといふ「生まれかわり思想」の増加が目立った。全年齢を通して変化のないものは死はいやな感じであるという感情であった。

【キー・ワード】死の概念, 概念発達, 認知発達, 生まれかわり思想

問 題

本論文においては子どもが死をどのように理解し、どのような死の概念をもっているかを問題とする。これは広く研究されている生の理解の対極として心理学的に興味の深い問題であるのみならず、子どもの行動、死別体験、ターミナルな病気、ひいては自殺や幼児殺人のような社会的問題を考える際の基礎的な資料として要求されると考えられる。

一般的に子どもは大人程に死を自分の問題として感じていないと思われがちだ。だが子どもは成長とともに様々な死を経験していく。家族の死、ペットの死、さらにはテレビのニュース、漫画、本、ゲーム等様々な現実、非現実の死を体験しながら子どもなりの死の概念を獲得していくと思われる。

では子どもはどのように死の概念を発達させていくのであろうか。

子どもの死の概念についてもっとも代表的な研究であり、現在でもよく引用される研究にハンガリーのNagy (1948)の研究がある。

これはブタペストとその周辺に住む3~13歳の子ども378人に、文章、絵、面接で死の概念を表現させたものである。Nagy (1948)によるとまず第一段階、5歳以下の子どもは死をとり返しのつかないものとは受けとめておらず、死の中に生を見ている。次に、第二段階、5~9歳の子どもは死を擬人化することが多く、死を偶然的な事件と考える。第三段階で9歳以上になると、子どもは死を大人と同じように自然法則により生起するものと考

える傾向があるとしている。

Nagy (1948)の研究とピアジェの生命の概念とを比較したSafier (1964)は、子どもの生と死の概念は同じ段階を追って発達していくと示した。

Koocher (1974)も子どもの死の概念はピアジェの認知発達段階に比例して発達するとしている。

両親の教育レベルや経済状態、宗教等の影響を考慮した研究(Swain, 1979; Jenkins, & Cavanaugh, 1985)や人間と動物の死の理解の比較研究(Hoffman, & Strauss, 1985)もあるが、いずれも子どもの死の概念の発達の規定因としては年齢のみが有意であるとしている。

死別体験の影響については、6歳以下の死別体験は子どもの死の概念発達を促すとするもの(Kane, 1979)や死別体験は死の概念発達に特別の影響を与えないとするもの(Jenkins, & Cavanaugh, 1985)、また死別体験は子どもの死の概念を歪める影響を与える(Cotton, & Range, 1990)という結果が示されている。

上記の研究も含め子どもの死の概念の研究においては、研究方法に違いはあるものの、死の諸属性について子どもがどのように理解しているかを調べることにより死の概念を明らかにしようとしている。死の属性には普遍性、不可避性、非可逆性、体の機能の停止、最終性等が考えられるが、特に、普遍性・体の機能の停止・非可逆性についての3つに焦点を当てているものもも多い。

この3つの理解は子どもの認知発達と関連があるとするもの(Safier, 1964; Koocher, 1974; Cotton, & Range, 1990)、年齢と関連があるとするもの(Nagy, 1948; Childers, & Wimmer, 1971; Melear, 1973; Kane, 1979;

Swain, 1979; Hoffman, & Strauss, 1985; Jenkins, & Cavanaugh, 1985), 普遍性のみは年齢と関連があるものの非可逆性と体の機能の停止は年齢と関連がないとするもの (White, Elsom, & Prawat, 1978; Atwood, 1984) 等の様々な研究がある。

Speece, & Brent (1984) は1934年から50年間に発表された子どもの死の概念の研究35篇について普遍性, 体の機能の停止, 非可逆性の理解年齢を調べ, 大体5~7歳で理解するようであると結論づけている。

一方, 日本においては1983年, 東京都立教育研究所が「子供の『生と死』に関する意識の研究」を行なっている。これによると, 生命についての認識は幼稚園から小学校1年にかけて生物と無生物の区別の正しい見方が急増し, 同時に自分の生命を有限であるとする考え方を持つことが出来る子どもが急激に増加するという。しかしこれは1970年代後半より小中学生に自殺者が急増しその原因を探るために行なったものであり, 子どもの死の概念を取り扱ったものではない。医学, 心理, 教育の分野において子どもの死の概念について述べる時, 日本においても40年以上前のNagy (1948) の研究が引用されているのが現状である。

しかし, Nagy (1948) の研究が今の時代の子どもの死の概念を考える上で妥当であるかどうかはいくつかの疑問点が持たれる。第1には, Nagy (1948) の研究が時代的に古いこと, 及びハンガリーという地域の文化差の問題である。例えば Koocher (1974), Kane (1979) や Atwood (1984) も指摘しているようにNagy (1948) の示している死の擬人化などは他の研究には示されていない。第2には, Nagy (1948) の研究も含めて従来の研究のほとんどはキリスト教文化圏で行なわれており, その所見が非キリスト教文化圏である日本においてそのままあてはまるのか問題である。

このような観点に立ち, 本研究においては質問項目については, 先行研究で最も焦点のあてられている普遍性, 体の機能の停止, 非可逆性に加え, やはり先行研究であげられている死の原因, 死後観をとりあげる。そして日常生活の中でどの程度死について考え, 死に触れているか, また死に触れる体験が死の概念の発達に影響を与えるのか等を探るために死のイメージ, 死について考えたことがあるか, 死別体験及び死との接触体験の質問項目を加え構成した。対象年齢はNagy (1948) と同じ年齢範囲 (3~13歳) とした。これはいずれの研究結果とも比較検討が可能な範囲でもある。

結果に関しては, Nagy (1948) 等の先行研究において, 変化のみられた4つの年齢群 (3~5歳, 6~8歳, 9~11歳, 12~13歳) についての発達の变化をみていく。また, 死についての諸特性 (普遍性, 体の機能の停止, 非可逆性) の理解の相互関連, これら死の諸特性の理解と

死別体験などの他の要因との関連について検討する。

さらに, 本研究で得られた日本の子どもたちの死の概念の形成についての結果が, キリスト教文化圏における先行研究の結果と比較してどのような特徴をもつのかについても明らかにしたい。

方 法

(1) 調査対象

被験者は保育園及び公立の小学校, 中学校に通う東京都在住の3歳から13歳の子ども男女205名。保育園児は園の許可を得て園児を対象とし, 小学生と中学生は主として地域的自由活動グループ参加者を対象とした。従って家庭背景, 社会階層, 家庭での宗教等の偏りはあまりないと考えられる。年齢及び性別の被験者数はTable 1の通りである。

Table 1 年齢及び性別の被験者数

年齢	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	合計
男	4	8	12	13	10	12	14	12	9	9	8	111
女	4	9	8	8	9	8	7	8	10	11	12	94
合計	8	17	20	21	19	20	21	20	19	20	20	205

なお結果の整理に当たってはNagy (1948) 等の先行研究を参考に発達の变化を大まかに把握するために, 第1年齢段階 (3~5歳 45名) 第2年齢段階 (6~8歳 60名) 第3年齢段階 (9~11歳 60名) 第4年齢段階 (12~13歳 40名) の4段階に分けて行なうこととした。

(2) 調査方法

調査は個別面接により行なった。面接者は著者自身で40歳代の女性。子どもたちと面識はない。まず, 質問を行なう前に「これから質問することは, 正しい答えではなくて, 皆それぞれ考え方が違っていいのですから, 頭に浮かんできたことを気楽に答えて下さい。」と頼んだ。質問中, 子どもが考えこんでしまったり, 回答に迷っているような時には「思った通り気楽に答えてくれればいいですよ。」と付け加えるのみにとどめて, こちらからの暗示になるような言葉かけは行なわず, その子どものもつ独自の考えを表現してもらうように注意した。

場所は保育園児は園内にて, 小・中学生は放課後の校庭あるいは公園の静かな場所で個別に面接した。面接時間は5分~10分で平均7分であった。会話はテープに録音し, 面接後に全会話を書き取った後, 質問項目毎にまとめた。

(3) 調査内容

質問項目は次の通りで下記の順番に従って質問した。【質問1】「死」とか「死ぬ」という言葉から思い浮かべる言葉を書いて下さい 【質問2】どのような原因で人は死にますか? 【質問3】誰でも人は死にますか? 【質

問4】死んだ人は見たり聞いたり感じたりすることが出来ますか？ 【質問5】死んだ人は生き返れますか？

【質問6】死んだら人はどうなると思いますか？ 【質問7】「死ぬとはどういうことか」と考えたことがありますか？ 【質問8】家族や親戚など亡くなった経験がありますか？ 【質問9】死んだ人を見たことがありますか？

これらの質問項目は Koocher (1974), Swain (1979), Kane (1979) の研究を参考にして選択した。質問1は死に対する全体的イメージをとらえる事を目的としている。質問2は死の原因から具体的に死をどのようにとらえているか、質問3～5は死の特性である普遍性(質問3)、体の機能の停止(質問4)、非可逆性(質問5)について理解しているか否かについて、質問6は死後観について、質問7～9は日常生活の中でどの程度死について考え、また死に触れているかについて調べる。

結 果

(1) 各質問項目についての反応のカテゴリ別集計

各質問項目についての反応をカテゴリー化し、各年齢段階別に人数と割合を示したのが Table 2 である。

質問1では「いやな感じ」が各年齢段階でそれぞれ33%, 68%, 57%, 45%と最も多く見られた。第1年齢段階では「死の原因」と「死後の世界」の回答はなく、「よい感じ」が9%、「わからない」が20%を示した。反対に第4年齢段階では「よい感じ」と「わからない」の回答はなく、「死の原因」が18%、「死後の世界」が15%を示した。質問2では第1年齢段階では「空想や推論を含む外的原因」が最も多く56%を示したが、この回答は第1年齢段階のみに示され他の年齢段階には示されなかった。第2年齢段階では「現実的外的原因」が最も多く72%を示した。第3、第4年齢段階では「内的原因」が最も多く、それぞれ68%、90%を示した。

質問3では「誰でも死ぬ」が第1年齢段階で36%であったが、以降各年齢段階それぞれ、95%、100%、98%であった。このように第1年齢段階と第2年齢段階との間に大きな変化が認められた (Figure 1に「普遍性」として示した)。

質問4では年齢進行に従い次のような経過をたどった。第1年齢段階で「死んだ人は見たり聞いたり感じたり出来る」が36%に対し、第2年齢段階では18%に減少する。しかし、第3、第4年齢段階で再び「死んだ人は見たり聞いたり感じたり出来る」がそれぞれ22%、25%と増加する。「出来る」と回答した子どもたちに「どうして出来るの？」と再質問すると、「霊や魂になって、天国や空の上から、あるいはお盆で見たり聞いたり感じたり出来る」等の意味で回答した。これらの回答はつまり「死んだ人が霊などの別の形になって出来るのであって、死んだ人自身は見たり聞いたり感じたり出来ない」という意味な

ので、このような霊的精神的回答は「人間体で出来ない」として集計すると質問4-IIのようになる。質問4-IIでは第1年齢段階で「死んだ人間体で見たり聞いたり感じたり出来ない」が64%に対し、第2年齢段階以降はそれぞれ88%、97%、98%となった (Figure 1に「体の機能の停止」として示した)。

質問5では質問4と同様な傾向を示した。つまり第1年齢段階で「死んだ人は生き返れる」が29%に対し、第2年齢段階では10%に減少する。しかし第3年齢段階で再び「生き返れる」が13%と増加し、第4年齢段階で40%に急増する。「生き返れる」と回答した子どもに「どうして生き返れるの？」と再質問すると「突然死んだ人が何かの拍子で息を吹き返す」という意味か「生まれかわる」の意味で回答した。「生まれかわる」ということは、死んだ人がそのまま生き返るということではないので、このような霊的精神的回答は「人間体で生き返れない」として集計すると質問5-IIのようになる。質問5-IIでは第1年齢段階で「死んだ人間体で生き返れない」が76%に対し、第2年齢段階以降はそれぞれ100%、97%、85%となった (Figure 1に「非可逆性」として示した)。第3年齢段階以降「死んだ人間体で生き返れる」と回答した8名のうち7名は「一度死んだものの何かの拍子で息を吹き返す」という意味であり、1名は「ニューヨークに死んだ人が生き返れるカプセルがある」という回答であった。これらの回答は第1年齢段階の生と死が未分化の「死んだ人は生き返れる」の回答と意味合いは違うものと思われる。

質問6では第1年齢段階で「現実派」が78%に対し、「想像派」が22%であるが、第2年齢段階以降は「想像派」がそれぞれ58%、67%、75%と漸増傾向を示す。質問7では「考えたことがある」が第1年齢段階は11%に対し、第2年齢段階で37%、第3年齢段階で47%と増加し、第4年齢段階では70%を示す。質問8では「死別体験あり」が各年齢段階でそれぞれ11%、37%、57%、73%と年齢と共に確実に死別体験は増加していく事を示している。質問9では死別体験同様に年齢と共に確実に「死んだ人

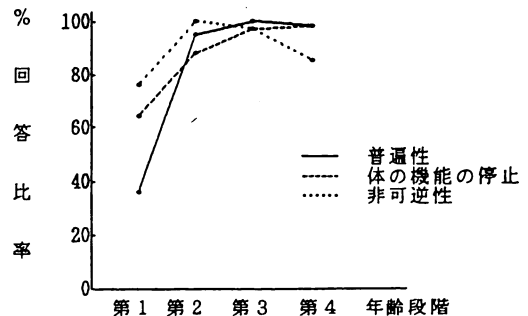


Figure 1 死の諸特性の理解の発達経過

Table 2 各質問項目についての反応のカテゴリー別集計

質問項目	カテゴリー	第1年齢段階 3-5歳	第2年齢段階 6-8歳	第3年齢段階 9-11歳	第4年齢段階 12-13歳
【質問1】(死のイメージ) 「死」とか「死ぬ」という言葉から思い浮かべる言葉を言って下さい	いやな感じ(恐い 不気味 気の毒 等)	15 (33%)	41 (68%)	34 (57%)	18 (45%)
	よい感じ(遊び ファミコン 夢 等)	4 (9%)	1 (2%)	2 (3%)	0 (0%)
	わからない 何も思わない	9 (20%)	6 (10%)	1 (2%)	0 (0%)
	死の原因(交通事故 病気 寿命 等)	0 (0%)	4 (7%)	9 (15%)	7 (18%)
	生と死(人物 命 動物 等)	17 (38%)	5 (8%)	12 (20%)	9 (22%)
	死後の世界(天国 地獄 霊界 等)	0 (0%)	3 (5%)	2 (3%)	6 (15%)
【質問2】(死の原因) どのような原因で人は死にますか	空想や推論を含む外的原因 (剣や鉄砲でやられ 等)	25 (56%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	現実的外的原因(交通事故 病気 等)	15 (33%)	43 (72%)	19 (32%)	4 (10%)
	内的原因(寿命 老衰 自殺 等)	5 (11%)	17 (28%)	41 (68%)	36 (90%)
【質問3】(普遍性) 誰でも人は死にますか	死なない人もいる	29 (64%)	3 (5%)	0 (0%)	1 (2%)
	誰でも死ぬ	16 (36%)	57 (95%)	60(100%)	39 (98%)
【質問4】(体の機能の停止) 死んだ人は見たり聞いたり感じたり出来ますか	見たり聞いたり感じたり出来る	16 (36%)	11 (18%)	13 (22%)	10 (25%)
	見たり聞いたり感じたり出来ない	29 (64%)	49 (82%)	47 (78%)	30 (75%)
【質問4-II】 人間体で見たり聞いたり感じたり出来ますか	人間体で見たり感じたり出来る	16 (36%)	7 (12%)	2 (3%)	1 (2%)
	人間体で見たり感じたり出来ない	29 (64%)	53 (88%)	58 (97%)	39 (98%)
【質問5】(非可逆性) 死んだ人は生き返れますか	生き返れる	13 (29%)	6 (10%)	8 (13%)	16 (40%)
	生き返れない	32 (71%)	54 (90%)	52 (87%)	24 (60%)
【質問5-II】 人間体で生き返れますか	人間体で生き返れる	11 (24%)	0 (0%)	2 (3%)	6 (15%)
	人間体で生き返れない	34 (76%)	60(100%)	58 (97%)	34 (85%)
【質問6】(死後観) 死んだら人はどうなると思いますか	現実派(焼く 骨になる 腐る 等)	35 (78%)	25 (42%)	20 (33%)	10 (25%)
	想像派(霊 魂 天国 生まれかわる 等)	10 (22%)	35 (58%)	40 (67%)	30 (75%)
【質問7】「死ぬとはどういうことか」と考えたことがありますか	考えたことがない	40 (89%)	38 (63%)	32 (53%)	12 (30%)
	考えたことがある	5 (11%)	22 (37%)	28 (47%)	28 (70%)
【質問8】(死別体験) 家族や親戚など亡くなった経験がありますか	死別体験なし	40 (89%)	38 (63%)	26 (43%)	9 (22%)
	死別体験あり	5 (11%)	22 (37%)	34 (57%)	31 (73%)
【質問9】 死んだ人を見たことがありますか	見たことがない	39 (87%)	45 (75%)	26 (43%)	14 (35%)
	見たことがある	6 (13%)	15 (25%)	34 (57%)	26 (65%)
生まれかわり思想	ない	45(100%)	54 (90%)	49 (82%)	26 (65%)
	ある	0 (0%)	6 (10%)	11 (18%)	14 (35%)

を見たことがある」は増加していくものの、特に第2年
 齢段階が25%に対し第3年年齢段階は57%と急増する。

質問5と6において「人間は死んだのち生まれかわる」
 という内容の回答が目立ったためこれを「生まれかわり
 思想」として集計した。第1年年齢段階には「生まれかわ
 り思想」の回答は示されず、第2年年齢段階以降それぞれ
 10%、18%、35%と漸増傾向を示す。

(2) 各年齢段階間の変化

各年齢段階間の度数分布の差についてカイ2乗検定も
 しくは直接確率法を行ない、有意な差が見られたところ
 を示したのがTable3である。

質問1については度数の少ないセルがあるのでカイ2
 乗検定は行なわなかった。第1年年齢段階と第2年年齢階
 段間では次の質問項目に差がみられた。質問2 ($\chi^2(2, N=105) = 43.81, P(<.01)$), 質問3 ($\chi^2(1, N=105) = 42.89, P(<.01)$), 質問4 ($\chi^2(1, N=105) = 3.99, P(<.05)$), 質問4-II ($\chi^2(1, N=105) = 8.58, P(<.01)$), 質問5 ($\chi^2(1, N=105) = 6.19, P(<.05)$), 質問5-II ($\chi^2(1, N=105) = 13.88, P(<.01)$), 質

Table 3 各年齢段階間の差の検定で有意な関係があったもの

質問項目	第1と第2年年齢段階間	第2と第3年年齢段階間	第3と第4年年齢段階間
【質問2】死の原因	**	**	*
【質問3】普遍性	**		
【質問4】体の機能の停止	*		
【質問4-II】体の機能の停止	**		
【質問5】非可逆性	*		**
【質問5-II】非可逆性	**y		
【質問6】死後観	**		
【質問7】死ぬとはと考えたか	**		*
【質問8】死別体験	**	*	*
【質問9】死んだ人を見たか		**	
生まれかわり思想	*		

*: P<.05 **: P<.01

問6 ($\chi^2(1, N=105) = 13.69, P(<.01)$), 質問7 ($\chi^2(1, N=105) = 8.79, P(<.01)$), 質問8 ($\chi^2(1, N=105) = 8.79, P(<.01)$), 生まれかわり思想 (直接確率法 (N=105), P<.05)。質問9以外の全ての質問において第1年年齢段階と第2年年齢段階間で有意な差がみられた。第2年年齢段階と第3年年齢段階間で有意な差がみられたのは、質問2 ($\chi^2(1, N=120) = 19.22, P(<.01)$), 質問8 ($\chi^2(1, N=120) = 4.82, P(<.05)$), 質問9 ($\chi^2(1, N=120) = 12.45, P(<.01)$) であった。第3年年齢段階と第4年年齢段階間で有意な差がみられたのは、質問2 ($\chi^2(1, N=100) = 6.36, P(<.05)$), 質問5 ($\chi^2(1, N=100) = 9.36, P(<.01)$), 質問7 ($\chi^2(1, N=120) = 5.30, P(<.05)$), 質問8 ($\chi^2(1, N=100) = 4.58, P(<.05)$) であった。

(3) 各質問項目間の関連

質問項目間の関連をみるために、複数の回答カテゴリーがみられた質問1を除く質問項目間の対のすべてについて、年齢段階別にカイ2乗検定もしくは直接確率法を行なった。なお、質問4、5については質問4-II、5-IIの回答を用いた。Table4に有意な関係が認められたものを示した。残りは、5%水準では有意でなかったもの及び分布の偏りが大きくて検定不能であったものである。有意な関係が認められたのは次のものである。質問4-IIと質問5-IIの項目間では第1年年齢段階 (直接確率法 (N=45), P<.01)。質問8と質問6の項目間では第2年年齢段階 ($\chi^2(1, N=60) = 5.12, P(<.05)$)。質問8と質問9の項目間では第1年年齢段階 (直接確率法 (N=45), P<.01), 第2年年齢段階 ($\chi^2(1, N=60) = 27.65, P(<.01)$), 第3年年齢段階 ($\chi^2(1, N=60) = 38.05, P(<.01)$), 第4年年齢段階 (直接確率法 (N=40), P<.01) の各年齢段階。質問7と質問2の項目間では第2年年齢段階 ($\chi^2(1, N=60) = 8.03, P(<.01)$) と第4年年齢段階 (直接確率法 (N=40), P<.01)。

考 察

(1) 死の概念の発達的变化

初めに、先行研究で最も焦点の当てられている死の普遍性、体の機能の停止、非可逆性の3つの死の特性につ

Table 4 各年齢段階別の質問項目間の検定で有意な関係があったもの

質問項目	【質問3】	【質問4-II】	【質問5-II】	【質問6】	【質問7】	【質問8】	【質問9】
【質問2】死の原因	—	—	—	—	② ④	—	—
【質問3】普遍性	—	—	—	—	—	—	—
【質問4-II】体の機能の停止			①	—	—	—	—
【質問5-II】非可逆性				—	—	—	—
【質問6】死後観					—	②*	—
【質問7】死ぬとはと考えたか						—	—
【質問8】死別体験							①②③④
【質問9】死んだ人を見たか							

注. ①は第1年年齢段階, ②は第2年年齢段階, ③は第3年年齢段階, ④は第4年年齢段階を示す。
 *: P<.05 他は P<.01

いての理解が、各年齢段階でどのように変化するかをみていく。これを踏まえて、死の原因、死後観などの死に関連する部分の理解の発達について検討し、さらに、日常生活での死の体験、死のイメージの発達の変化をみていく。

まず死というものが人間は誰でもいつかは死ぬという意味で「普遍的」であり(質問3)、死んだ人は見たり聞いたり感じたり出来ないという意味で「体の機能の停止」であり(質問4)、死んだ人は生き返れないという意味で「非可逆的」である(質問5)としてこれらについての理解の発達を考えてみる。

まず第1年齢段階(3~5歳)では普遍性については次のような回答が示された。「しんちゃん(自分)とこうちゃん(友達)は死なないよ(3歳男)」、「死なない人はいるよ、ママは死なない(4歳女)」等、自分や自分のまわりの人間などは死なないと思っている回答が半数以上を示している。体の機能の停止については「死んだ人でも見たりできるよ(3歳女)」等と回答した子どもが36%と3割以上を示している。非可逆性については「血が出るけれど生き返れるよ(3歳男)」や「生き返れるよ。病院に行つてなおしてもらおう(5歳女)」等が示すように、死んでも生き返れると回答している子どもたちが29%とほぼ3割を示している。これらを考えると第1年齢段階(3~5歳)の子どもたちはまだ生と死が未分化であり、死の意味そのものがまだわかっていない段階といえよう。

第2年齢段階(9~11歳)になると、普遍性については「ほくもみんなもいつかは死ぬ(6歳男)」や「みんな90歳位になったら死ぬ(7歳女)」等が示すように、「誰でも死ぬ」という回答が95%を示し、ほぼ人間はいつかは死ぬ存在であると理解している。体の機能の停止については「見たり聞いたり感じたり出来ない」という回答が88%を示す。非可逆性については「生き返れない」という回答が90%を示すが、「生き返れる」と回答した子どもも「違う人のお腹に入る(6歳女)」や「神様が人間を作っているのだから、死んだら生まれかわって生き返れる(8歳男)」等の生まれかわるという内容の回答を示した。このように第2年齢段階(6~8歳)ではほぼ死の現実的意味を理解していると思われる。

第3年齢段階(9~11歳)になると、普遍性については全ての子どもが「誰でも死ぬ」と回答している。一方体の機能の停止については「見たり聞いたり感じたり出来ない」がわずかに減り、「見たり聞いたり感じたり出来る」が増加している。例えば「死んでも霊が残るから人間が見ていない様でお盆の日とかに見えない体で来て、お盆でない日は空の上から見ている(9歳男)」や「霊になって出来る(10歳女)」等の回答が増す。非可逆性に関しても同様に「生き返れない」がわずかに減り、「生き返れる」が増える。例えば「人間だったらとかがげになつたりして

生まれかわる(9歳男)」や「人間から色々なものに生まれかわる(10歳男)」等、生まれかわるという意味での「生き返れる」の回答がさらに増す。

第4年齢段階(12~13歳)になるとこの傾向はさらに顕著になる。これは第2年齢段階(6~8歳)でいったんは死の現実的意味を理解した上で、年齢が高くなるにつれて霊的精神的回答を示すようになるからである。つまり体の機能の停止では「霊や魂で、あるいは天国や空の上で、あるいはお盆で見たり聞いたり感じたり出来る」という回答が増えたためである。非可逆性については「生まれかわる」という回答が増えたためである。これは低年齢の子どもたちの生と死が未分化の状態での「死んだ人が見たり聞いたり感じたり出来るし、生き返れる」という回答とは同じ答でもその意味のはっきりとした差を示している。従つて、このような霊的精神的回答は「死んだ人を見たり聞いたり感じたり出来ない」、「生き返れない」ということを前提として考えていると解釈することが出来る。するとFigure 1に示すように、体の機能の停止(質問4-II)と非可逆性(質問5-II)の理解も普遍性(質問3)と同じく第2年齢段階(6~8歳)あたりからほぼ成立しているものと思われる。

上述のように年齢が高くなると霊的精神的回答をする子どもたちが増える傾向は、質問6の死後観でも示された。回答にあたって現実の事象をのべるものを現実派、現実には体験できず想像として考えるものに言及するものを想像派として見ると、第1年齢段階(3~5歳)には現実派が多い。「誰も遊ばなくなつて誰もご飯を食べられなくなる(4歳女)」や「動かなくなる(5歳男)」などの回答が示している。しかし第2年齢段階(6~8歳)になると「閻魔大王の所に行つて天国か地獄に決めてもらつたりする(6歳男)」や「魂かなんかで空に昇つて行く(8歳女)」などの想像派が半数以上を占め、以降年齢と共に確実に想像派が増加している。特に質問5と6において「人間は死んだ後生まれかわる」という内容の回答が目立ったため、これを「生まれかわり思想」として集計したところ第1年齢段階(3~5歳)には現われず、第2年齢段階(6~8歳)以降漸増傾向を示した。これは日本の文化的影響と思われる。

このように子どもたちは現実の死を認識した後に、死後の世界についての想像、希望、願望を膨らませていくのは何故であろうか?

質問2の死の原因を考えてみる。まず空想や推論を含む外的原因においてはこの段階では現実と非現実の死の認識がなされておらずもちろん自分はその中には入っていない。「おばけが出てくると死ぬよ(3歳女)」や「やまんばが出たとき死ぬ(5歳男)」など、このような回答は第1年齢段階(3~5歳)のみに示された。次に現実的外的原因においては、現実の死は認識しているものの事

故や災害や癌等の病気のように外的原因によるものであり、たまたまその原因に当たってしまった人は死ぬという意識の段階である。「火事、地震、事故、病気、蜂に刺される（8歳女）」の回答例が示すように第2年齢段階（6～8歳）にこの原因がもっとも多く示された。さらに内的原因では、寿命や老衰といった生理的内的現象や自らの命を操作する自殺を含み、この段階では死は自分にもいつかは起こり得るものとしてとらえていると考えられる。「病気、交通事故、殺される、自殺、寿命（10歳女）」の回答例のようにこの原因は第3年齢段階（9～11歳）以降大部分を示していく。全ての年齢段階間で有意差が示され、これは死というものが他人からだんだん現実的なものになっていき、さらにはいつかは自分にも起こり得るものになっていくという理解の推移を示していると思われる。このように自分をも含めて人間はいつかは死ぬ存在であるという自覚が死後の世界への想像、希望、願望などにつながって行くと思われる。

同時に質問7においても「死ぬとはどういうことかと考えたことがある」の回答が年齢と共に高くなっていき、特に第3年齢段階（9～11歳）から第4年齢段階（12～13歳）では有意差を示し70%となり、12～13歳の子どもの死について考えていることをはっきりと示している。

さらに日常生活においても核家族化が進んでいるとはいえ質問8の死別体験も全ての年齢段階間に有意差を示しているように年齢と共に確実に増加している。必然的に質問9においても「死んだ人を見たことがある」という回答も増加していくが、ここでは特に第2年齢段階（6～8歳）から第3年齢段階（9～11歳）の間で有意差を示し、25%から57%と2倍以上増加している。

質問1の死のイメージでは全年齢を通して「いやな感じ」が多く示された。又、「生と死」も全年齢を通して多く「兎とか犬（3歳女）」や「象、虫、動物（9歳男）」、「命（11歳男）」の回答例が示すように生の対比としての死の見方は年齢にかかわらず示されている。けれども第1年齢段階（3～5歳）においては「死の原因」や「死後の世界」の回答が現われず「よい感じ」や「わからない」が現われたことを考えるとここにおいても死の概念の未熟さが示され、反対に第4年齢段階（12～13歳）では「よい感じ」や「わからない」の回答が現われず「死の原因」や「死後の世界」の回答が現われていることを考えると死が身近となり死後の世界へと想像が膨らんでいることをここにおいても示していると思われる。

（2）死の概念の相互関連とこれにかかわる他の要因

死の特性である普遍性（質問3）、体の機能の停止（質問4-II）、非可逆性（質問5-II）の3つの理解の相互関連をみても。Table 4に示されたように、第1年齢段階（3～5歳）においてのみ体の機能の停止と非可逆性に関連が認められている。第1年齢段階（3～5歳）で「死んだ人は

生き返れない」と回答した34名のうち（Table 2参照）「見たり聞いたり感じたり出来ない」と回答した子どもは26名（76.5%）である。一方、「死んだ人は生き返れる」と回答した11名のうち（Table 2参照）「見たり聞いたり感じたり出来る」と回答した子どもは8名（72.7%）であった。このように体の機能の停止と非可逆性を認める子どものいる一方で、体の機能の停止を認めない子どもはまた非可逆性を認めないという傾向が示された。これはこの年齢段階の子どもたちは生と死の理解がまだ未分化で曖昧な状態であることを示していると思われる。第2年齢段階（6～8歳）以降は関連が認められなかった。分布の偏りの為に検定が行えなかった事もあるが、積極的に関連があるという根拠は認められなかった。又、これらの諸特性の理解は死別体験（質問8）と関連があるとする根拠も認められなかった。

死の原因（質問2）では、現実的外的原因から内的原因を述べることで発達に伴って増加してきており、これと「死ぬとはどういうことかと考えたことがあるか」（質問7）とが関連していた（Table 4参照）。死の原因について第1年齢段階（3～5歳）で内的原因を回答した子どもは11%であったが、第2年齢段階（6～8歳）になると28%となっていた（Table 2参照）。この第2年齢段階（6～8歳）で、「死ぬとはどういうことかと考えたことがある」と回答した22名のうち11名（50.0%）は内的原因をあげており、同じ年齢段階でも「死ぬとはどういうことかと考えたことがない」と回答した38名中で内的原因をあげたのが6名（15.8%）であったのとは異なる様相を示している。第3年齢段階（9～11歳）になると内的原因を回答する子どもが68%とかなりを占めるようになり、第4年齢段階（12～13歳）では90%となる（Table 2参照）。そして、この第4年齢段階（12～13歳）で外的原因をあげていた4名はすべて「死ぬとはどういうことかと考えたことがない」と回答した子どもたちであった。これらのことから、死について考えることと、死の原因が現実的外的原因（交通事故や病気などの突発的出来事）だけではなく、内的原因（寿命や老衰等の生命体としての必然的な死）があることに気付くこととは深い関連を持っていると言えるであろう。

又、死後観（質問6）については、現実派から発達に伴って想像派へと移行していくことがみられたが、これに死別体験（質問8）がかかわっていることがみられた（Table 4参照）。死後観は第1年齢段階（3～5歳）では78%が現実派であり、第3年齢段階（9～11歳）になると逆に67%が想像派となっており、移行期にあると思われる第2年齢段階（6～8歳）は現実派、想像派がほぼ半々であった（Table 2参照）。しかし、この年齢段階の回答を詳細にみえていくと、死別体験なしと回答した子どもでは現実派は20名、想像派は18名とほぼ同数であったが、死別体

験ありと回答した22名では、想像派が17名(77.3%)と高い割合を占めていた。このことから、死別体験が子どもの死後観に大きな影響を与えることが考えられ、児童期の初期であっても死別体験をすることで、死が単に焼かれて骨になりお墓に入るといった現実的な意味だけでなく、死後の世界や霊魂についても考えるような死についての理解の深まりや広がり形成されていくことが予想できる。

以上のことを総合して考えると、子どもは幼くとも死とまったく無縁な存在ではなく、大人概念とは必ずしも同じではないものの、幼いなりに日常生活から知り得た何らかの死の概念を持っていると思われるが、第1年段階(3~5歳)の幼児期から第2年段階(6~8歳)の児童期にかけて大きな認識の差を示している。結果は年齢発達を大まかに把握するために4つの年齢段階に分けてみてきたが、大きな変化のみられた第1年段階(3~5歳)と第2年段階(6~8歳)の変化は、年齢毎の変化としてみていくと(付表参照)、5歳と6歳の間に大きく変わっており(質問2「死の原因」、質問3「普遍性」、質問6「死後観」)、3歳から5歳の幼児期と6歳以降の児童期の認識の違いとして考えられるであろう。つまり第1年段階(3~5歳)あたりまでは、絵本やお話の中で得た知識や現実生活の中で自分が見た知識が混ざりあってその子ども独自の自由な死の概念を形成している。従って、生と死は未分化であり現実と非現実の死の意識ははっきりしていない。そして第2年段階(6~8歳)あたりからは生と死、現実と非現実の死の曖昧さは消えて、死の現実的意味である普遍性、体の機能の停止、非可逆性を理解する。そして他人事であった死も、だんだん自分も含めて人間はいつかは死ぬ存在であると気付き始めると、死への深まりは増し、死後の世界への思索、興味につながって行くと思われる。

この解釈は、先行研究において最も焦点の当てられている死の普遍性、体の機能の停止、非可逆性の理解年齢について、諸外国の研究及び東京都立教育研究所の研究結果と照らし合わせても妥当と思われる。

しかし、諸外国の先行研究と比べて違っていると思われる点は「生まれかわり思想」であった。生まれかわり思想については質問項目にはないもののたかさんの子どもたちがこの回答を示したため集計したものである。本研究においてこの回答は第1年段階(3~5歳)には示されず第2年段階(6~8歳)以降少しずつ増え第3年段階(9~11歳)においてかなり目立った回答数を示しているように、年齢が高くなるにつれて生まれかわり思想が明確に増えることであった。この傾向は東京都立教育研究所の研究結果においても似通った結果が示されていることから日本における文化的影響と思われる。一方、諸外国の研究において生まれかわり思想(reincarnation)

にふれているのはKoocher(1974)とSwain(1979)のみであった。6~15歳を対象としたKoocher(1974)は死後観について4%の子どもが生まれかわり思想を述べたというのみに留めている。2~16歳を対象としたSwain(1979)は死の非可逆性についての質問に、14~16歳の子どものうち3名が生まれかわり思想を述べ、彼らは以前は死後に天国に行くと思っていたが本を読んで考えが変わったためであるとしている。そして年齢の高い子どもにおいては死後の魂の存在を宗教的見地から信じ続けるか否かのどちらかであると指摘している。またKoocher(1974)も子どもたちの回答に宗教的表現が少ないのは、現代において宗教的観点に重きを置いていないことと同時に子どもたちが宗教に失望感を抱いているのかもしれないことを指摘している。

これに対し本研究における生まれかわり思想も仏教思想の影響と思われるものの、ここにおいては信仰としての宗教意識ではなく、日常化、民族化した水準での宗教意識が漠然とした形で影響を及ぼしている結果であろうと思われる。その意識はまた同時に子どもたちにおいて「死んだらおばけや幽霊や魂になって、天国や地獄や極楽や大霊界に行き、神様や閻魔王にあたり・・・など」思いのままの様々な死後の世界への想像、希望、願望を膨らませる可能性をもたらししていると考えられる。子どもたちは「死ぬということは怖いというものもあるけれど希望でもあると思う。一度死んだら生まれかわるから。だから死ぬというのはゴールでもあり出発でもあると思う。苦しんで死んだら生まれかわって運命をかえないと、また同じ死に方をすると思う(12歳女)」や「ミステリーや占いや宜保愛子先生の本や妖精の本等を読んで「死ぬとこのような世界があるのか」と思った。死んだら霊界に行く生まれかわるか、生まれかわらないで霊界の仕事をするか判断を下されると思う(13歳女)」等話してくれた。このように死後の世界への自由な想像、希望、願望を可能とする社会意識は、同時に至んだ死の概念を形成したり、助長したりする可能性を含んでいると思われる。Koocher(1974)は死に対して空想や推論を抱いている子どもたちにはそれを持ち続けていることも大切なことであると述べている。まだ死んだ人は生き返ると思っような子どもに埋葬を教えることは、子どもたちに不安や自責心を植え付ける危険があると指摘した上で、年少児には可能な限り子ども自身の経験の中から話すことがよいであろうと述べている。一方、Cotton, & Range(1990)は子どもの死の概念発達には認知レベルと関連しているとした上で、認知的に成熟した子どもに対し、「おじいさんは遠い国に行ったのです」などという死の現実を隠すような説明は、子どもの死の理解の混乱を招く恐れがあると指摘している。

現代において、子どもたちは死を現実生活の中で体験

するのみでなく、書物やテレビなどのマスメディアによってしばしば強烈な死の印象を一方向的に与えられる機会が増えている。そのこと自体の善し悪しの問題は別として、子どもはそれによって誤った死の概念を形成したり、強化したりする危険性にさらされていると言えよう。このような状況の下で、子どもたちが死についての健全な認識を育てていくことは大切なことと思われ、子どもたちが死をどのように理解していくかを調べることはそのための基礎的資料として重要と考えた。

子どもが偏った死の理解を示した時にどのように訂正するのか、あるいは時期が来るまで子どもを信じ子どもなりの理解にまかせておくべきかなど、子どもが死を概念化する時の大人の適切な役割が何であるかは今後の研究課題と言えよう。

文 献

- Atwood, V. A. (1984). Children's concepts of death: A descriptive study. *Child Study Journal*, 14, 11-29.
- Childers, P., & Wimmer, M. (1971). The concept of death in early childhood. *Child Development*, 42, 1299-1301.
- Cotton, C. R., & Range, L. M. (1990). Children's death concepts: Relationship to cognitive functioning, age, experience with death, fear of death, and hopelessness. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19, 123-127.
- Hoffman, S. I., & Strauss, S. (1985). The development of children's concepts of death. *Death Studies*, 9, 469-482.
- Jenkins, R. A., & Cavanaugh, J. C. (1985). Examining the relationship between the development of the concept of death and overall cognitive development. *Omega*, 16 (3), 193-199.
- Kane, B. (1979). Children's concepts of death. *Journal of Genetic Psychology*, 134, 141-153.
- Koocher, G. P. (1974). Talking with children about death. *American Journal of Orthopsychiatry*, 44, 404-411.
- Melear, J. D. (1973). Children's conceptions of death. *Journal of Genetic Psychology*, 123, 359-360.
- Nagy, M. (1948). The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, 73, 3-27.
(このNagyの論文の抜粋は、Herman Feifel (編). (1973). 死の意味するもの (大原健士郎・勝俣瑛史・本間修, 訳). 東京: 岩崎学術出版社 (原著刊行年次, 1959年) の第2部「死に対する発達の考察」, 第6章に掲載されている)
- Safier, G. (1964). A study in relationships between the life and death concepts in children. *Journal of Genetic Psychology*, 105, 283-294.
- Speece, M. W., & Brent, S. B. (1984). Children's understanding of death: A review of three components of a death concept. *Child Development*, 55, 1671-1686.
- Swain, H. L. (1979). Childhood views of death. *Death Education*, 2, 341-358.
- 東京都立教育研究所相談部児童生徒研究室. (1983). 子どもの「生と死」に関する意識の研究. 東京: 東京都立教育研究所
- White, E., Elsom, B., & Prawat, R. (1978). Children's conceptions of death. *Child Development*, 49, 307-310.

謝 辞

本論文は白百合女子大学大学院に提出した修士論文(1992年度)の一部を加筆修正したものです。論文の作成にあたり、御指導いただきました白百合女子大学 東洋教授に深く感謝致します。また本研究の実施にあたり御協力いただきました園児、児童、生徒の皆様から感謝致します。

付表：年齢別回答数

質問項目	カテゴリー [被験者数]	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳
		8	17	20	21	19	20	21	20	19	20	20
【質問1】(死のイメージ) 「死」とか「死ぬ」という言葉から思い浮かべる言葉を言って下さい	いやな感じ(怖い 不気味 気の毒 等)	2	7	6	14	11	16	15	7	12	9	9
	よい感じ(遊び ファミコン 夢 等)	0	2	2	0	1	0	0	1	1	0	0
	わからない 何も思わない	2	3	4	3	2	1	1	0	0	0	0
	死の原因(交通事故 病気 寿命 等)	0	0	0	2	2	0	1	5	3	5	2
	生と死(人物 命 動物 等)	4	5	8	2	2	1	4	5	3	3	6
	死後の世界(天国 地獄 霊界 等)	0	0	0	0	1	2	0	2	0	3	3
【質問2】(死の原因) どのような原因で人は死にますか	空想や推論を含む外的原因 (剣や鉄砲でやられ 等)	6	11	8	0	0	0	0	0	0	0	0
	現実的外的原因(交通事故 病気 等)	2	4	9	20	15	8	11	6	2	2	2
	内的原因(寿命 老衰 自殺 等)	0	2	3	1	4	12	10	14	17	18	18
【質問3】(普遍性) 誰でも人は死にますか	死なない人もいる	7	10	12	1	2	0	0	0	0	1	0
	誰でも死ぬ	1	7	8	20	17	20	21	20	19	19	20
【質問4】(体の機能の停止) 死んだ人は見たり聞いたり感じたり出来ますか 【質問4-II】 人間体で見たり聞いたり感じたり出来ますか	見たり聞いたり感じたり出来る	5	7	4	5	3	3	3	6	4	4	6
	見たり聞いたり感じたり出来ない	3	10	16	16	16	17	18	14	15	16	14
	人間体で見たり感じたり出来る	5	7	4	3	3	1	0	0	2	0	1
	人間体で見たり感じたり出来ない	3	10	16	18	16	19	21	20	17	20	19
【質問5】(非可逆性) 死んだ人は生き返れますか	生き返れる	5	3	5	3	1	2	2	5	1	7	8
	生き返れない	3	14	15	18	18	18	19	15	18	13	12
【質問5-II】 人間体で生き返れますか	人間体で生き返れる	5	3	3	0	0	0	1	1	0	4	2
	人間体で生き返れない	3	14	17	21	19	20	20	19	19	16	18
【質問6】(死後観) 死んだら人はどうなると思いますか	現実派(焼く 骨になる 腐る 等)	8	14	13	8	9	8	5	9	6	4	6
	想像派(靈魂 天国 生まれかわる 等)	0	3	7	13	10	12	16	11	13	16	14
【質問7】「死ぬとはどういうことか」と考えたことがありますか	考えたことがない	7	16	17	13	14	11	15	10	7	5	7
	考えたことがある	1	1	3	8	5	9	6	10	12	15	13
【質問8】(死別体験) 家族や親戚など亡くなった経験がありますか	死別体験なし	8	14	18	14	14	10	13	8	5	8	1
	死別体験あり	0	3	2	7	5	10	8	12	14	12	19
【質問9】 死んだ人を見たことがありますか	見たことがない	8	14	17	17	16	12	12	9	5	11	3
	見たことがある	0	3	3	4	3	8	9	11	14	9	17
生まれかわり思想	ない	8	17	20	17	19	18	19	13	17	11	15
	ある	0	0	0	4	0	2	2	7	2	9	5

Nakamura, Teruko (Educational Counseling Center of the Board of Education of Chofu City). *The Development of Children's Concepts of Death*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 61-71.

The purpose of this study was to investigate how children's thinking about death varies between ages 3 and 13. Individual interviews consisting of nine questions took place with 205 children. As was predicted, all age groups viewed death as something bad. As to age-related variation, preschool children did not understand the meaning of death in the same way as do adults. Neither could they differentiate between actual death and "make-believe" death, and preschoolers did not believe that they would eventually die. School-age children had a more mature concept of death, characterized by universality, non-functionality and irreversibility. This understanding apparently leads to the development of images, hopes and desires for a world after death. Children 6-years-old and above also exhibited concepts related to reincarnation.

[Key Words] Concept of death, Conceptual development, Cognitive development, Reincarnation

1992. 9. 8受稿, 1994. 3. 9受理

「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み

柏木 恵子 若松 素子
(白百合女子大学) (東京女子大学)

「親となる」ことによって親にどのような人格的・社会的な行動や態度に変化（親の発達）が生じたかを、就学前幼児をもつ父親と母親346組を対象として比較検討を行った。加えて、子どもや育児に対する感情・態度及び性役割に関する価値観の測定も行い、母親の職業の有無、父親の子育て・家事参加度との関連で分析を行った。その結果、「親となる」ことによる発達は柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生き甲斐など多岐にわたるが、いずれの面でも父親より母親において著しいこと、子ども・育児に対して父親が肯定的な感情面だけを強く持っているのに対して、母親では肯定面と同時に否定的な感情もあわせもつアンビバレントなものであること、父親の育児・家事参加度の高さは母親の否定的感情の軽減につながる、同時に父親自身の子どもへの肯定的感情が強まり、母親のそれと近いものになること、父親及び母親の性役割についての価値観は、父親の育児・家事参加及び母親の有職と相互に一貫した形では対応しており「言行一致」があること、などが見出された。

【キー・ワード】父親, 母親, 親の発達, 育児・家事参加, 性役割観

問題と目的

親についての心理学的研究は、これまで専ら発達心理学の領域でなされてきた。“子どもの〇〇の発達に及ぼす親の△△の影響”¹⁾といった類のタイトルを冠した研究がその典型で、これまでにあまたある。そうした発達心理学における親研究は2つの特徴をもつ。

その1つは、“親”とはいいながら実際扱っているのは母親が中心であることである。これには次のような理由や背景がある。すなわち、主たる養育者が母親であるという現実、(それ故に)母親が子どもの発達に最重要な役割を果たしている可能性が高いこと、及び母親は子どもにとって代替不可能な決定的重要性をもつという理論・信念、加えて、データのとり易さなどである。

第二の特徴は、親はよかれあしかれ子どもの発達を規定し影響を与えるものとして問題にされていることである。これは、発達研究の関心が長らく子どもがおとなになる過程つまり子どもの発達に集中してきたこと、そこに影響する諸環境要因が問題とされたとき、親や家庭が子どもの発達に最も影響するものとしてクローズアップされたという当然の成りゆきによる。勿論、なかには、親から子への一方向的影響だけではなく親と子の相互作用を重視すべきだとの主張や研究も少なくない(Sameroff, A. 1975; Belsky, J. 1984; 三宅, 1990)。しかし、これらも結局は親と子の相互作用を子どもの発達に関係づけて見ており、その限りではやはり子どもの発達への影響と

いう視点に立つ。

このような従来の親研究の特徴は、同時に研究の限界でもある。第一の特徴をもたらしした前述の諸理由・背景は、いずれも、母親中心の研究でよしとする十分な理由ではない。変化しつつある今日の家庭と子育て状況についての現実認識の甘さ、家庭はシステムであり母親の心理・行動は他の家族成員とりわけ夫(父親)のありようと密接な相互作用を持つという視点の欠如、母親の絶対的重要性について十分な証拠を欠いた過度の信念、そしてデータのとり易さという研究者の怠慢、等によるところが大きい。第二の特徴については、子どもの発達に視点がおかれるあまり、親は影響を与える者としてのみ問題とされ、親の側についての発達の視点が忘れられてしまっていた。いわば親はモノ扱いに等しかったといえよう。

おとなは決して完成態でも発達のゴールでもなく、成人以降も生涯、発達しつづける。子どもが新しい経験や役割に出会う中で認知・人格・社会的あらゆる面で発達してゆくのと同様に、おとなもまた、新しい経験に出会い新しい役割をとることの中で発達する。

ところで、これまで成人期の発達として職業的社会化がしばしばとり上げられてきた。ここでは、ほとんど全ての人が職業生活に入る男性だけが念頭におかれていることは明らかである。そして女性については、子どもとの関係で子どもの発達に影響する者として専ら問題にされてきたのである。こうした性別化された成人発達研究の中で取り落とされてきたのは、子どもを持ち子育てにかかわることによる親自身の発達である。子どもが生ま

1) 〇〇は性格, 知的能力とさまざまであり, △△もしつけ, 価値・期待, パーソナリティなどいろいろである。

れば自動的に親となり、父親・母親と呼ばれはする。しかし親として子に抱く心情と行動は、呼称のように自生的なものではない。また女性だけに備わっている本能でもない。子育ての苦楽の中で育まれる（服部・原田，1991）。加えて、女性が母親たるべく社会化される結果でもある（Goodnow, & Collins, 1991）。

ほとんどの成人が結婚子どもを持ち、その結果「親となる」。このことは、職業上の地位・役割以上に、人々が出会う新鮮な経験であり初めての、しかも長期にわたってとりつづける役割である。従って「親役割」をとることは、職業的の社会化以上に成人にとっての発達の過程にほかならない。このことは誰しもが日常、生き生きと実感しているながら、成人期の人格発達の問題としても、また親研究の文脈でも、これまでほとんど取り上げられてこなかった。

とりわけ父親については、1975年のLambの“父親の再発見”以来、父親研究は米国を中心に爆発的に増えたものの、研究の焦点は子どもの発達への影響に集中しており（松田，1993）、親の側の発達は最近ようやく米国の家族社会学者を中心に始められている（Robinson, & Barret, 1986; Bronstein, & Cowan, 1988）が、わが国では極めて乏しいのが現状である（柏木，1993）。

ところで、かつてはみられなかった育児不安や幼児虐待などが注目され、一般の母親の子どもへの態度も最近変化しつつあるといわれる。しかし、他方で「子ども（子育て）を持って成長できた」は、学歴・年齢・夫の有無（母子家庭）を問わず、母親が共通して強く肯定している思いである（柏木，1979; 大日向，1988）。また、父親の多くも同様に「自分が成長する」述懐をしている（牧野・中原，1990; 山口，1993）。

このように、母親も父親も異口同音に言う「人間的成長」「自分が成長する」とは、どのようなことを指すのであろうか。上掲のこれまでの研究は、母親についても父親についてもこの成長がどのようなものかについて、ふみこんだ検討をしていない。本研究は、この「成長」の内容を検討することによって、親の発達がどのようなものかを知る足がかりとしたいと意図した。あわせて、父親と母親との比較、父母の就業形態・子育てにかかわっている状況や価値観との関連についての検討も行う。これは、親としての発達が子育てへの参加の度合や、その背景としての父母の職業や性役割をめぐる価値観等と関連していることが、これまでの研究（若松・小口・柏木，1991; 山口，1993）から示唆されるからである。

方 法

調査対象：3～5歳の幼児²⁾を持つ親一父親及び母親346対。この年齢児の親に焦点をあてたのは、直接的には先行研究（有野・田中，1989，河野，1993，大前・田中・樋口，三村，1990）が、この年齢児の父親と母親とを別々

Table 1 父親と母親の最終学歴の分布

	父親	母親
中学	2.0	1.4
高校	17.9	22.5
専門学校・短大	7.5	36.4
大学	59.2	35.8
大学院	12.4	3.5
不明	0.9	0

(%)

に扱っており調査内容を決めるにあたって参照としたこと、幅広い年齢の子どもの親についての研究（牧野・中原，1990; 山口，1993）では結果の意味が曖昧であった問題点をできるだけ排除しようとしたことによる。さらに、子どもへの感情（育児不安を含む）は、就学前の子どもを持つ母親に顕著であり（牧野，1982，大日向，1988）、またそれは父親（夫）の育児家事参加度と関係している可能性が示唆されていることも勘案して、子どもの年齢範囲を決定した。

具体的な手続きは、東京都内及び埼玉県下の幼稚園及び保育園合計7園に在園する3～5歳児を通して、その両親に調査を依頼し再び園児を通して回収した。346対は両親双方からの回答が全て揃って得られたケースである。回答率は園により多少の差はあるが、全体で約70%であった。調査は1992年5月から7月にかけて行った。父親の職業は約74%が雇用、残りが自営あるいはフリーである。母親の41%は無職の専業主婦、残りはなんらかの形で職業をもっている。両親の最終学歴分布はTable 1の通りで、全国平均（平成2年国勢調査報告）に比べて父母ともやや高い方に偏っている。なお全サンプルの77.9%は核家族である。

調査内容

父母に対する調査は、前述の目的に沿って次の3部からなる。

- 1 「親となる」ことによる変化・発達に関するもの（以下、親の発達と略す）
 - 2 子ども・育児に対する感情・態度に関するもの
 - 3 性役割に関する態度・価値観に関するもの
- これらに加えて、父親には学歴および育児・家事への参加度をみる質問項目群が、また母親には家族構成、子どもの数・性・年齢、学歴及び職業の有無と将来計画等を問う質問項目群が加えられた。

- 1 <親の発達>に関する質問項目及び方法の選定：親
- 2) 在園児を含めて子ども数の平均は1.96(SD 0.71)で、きょうだいの年齢は0～17歳にわたる。また母親の年齢は平均34.4歳で23歳から45歳に広く分布している。3～5歳児が第1子であるケースは全体の50.0%、またきょうだいのいるケースは全体の74.3%である。

となったことによる心理・行動上の変化・発達を捉えるにあたって、さまざまな方法論について検討した結果、最終的に「親自身がどのような点について、どれほどの変化を認識しているか」の評定によることとした。このため、「変化」を問う項目の選定を次の手順で行った。まず幼児をもつ親数人と二度にわたる個別面接及び「親となって」の題の小作文を求めた。面接時の自由な叙述及び作文について内容分析を行い、そこから親となり子育て経験によって変化し成長したと推定される性格・態度・行動項目を採集した。これと、母親(有野・田中, 1988)、父親(大前ほか, 1989)について既に行われている予備的研究結果とを照合・検討し、親の変化・発達に関する質問紙を作成した。これについて、発達心理学専攻者4名(いずれも幼児の親)により、項目及び表現の適否について吟味を求めて内容の妥当性の検討を行い、その結果、50項目から成る質問紙を確定した。

2 子ども・育児に関する感情・態度を測定するものとして、母親についての先行研究(柏木, 1979; 大日向, 1988)の結果を父親の場合を想定して検討し、肯定的・否定的両面からなる14項目を選定した。

3 社会的性役割観に関しては、学生・社会人・夫と妻等さまざまな対象について既に行ってきたキャリア発達をめぐる一連の調査研究(東京女子大学附属女性学研究所, 1988)の中で開発し、妥当性が確かめられている21項目からなる質問を用いた。

以上の質問に対して、1「そうなった(1の場合)／よくそう思う(2の場合)／賛成(3の場合)」, 4「そうなったとは思わない／全くそうとは思わない／全く賛成ではない」を両極とする4段階選択肢を設定し、最も該当するものの選択を求めた。

4 父親の育児・家事参加度を見るために、原(1987)、牧野・中原(1990)、永井(1992)等を参照し、幼児のいる家庭で有効と思われる育児・家事に関する行動7項目を選定した。各行動項目ごとに「毎日」「週2~3回」「週末のみ」「たまに」「全くしない」の頻度による5選択肢を設け選択回答を求めた。

結果と考察

1 父親および母親における「親となる」ことによる発達

因子分析による「親の発達」尺度項目の妥当性の検討

「親の発達」項目への父親・母親の全回答データにもとづいて、因子分析を行い主因子解を求めてエクスマックス回転を行った。その結果、抽出された6因子までで全分散の48.7%が説明された。項目内容、心理学的意味及び因子負荷量行列(Table 2)から、第I因子<柔軟さ>, 第II因子<自己抑制>, 第III因子<運命・信仰・伝統の受容>, 第IV因子<視野の広がり>, 第V因子<生き甲

斐・存在感>, 第VI因子<自己の強さ>と命名した。

日頃、人々は“やっぱり親になるとちがう”“親にならなければわからない(わからなかった)”“子どもを育てて自分が成長する”といった言葉で自分について述懐しまた他人についても評したりする。また子育ての意味や子どもの価値に関する調査は、多くの人々が子育ては“やりがいがある”“子育てで自分が成長できる”と回答していることを明らかにしている(毎日新聞社人口問題調査会, 1992)。親についての先行研究(牧野・中原, 1990; 山口, 1993)もこの点に注目し、“親になって成長”“精神的成長”を見出している。しかしここでは“成長”“精神的成長”といずれも概括的記述にとどまっていて、その内実がどのようなものかは各自の親としての実感で納得しているのが現状である。今、これらの因子が示すところは、こうした親たちの実感の内実を示すものといえよう。

多角的にものを見る、他者の立場や公共的見地に立って考え自己抑制的に行動する、ものごとに柔軟にそしてねばり強く対処する、人知を超えたものの存在や運命を受け入れるなどは、オールポート(Allport, 1960)が人格の成熟としてあげているものの主要なものに該当する。また日常、“人間ができていく”とか、“練れた人だ”といった表現で、人格的に優れより高い水準にあると判断するときに暗黙の基準とされているものの多くが、ここに含まれていることにも気づく。

今回のデータは、親でない人(統制群)との比較あるいは親となる前となった後との被験者内比較ではなく、“お子様が生まれる前(親になる前)と後(親になってから)とで、どの様な変化をお感じでしょうか”の教示を与えて「親になる前と比べての変化」を親本人に回想的に考えさせ、その認知にもとづく評定を求めたものである。従って今回の結果については、継時的変化そのものを捉える縦断的資料による確かめが今後必要であろう。

もう一つ考えられる方法である親を統制群(親でない人)と比較することには、両群間の差異が「親である」か否かの差以外の様々な要因(職業経験、価値観など)が不可分に結びついており、理論的にも疑義がある。「変化した」ことを親本人がどのような事柄についてどの程度認めているかを問うた今回のアプローチは、一見主観的ともいえる。しかし逆に当事者による認識を明らかにした点で、親の変化と発達を捉える上で、いわゆる客観的測定以上に有意義だと考える。また同一人についての縦断的方法が、しばしば反復測定による回答の信頼性・妥当性を低めることも考えると、一時点での測定は限界をもちながらも意味を持つと考える。ここには確かに、回想による多少の歪みはあるかも知れない。また上述の教示による回答が、直ちに親になることによる変化かどうかとすることはできない可能性ももちろんあろう。しかし、個

Table 2 「親の発達」項目とエコマックス回転後の因子負荷量行列

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
角がとれて丸くなった。	.644	.305	.119	.231	.174	.113
考え方が柔軟になった。	.609	.286	.200	.256	.186	.169
他人に対して寛大になった。	.577	.257	.324	.144	.136	.108
精神的にタフになった。	.504	.125	.291	.129	.192	.308
度胸がついた。	.484	.053	.175	.295	.132	.446
小さなことにくよくよしなくなった。	.481	.176	.207	.243	.129	.374
いろいろな角度から物事を見るようになった。	.427	.184	.347	.242	.266	.350
他人の迷惑にならないように心がけるようになった。	.259	.581	.308	.310	.112	.221
自分のほしいものなどが我慢できるようになった。	.214	.575	.163	.142	.180	.283
他人の立場や気持ちをくみとるようになった。	.430	.491	.324	.240	.145	.289
人との和を大事にするようになった。	.447	.465	.320	.376	.151	.155
自分本意の考えや行動をしなくなった。	.256	.455	.210	.240	.268	.232
自分の分をわかまえるようになった。	.249	.454	.252	.378	.227	.239
儉約するようになった。	.241	.445	-.013	.234	.191	.247
思い通りにならないことがあっても我慢できるようになった。	.325	.436	.192	.028	.172	.192
日本や世界の将来について関心が増した。	.107	.040	.631	.205	.241	.256
環境問題（大気汚染・食品公害など）に関心が増した。	.119	.144	.625	.198	.191	.200
児童福祉や教育問題に関心をもつようになった。	.108	.084	.542	.015	.288	.074
一人一人がかけがえのない存在だと思ふようになった。	.294	.208	.523	.271	.214	.106
日本の政治に関心が増した。	.149	.112	.504	.287	.204	.244
弱い立場の人に思いやりをもつようになった。	.359	.379	.458	.286	.077	.140
協力することの大切さが分かるようになった。	.308	.356	.418	.283	.153	.245
どの様な人にもその人なりの良さがあると感じるようになった。	.295	.357	.416	.300	.150	.127
いろいろな人に支えられていると感じるようになった。	.197	.288	.388	.111	.073	.232
物事を運命だと受け入れるようになった。	.223	.028	.128	.655	-.042	.273
運や巡りあわせを考えるようになった。	.152	.131	.161	.620	.106	.247
常識やしきたりを考えるようになった。	.147	.421	.209	.560	.342	.084
長幼の序は大切だと思ふようになった。	.140	.372	.142	.531	.323	.088
伝統や文化の大切さを思ふようになった。	.215	.255	.340	.503	.243	.114
人間の力を越えたものがあることを信じるようになった。	.145	.068	.176	.458	.073	.277
信仰や宗教が身近になった。	.050	.061	.084	.379	-.045	.186
情にもろくなった。	.332	.315	.192	.379	.072	.110
生きている張りが増した。	.217	.133	.282	.079	.586	.154
長生きしなければ思ふようになった。	-.062	.114	.172	.129	.560	.130
自分がなくてはならない存在だと思ふようになった。	.228	.197	.219	.155	.515	.248
子どもへの関心が強くなった。	.109	.005	.138	-.070	.445	-.039
より計画的になった。	.081	.368	.103	.137	.440	.351
子ども好きになった。	.212	.111	.206	.150	.424	-.009
目先のことより、将来のことを考えて行動するようになった。	.086	.311	.201	.182	.422	.386
一人前になった気がした。	.370	.150	.051	.143	.410	.255
気持ちが安定した。	.331	.208	.190	.246	.406	.132
より大人になったと感じる。	.337	.226	.101	.011	.400	.260
慎重になった。	.124	.350	.149	-.003	.391	.174
自分の健康に気をつけるようになった。	.158	.306	.157	.088	.376	.141
多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった。	.467	.020	.067	.169	.046	.586
自分の立場や考えはちゃんと主張しなければ思ふようになった。	.148	.246	.220	.153	.095	.571
物事に積極的になった。	.329	.172	.222	.225	.210	.498
目的に向かって頑張れるようになった。	.166	.342	.157	.136	.302	.450
妥協しなくなった。	.054	.215	.121	.289	-.082	.401
累積寄与率 (%)	36.8	40.4	42.8	45.1	47.2	48.8

Table 3 親となることによる成長・発達
一次元得点平均 (標準偏差) -

	父	母	P
第Ⅰ因子 柔軟さ	2.40 (0.74)	< 2.83 (0.61)	***
第Ⅱ因子 自己抑制	2.57 (0.72)	< 2.99 (0.62)	***
第Ⅲ因子 運命・信仰・伝統の受容	2.71 (0.73)	< 3.12 (0.54)	***
第Ⅳ因子 視野の広がり	2.21 (0.67)	< 2.60 (0.63)	***
第Ⅴ因子 生き甲斐・存在感	2.82 (0.57)	< 2.95 (0.53)	**
第Ⅵ因子 自己の強さ	2.35 (0.69)	< 2.52 (0.58)	***

注. ** $P < .01$ *** $P < .001$

別面接時の回答や叙述から、これらの変化を“やっぱり親になると……”とか“親としての苦勞で……”といった表現で説明していたことを考えあわせると、少なくとも、これまでの研究で親になって“自分が成長した”(大日向, 1988; 牧野・中原, 1990)とか、子育ての意味として“自分の成長”と一言ですませてきたことが、このようなさまざまな面にわたる人格的な発達であることをやや精密に定量的に明らかにしたとみなしてよいであろう。

では、こうした「親となる」ことの変化・発達は、父親・母親においてどのようであるかを各次元項目の得点平均によってみてみよう (Table 3)。

父親も母親も、視野の広がり、生き甲斐・存在感、自己抑制などを筆頭に、最高で3.12、最低でも2.20と、「親になる前に比べて親になった後の」変化を認めている方向にある。得点順位に関して父母間には多少の違いがあるが、「自己の強さ」や「視野の広がり」などの変化は他の3次元での変化に比べて小さく、「運命・信仰・伝統の受容」「生き甲斐・存在感」「自己抑制」などでの変化が父母に共通して大きい。

ここでとりわけ注目したいのは、第Ⅲ因子<運命・信仰・伝統の受容>である。これは、母親では最高、父親でも生き甲斐に続き大きな価値を占めている。近代科学の進歩は、乳幼児死亡率を著しく低下させ、他方、妊娠の人工調節は確実なものとなり、その結果として少産少子時代が到来した。これは単なる人口という数の問題にとどまらず、親の子どもに対する感情や人々にとっての子どもの価値を変化させた。今や、子どもは科学技術と人間の意志の統制下にあるものとなり、親たちが子どもを「授かりもの」ではなく、「つくるもの」とみなすのはきわめて当然なこととなった (中山, 1992)。

最近著しい少子化の背景には、子どもは“欲しいだけ産んだから”“教育費などお金がかかる”“(しつけや教育に) 気苦勞が多い”といった理由で子どもの数を決める親の態度 (毎日新聞社人口問題調査会, 1992) と、結婚

生活や子どもを育てることよりも他の活動や物を重視する態度 (厚生省人口問題研究所, 1989) がある。これらは、人々における子どもの価値の相対化及び子どもを「つくるもの」とみなしている親の心理とを反映している。

中山によると「授かる」は、子どもが欲しいのにできない経験や予期せぬ妊娠に出会ったとき用いられる表現だという。この「授かる」という表現には、生命への畏敬の念や人知を超えたものの意志と力を認める謙虚な態度が含まれており、ここでの第Ⅲ因子にほぼあたる。これが親たちに高いことは、妊娠・出産時には希薄だったこのような態度が、4~5年の子どもとの生活・子育ての経験を通して親たちにもたらされることを示唆している。子どもは親のつくるもの、親のもちものとしての子どものとなりがちな今日、子育てを通して学ぶ親の発達の中で極めて重要と思われる。

もう一つ注目されるのは、いずれの次元でも父親に比べて母親での変化が有意に大きいことである。これは、子育てを通して「変化した」と回答する者の率が父親より母親でかなり高く、またその変化を「自分の成長」とするのも母親がずっと多いという牧野らの結果とも一致する。この差をもたらし要因として、子育てへの関与の差が考えられ、それは母親の職業の有無と関係していると予想される。そこで、母親の就業形態により2群を構成した。ここでの有職群とはフルタイムないし週30時間以上勤務の者111名 (全サンプルの32.4%) であり、無職群は142名 (41%) である。残りのパート、アルバイト、不定期就労者はこの分析からは除外した。両群の父母の学歴及び家族形態は Table 4 のとおりである。

Table 4 母親の就業形態別の2群における父母の学歴及び家族形態 (%)

		母親有職群 (N=142)	母親無職群 (N=111)
父親の学歴	中学・高校	27.0	11.3
	専門学校・短大	8.1	6.3
	大学・大学院	64.9	82.4
母親の学歴	中学・高校	26.8	14.1
	専門学校・短大	33.0	38.0
	大学・大学院	40.2	47.9
核家族率		79.3	76.7

この2群における「親になっての変化」の得点を父親・母親別に算出・比較した (Table 5)。

父親では配偶者 (母親) の職業の有無による差はみられない。一方、母親では4次元で有職・無職群間に有意差があり、いずれでも無職群で高く、職業をもたず育児・家事に専業の母親において親になってからの変化が大きい。このことは、育児・家事が生活の中心を占め最も多

Table 5 母親の就業状況別の比較

	父 親		母 親	
	配偶者 無職	有職	無職	有職
第Ⅰ因子 柔軟さ	2.38 (0.77)	2.37 (0.71)	2.85 (0.55)	2.81 (0.65)
第Ⅱ因子 自己抑制	2.59 (0.73)	2.51 (0.70)	3.07 (0.55)	2.85 (0.69)
第Ⅲ因子 運命・信仰・ 伝統の受容	2.70 (0.77)	2.75 (0.72)	3.21 (0.50)	3.04 (0.58)*
第Ⅳ因子 視野の広がり	2.24 (0.70)	2.15 (0.65)	2.66 (0.53)	2.37 (0.68)***
第Ⅴ因子 生き甲斐・ 存在感	2.86 (0.55)	2.71 (0.59)	3.06 (0.47)	2.80 (0.61)**
第Ⅵ因子 自己の強さ	2.35 (0.71)	2.31 (0.69)	2.55 (0.55)	2.48 (0.61)

注. * $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

く子育てにかかわることが、「親になっての変化」の認識を大きくさせていることを示唆する。また育児に専業でかかわっている自分自身の生き方を肯定しようとしていることでもあろう。この変化は、有職の母親では専業母親に比べれば小さいものの、それでも父親よりは大きい。これは、職業をもつ母親が父親に比べればずっと多く子育てにかかわっているからであろう。本研究には、父親と母親間の家事・育児の分担の仕方や父母双方の参加度を直接測定・比較した資料はない。しかしこの結果から、職業を持つ母親が男性の場合と違って、家事・育児との両立に奮闘している様相がうかがえる。無職の母親に比べて有職の母親さらに父親で、「親になっての変化」が小さいことについて、もう一つ考えられることがある。それは、父親及び有職の母親では、これらの面が子育てを通して変化するばかりではない可能性である。彼らは、育児のほか、大きな比重を占めている職業生活においてもさまざまな経験をしており、その中で人格的に鍛えられ変化している可能性が十分考えられる。質問紙での「親になる前と比べて」との教示は、必ずしも子育てによっての変化だけではなく、職業を持ちながら子育てを同時に行っている状況を含め親になる前と後とを比較して回答していることにもなる。有職の母親、特に第一子の母親の場合、子どもがなくて働いていたときと比べて、その生活はいわゆる両立の困難もあり厳しく大変な状況に変化する。しかし、それだけに「子どものためにいい加減な働き方はしてられない」という働くことへの真摯な姿勢が生まれる（働く母の会、1990）。このような「働きつつ育てつつ」の生活が、同じく職業生活を持つ父親以上に、人格的・社会的な面で大きな変化・発達をもたらしたのではなかろうか。

なお、本サンプルには3～5歳児の出生順位やきょうだいの年齢に関してさまざまなであったが、今みてきた「親になること」による変化について子ども数（1人っか否か）および出生順位による差は認められなかった。こ

れはきょうだいのいるケースのうち年齢差のあるケースはごく少数であったためであろう。より年長の子どもの親つまり長期にわたる親役割による変化・発達については、改めてサンプルや調査内容を吟味して検討すべき課題である。

2 育児・子どもへの感情とその規定因

このような人格的变化における父親と母親間の差及び母親の職業の有無による差は、育児や子どもをめぐる感情や意識にも別な形であらわれている。子どもの育児への感情や態度を測定した14項目への父母の回答にもとづいて因子分析を行い、主因子解を求めエカマックス回転を行って確定された3因子の、父親・母親の得点はTable 6のとおりである。

Table 6 父親・母親における育児への感情

	父 親	母 親
第Ⅰ因子：育児への肯定感	2.91(0.60)	2.98(0.55)
第Ⅱ因子：育児による制約感	1.88(0.46)	<2.24(0.51)***
第Ⅲ因子：〈子どもは分身〉感	2.58(0.85)	>2.41(0.78)**

注. ** $P < .01$ *** $P < .001$

育児への肯定感に父母間に差はなく、いずれでも3因子中最も高い。母親の職業の有無、また学歴・階層いかにかわからず、今日、子どもは“授かるもの”ではなく、夫婦の合意・決断にもとづいて“つくる”ものとなった（中山、1992）。こうして生んだ子どもと子育てに対して、親となったものが肯定的であることは当然であろう。自分たちの選択・決断によるものなのだから。

ついで高いのは、〈子どもは分身〉感である。そしてこの感情を、父親の方が母親より強く抱いていることが注目される。母親は出産という文字どおり“分身”の経験を持つ。ところが、それをもたない父親の方にむしろこれが強いことは興味深い。

このような子どもや育児に対する肯定的感情に対して、育児の負担感や自信のなさ、子どもの存在によって自分の視野や行動が制限されているといった内容を含む育児による制約感<は、父親では他の2因子より際立って低い。これに対して、母親では他の2次元とあまり変わらない値を示し、父親との間に有意差がある。つまり、父親では子ども・育児に対して肯定的感情が優位を占めているのに対して、母親は一方で子どもや育児への肯定的感情を強くもちながら、他方これとは逆の、育児や子どもの存在への否定的な感情も持つ・アンビバレントな心理状況であることを明らかにしている。しかもこのことについては、母親の職業の有無による差はみられないのである（Table 7）。

この結果は、しばしばいわれるように、母親が職業を

Table 7 母親の就業別にみた父親と母親の育児・子どもへの感情

	父親		母親	
	妻無職	有職	無職	有職
第Ⅰ因子： 育児への肯定感	2.99 (0.62)	2.86 (0.64)	3.03 (0.57)	2.99 (0.56)
第Ⅱ因子： 育児による制約感	1.77 (0.49)	2.01 (0.43)***	2.22 (0.55)	2.16 (0.43)
第Ⅲ因子： (子どもは分身)感	2.66 (0.78)	2.46 (0.88)	2.46 (0.74)	2.29 (0.84)

注. *** $P < .001$

持つことが子どもや育児への肯定的態度を減じさせるということはないことを示す。と同時に、職業の有無にかかわらず、母親たちは育児による制約感を等しく強く抱いていることを明らかにしている。

他方、父親を妻の職業の有無別にみると、肯定的次元には差はないが、〈育児による制約感〉について差があり、妻有職群で有意に高い。つまり、専業で育児・家事にあたっている妻をもつ夫（父親）に比べて、有職の妻を持つ夫（父親）では育児による制約感が高まるのである。とはいっても、妻（母親）よりは低いのであるが――。

以上のように、育児・子どもへの感情について父親と母親とは差がある。そして母親の職業の有無は母親自身には差をもたらさず、配偶者（父親）の側に制約感が増すという変化を生じさせるのである。

これまで、父親及び母親各群の平均値でみてきたが、次に一人の子どもの父と母（夫と妻）の対ごとに2人の得点間の差（父親得点――母親得点）を求め、その平均値を群ごとに算出してみる（Table 8）。すると、母親の職業の有無がもたらす変化として別な様相が見えてくる。

すなわち、母有職群に比べて、母無職群の父母（夫妻）間では、〈育児による制約感〉が有意に大きい。さらに、母親では育児への感情・意識について、職業の有無による差はなく、ともに肯定的感情と否定的感情とをあわせもつことを指摘した。しかし、対ごとの比較により父母（夫妻）間のズレでみると、無職・専業の妻（母親）群では〈育児による制約感〉について夫と妻との間にズレが大きく、母親の側がより大きな制約感を抱いている。そして、妻有職の場合には、このようなズレが極めて小さいことと対照をなしている。このような結果は、母親が

Table 8 育児・子どもに対する感情の父母（夫・妻）間のズレ

	妻(母)無職	妻(母)有職
第Ⅰ因子：育児への肯定感	-0.04(0.72)	-0.10(0.60)
第Ⅱ因子：育児による制約感	-0.44(0.58)	-0.16(0.53)***
第Ⅲ因子：(子どもは分身)感	0.21(0.97)	0.16(0.10)

注. *** $P < .001$.

Table 9 <親となることによる発達>と<子どもへの育児への感情>間の相関マトリックス

	育児肯定感		制約感		分身感	
	父親	母親	父親	母親	父親	母親
柔軟さ	0.43***	0.31***	0.05	-0.13**	0.33***	0.23***
自己抑制	0.45***	0.32***	0.06	-0.06	0.36***	0.35***
運命・信仰～	0.47***	0.40***	0.01	-0.07	0.34***	0.32***
視野～	0.39***	0.30***	0.05	0.03	0.36***	0.39***
生き甲斐	0.59***	0.50***	-0.13*	-0.16**	0.46***	0.41***
自己の強さ	0.37***	0.29***	0.09	-0.01	0.37***	0.30***

注. * $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

夫とともに育児をしているという連帯感が持てないとき、育児不安が大きいという知見（服部・原田，1991；牧野，1982）と対応するものであろう。

ところで、育児への諸感情は、先にみた親になることによる人格発達とどのように関係しているのであろうか。父親、母親別に、育児感の3次元と人格発達6次元間の相関マトリックスを検討してみると、父親・母親いずれでも〈育児肯定〉〈分身〉は全ての人格変化と有意に正相関している（Table 9）。これは、育児や子どもへの肯定的感情を持つことと子育てによる人格的発達とはわからず結びついていることを物語る。他方、〈制約感〉は母親においてのみ〈柔軟さ〉〈生き甲斐〉と有意な負相関関係にある。このような負相関が父親ではみられないのは、そもそも父親では〈制約感〉が全体として低いことによるのであろう。母親でみられる負相関は、育児に伴う制約感を母親が強く感じているほど、子育てを通して自分が成長したという認識――とりわけ、ものごとに柔軟に対応する姿勢や生き甲斐――が持ちにくくなる可能性を示唆している。

これをもう少しはっきり見るために、母親の〈制約感〉得点の分布からこれが高いものと低いもの2群³⁾を選び、両群の人格発達6因子の得点を算出・比較してみる（Table 10）。

Table 10 <制約感〉の強い母親と弱い母親における「親になること」の変化―平均とSD―

	制約感強い母親 (79)	制約感弱い母親 (89)
第Ⅰ因子：柔軟さ	2.67(0.63)	2.89(0.62)*
第Ⅱ因子：自己抑制	2.93(0.64)	2.99(0.68)
第Ⅲ因子：運命・信仰～	3.07(0.57)	3.13(0.62)
第Ⅳ因子：視野の広がり	2.60(0.58)	2.53(0.68)
第Ⅴ因子：生き甲斐	2.83(0.51)	3.00(0.57)*
第Ⅵ因子：自己の強さ	2.50(0.53)	2.46(0.63)

注. * $P < .05$.

3) <制約感〉得点は6～22に分布しているが、ここから11点以下の89人を低群、16点以上の79人を高群とした。

すると、第Ⅰ因子<柔軟さ>と第Ⅴ因子<生き甲斐・存在感>で2群間に有意差があり、いずれでも低群で高い。つまり制約感を強く抱いている母親（高群）は、制約感のない母親に比べて柔軟さが弱く、生き甲斐をもち難いのである。他の面では有意差はみられないことから、子育てに制約感を抱くことと柔軟で多角的なものの方見方、タフに対処できること、生き甲斐を持てることとは、相互に絡み合い影響し合っていることを示唆している。

3 父親の育児・家事参加とその規定因

ところで、この子育て制約感は、母親では職業の有無にかかわらず母親では父親より強く（無職の母の方が有職の母より数値上は高いが有意差はない）、また父親では

有職の妻をもつ場合、有意に高いことが確かめられている（Table7）。このことは、父親が育児・家事に実際どのくらい参加しているかが制約感と関係している可能性が考えられる。本研究では父親の育児への参加の度合を、入浴、幼稚園送り・迎え、食事支度、食事片付け、掃除の6項目について頻度による自己評定を父親に求めた。これを得点化して6項目の育児・家事総得点を求め、父親（夫）の育児・家事参加度の測度とした。この総得点はFigure 1のような幅広い分布を持つ。この分布から得点が極めて低い父親50人（全体の14.7%）及び高い父親61人（同15.6%）を選び出し（Figure 1参照）、その父親及び母親（妻）の人格的变化と育児感について比較してみた（Table 11）。

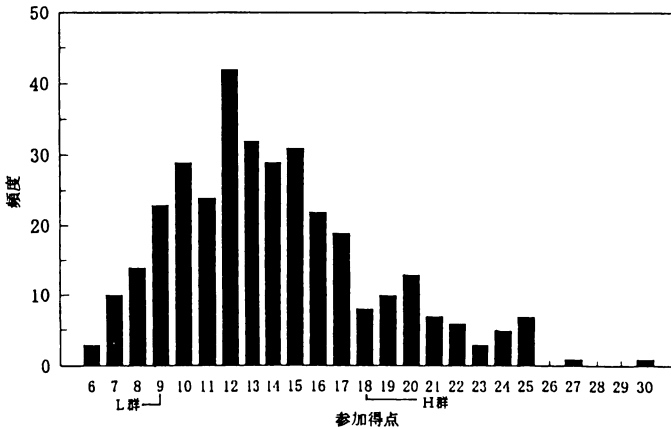


Figure 1 父親の育児・家事参加得点分布

Table 11 父親（夫）の育児・家事参加の高・低による父親・母親の育児感の比較
—平均得点とSD—

	父		母		
	L	H	L	H	
変 化	第Ⅰ因子：柔軟さ	2.34 (0.92)	2.36 (0.68)	2.83 (0.56)	2.72 (0.64)
	第Ⅱ因子：自己抑制	2.56 (0.74)	2.49 (0.75)	2.95 (0.56)	2.78 (0.69)
	第Ⅲ因子：運命・信仰・伝統の受容	2.56 (0.83)	2.67 (0.76)	3.18 (0.49)	3.07 (0.64)
	第Ⅳ因子：視野の広がり	2.20 (0.79)	2.09 (0.69)	2.69 (0.58)	2.31 (0.74)
	第Ⅴ因子：生き甲斐・存在感	2.88 (0.46)	2.63 (0.71)	2.86 (0.55)	2.85 (0.56)
	第Ⅵ因子：自己の強さ	2.38 (0.79)	2.25 (0.68)	2.50 (0.45)	2.33 (0.63)
育 児 感	第Ⅰ因子：育児への肯定感	2.70 (0.55)	2.86 (0.68)	2.80 (0.49)	< 3.12** (0.59)
	第Ⅱ因子：育児による制約感	1.96 (0.47)	1.94 (0.50)	2.46 (0.51)	> 2.14*** (0.46)
	第Ⅲ因子：<子どもは分身>感	2.68 (0.73)	> 2.30* (0.89)	2.31 (0.74)	2.25 (0.89)

注. *P<.05 **P<.01 ***P<.001

人格の変化については、父母いずれでも父親の育児・家事参加の度合による差はみられない。差があるのは、育児・子どもに対する感情においてで、母親での<制約感>と<肯定感>、父親での<分身感>においてである。その差の方向はさきに予想した通りで、父親の育児・家事得点の高い群の母親では、<制約感>が有意に低く逆に育児への<肯定感>が高いというものである。牧野は、母親の育児不安には夫との連帯感、“一緒に子育てをしているという気持ち”を持てるか否かが大きくかわかることを明らかにしている(牧野, 1982)。父親の育児・家事参加得点の高さが肯定感増加、制約感の低下と結びついていることを示す本データは、牧野の“一緒に子育てをしている気持ち”は夫(父親)が実際に子育てや家事を担っている現実を支えられていることを示唆している。

夫の育児・家事参加の度合は、このように配偶者である母親の心理を左右しているが、他方、父親自身の育児感にも母親の場合とはちがった形での変化をもたらしている(Table 11)。ここでは、母親で見出されたく制約感<肯定感>については参加度は差をもたらさない。そして母親では差がなかった<子どもは分身感>に差があり、育児・家事参加の低い父親でこれが高くなっている。もともとこの<分身感>は、母親より父親に高いことが注目されていた(Table 6)なのであるが、この<分身感>が、育児・家事への参加が極めて低い父親では著しく、これに対して、育児・家事に深くかわる父親ではこの感情は薄れ、ほとんど母親のそれと同程度になるのである。

これらのことを考え合わせると、自分自身が直接子育てにかかわらないでいる場合、「子どもは分身」「生きた証だ」と、自分が子の親であることを観念的に確認することになるのではなからうか。これに対して、子育てに直接深くかわるようになると、子育ては楽しいこと、子どもはかわいいもの、といったことばかりではなく、文字通り苦楽を味わう。この経験は、育児や子どもへのより現実的で具体的な感情を抱かせ、父としての子どもとの関係を抽象的・観念的に自己確認することはしなくなるのだと考えよう。このことは、父親の子どもへの感情が子育てにかかわることによって変化し、母親のそれと近いものになってゆくことを示している。これは父親の場合に限らないのであろう。さきにみたように、母親においても子どもや育児に対する感情が父親のあり方によって左右される事実は、親の子どもへの愛情・子育てへの態度・感情は、子どもを育てる営みの中で育まれることを示唆している。

ラマーズ法で出産した夫婦が“ぼくたちが生んだ”という表現をする例をあげ、出産を父母がともに経験したことが子どもへの情念を変えることを、原は指摘している(原, 1993)。出産に引き続く子育てや家事を妻だけの

仕事とせずに、夫(父)も大きくかわかることは、立会い出産と同様に子どもへの感情を大きく変える。出産に立ち会った夫たちは、おそらくその自然な延長として子育てにも深くかわかるようになるであろう。それら一連の父・母共同の子育ての実験が、“子は分身”、“生きる証”といった抽象的なものにとどまらず、子どもへのより具体的で生き生きとした肯定的な感情を増すことになるのであろう。

人格の変化については、育児・家事参加度による差はここではみられなかった。牧野・中原や山口は、父親が子育てによって変化し成長したと回答していることを報告している(牧野・中原, 1990; 山口, 1993)。これらの研究では、中・高生の子どもまでを含む父親を対象としており、従って親の年齢が本サンプルよりも高く、子どもの幼少期から現在までのより長期にわたる子育て経験についての回想によっている。われわれの調査対象は、幼児を現在育てている親に限っており、従って子育て経験はより短い。また長期的な回想ではなく子育て中の回答である。これらのことが、牧野らの結果とは異なる結果となった一因かと考えられる。また他の研究では、「子育てによって変化した」か否かを概括的に尋ねるとどまるが、本研究では変化の内容をより具体的・詳細に取りあげて質問したことも結果のちがいに関係しているかも知れない。この辺を確かめるには、今回と同様な方法で父親についてより長期にわたって検討することが必要であろう。

さて、父親の育児・家事への参加度は母親の子ども・育児への感情や態度と大きくかわり、かつ父親自身の子どもへの感情を変えることが明らかにされたのであるが、父親がどの程度育児・家事にかかわるかはさまざまな要因が絡んでいることが予想される。まず第一に考えられるのは、配偶者(妻)の職業の有無が関係している可能性である。父親の育児・家事得点を母親の職業の有無群別にみると、無職群では12.7、有職群では16.2(全体の平均は13.9)で、この数値からは概して妻の有職が夫(父)の育児・家事参加を大きくするといえる。しかし、妻の有職が夫の育児・家事の量を一義的に決めているともいい難い。ちなみに、さきに父親の育児・家事参加度の高低により2群を設定したが、その2群での妻の有職率は、参加度低群では約16%(50人中8人)、高群では約64%(61人中39人)で、明らかに後者で妻の有職率は高い。しかし夫の育児・家事参加得点が極めて低い群の中にも、16%とはいえ妻が有職の者がいることは、妻が有職で多忙なため夫はいわばやむなく育児・家事に参加することになったとばかりは限らない、そこにはさまざまな背景があることを予想させる。夫の家事スキル、子どもの性、夫の幼少時からの育てられ方(男性としての性的社会化)、性役割についての考え方、職業の時間的

条件、家族形態等である。ここではこれらのうち、かねて幅広く検討してきた性役割についての考え方が育児・家事への参加という行動と対応している可能性を予測しとりあげることとした。

4 性役割観とその規定因

本研究では、女性の社会進出や男性の育児・家事参加についての意見等を含む性役割観⁴⁾をわれわれの先行研究(若松・小口・柏木, 1991)において既に妥当性と次元が確定されている質問紙を用いて測定している。そこで、性役割に関する3次元について父・母の比較検討を行ってみた。

まず、3次元ごとに父親と母親を比較すると、全ての次元で母親が父親より有意に高得点、つまり男性の育児・家事参加と女性の社会進出に対して肯定的そして性別分業に否定的で、女性の方がより革新的性役割観を持つ(Table 12)。

ついで、妻(母)の職業の有無別に比較してみると、全ての次元、また父(夫)母(妻)いずれでも有意差があり、有職群がより革新的な方向での群間の差がみられる。(Table 13)。

4) 社会的性役割観の3因子とその項目は下記の通りである。

因子	項目
第Ⅰ因子 革新的・非伝統的性役割	<ul style="list-style-type: none"> 女性が社会に対してなす最大の貢献は、家族を守り子どもを育てることである。 やはり、父親は外で働き母親が育児の責任を持つのが自然だ。 なんと言っても子どもにとっては、母親が大切だ。 職業の有無に関わらず、家事や育児は女性の役割・責任である。 子どもが3歳くらいになるまでは母親は育児に専念すべきである。 父親が仕事のために育児や子どものことに手がまわらないのはやむを得ない。 母性愛は女性のもつ本能だ。 男の子の教育には、父親が重要だ。 父親の出番は子どもがある程度大きくなってからだ。 子どもの世話や教育は、父親は母親にはかなわない。
第Ⅱ因子 男性の育児・家事参加	<ul style="list-style-type: none"> 家事や育児を妻任せにする男性は人生の大切なものを失っている。 男性も、育児休業をとるなど育児を配慮した働き方を考えるべきだ。 日本の男性はあまりにも仕事や会社に拘束され過ぎている。 妻が仕事を持っている場合には、夫も家事を平等に分担するのが当然だ。 父親にとって、仕事と育児は同等の重みを持つ。 一般に性による能力差よりも個人の能力や資質の差の方が大きい。
第Ⅲ因子 女性の社会進出	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの仕事の必要上夫婦別居することもやむを得ない。 結婚に関わりなく女性も仕事をもって経済的に自立すべきだ。 子どもは男性だけでも立派に育てられる。 職業をもっている母親もそうでない母親と同様に愛情豊かでしっかりした親子関係を築くことができる。 父親の単身赴任は子どものためによくはない。

* 因子名は他の2因子との整合性をもつよう、伝統的性役割をあらわす表現としたため、得点化にあたっては革新的・非伝統的性役割への賛否度を示すようすべての項目の数値を逆転した。

Table 12 父(夫)と母(妻)の性役割観

	父(夫)	母(妻)
第Ⅰ因子：革新的(非伝統的)性役割	2.28(0.52)	< 2.49(0.50)***
第Ⅱ因子：男性の育児・家事参加	2.87(0.51)	< 3.17(0.46)***
第Ⅲ因子：女性の社会進出	2.15(0.42)	< 2.36(0.46)***

注. *** $P < .001$

Table 13 母(妻)の有職・無職群別の夫(父)、妻(母)の性役割観の比較

	父親(夫)		母親(妻)	
	無職	有職	無職	有職
第Ⅰ因子：革新的(非伝統的)性役割	2.16(0.50)	< 2.48***(0.57)	2.30(0.43)	< 2.76***(0.54)
第Ⅱ因子：男性の育児・家事参加	2.78(0.51)	< 3.02***(0.52)	3.11(0.44)	< 3.29***(0.47)
第Ⅲ因子：女性の社会進出	2.03(0.42)	< 2.28***(0.41)	2.20(0.40)	< 2.58***(0.48)

注. *** $P < .001$

Table 14 育児・家事参加の度合別性役割観

	父親(夫)		母親(妻)	
	L	H	L	H
第Ⅰ因子：革新的(非伝統的)性役割	1.89(0.48)	< 2.63***(0.57)	2.39(0.46)	< 2.78***(0.64)
第Ⅱ因子：男性の育児・家事参加	2.52(0.50)	< 3.14***(0.54)	2.99(0.45)	< 3.36***(0.45)
第Ⅲ因子：女性の社会進出	2.10(0.40)	< 2.35***(0.43)	2.34(0.46)	2.47(0.51)

注. ** $P < .01$ *** $P < .001$

妻が職業をもつことは、当然、妻本人の性役割観と関係していると予想される。職業の有無によって妻の性役割観に有意差が見出されたことはこのことを裏付けたといえよう。さらにその夫たちも、配偶者が有職か無職かによって性役割観に有意差があり、有職の妻を持つ夫で3次元全てについて無職の妻を持つ夫より革新的である。しかも有職の妻を持つ夫群は、無職の妻以上に2つの次元ではより革新的な方向の値を示している。このように、有職の妻自身は勿論のこと、その配偶者も女性の社会進出を肯定することを含む革新的な性役割観を持っていることは、妻が職業をもつという現実の生活様式と夫婦の価値観とは一致・対応しているといえよう。

次に、育児・家事参加の高・低2群別に価値観を算出してみると(Table 14)、ここでも同様な方向の有意差がある。夫の育児・家事参加に得点が高い群の妻で性役割観は最大、それにその夫が続き、夫の育児・家事参加低群の妻はそれよりも低いという風で、男性の育児・家事

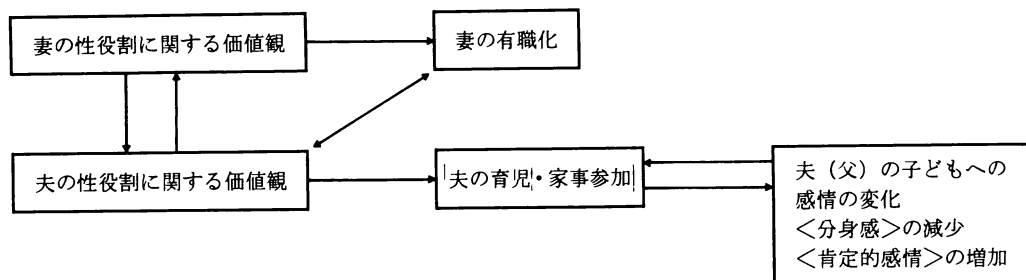


Figure 2 父親の感情の変化に関する要因モデル

参加についての「言行」一致が認められる。

以上の分析は、父親における親としての発達が育児・家事への参加経験と深く結びついている、またこの参加の度合は夫自身の性役割観をベースにしているといった形をなしていることを明らかにしている。父親(夫)の変化を中心に、本研究でとりあげ検討した諸要因の関係を単純化して仮説的モデルとして図示すれば、上のようになるであろう (Figure 2)。

性役割観については、わが国では性差(女性がより革新的)が著しい。しかし、他方、男女ともに若い世代での変化も著しく、特に<男性の家庭役割>を指向する意見は若い世代で多くなってきている(若松ほか, 1991)。また現実にも、ラマーズ法や家庭分娩など従来の病院での出産とは違ったお産革命と呼ばれる現象も広がりつつある(吉村, 1992)。

このような意識、現実両面での変化は、家族の中に子育て・家事についての役割構造の変化をもたらす。さらに本研究が明らかにしたように、役割構造の変化は家族のメンバー——とりわけ夫(父)と妻(母)の子どもへの感情に変化をもたらす。これをより長期的にみると、父・母の親としての経験の蓄積がやがてその人格的発達にも及ぶことが予想される。

従来、パーソナリティ、態度、能力などにわたって見いだされてきた性差、心理学的性差の多くは、性別分業を前提とする社会の中で男性と女性が異なる教育や役割をもってきたことの結果とみなしうる。それは、少なくとも、ある社会的状況の中では一種の最適化として機能してきたことは確かである。しかし、上述のような家庭・子育てをめぐる価値観及び現実の変化は、従来の両極に分化した心理学的性差を少しずつ解消させて行く可能性を予想させる。既にアメリカでは、アンドロジニー説が市民権を得つつあり、またそれを実証している現実がある(Spence et al., 1975)。これは、労働力の女性化を含む産業構造の変化と、高齢化と少子化を中核とする人口動態的变化を特色とする今日の日本社会においても、おそらく早かれ必然的に生じる変化の方向であろう。そしてこれは、従来の人格発達及び適応の理論の見直しを迫

る問題を提起することになる。

最後に、<親になること>による発達の問題を研究する方法論上の問題に一言触れたい。本研究は、現在既に親である父母を調査対象とし、「親となって変化した」か否かの自己認知に基づく評定を求めるという方法によった。この方法はいくつかの限界・問題を含む。1つは、被験者が親になる以前がどうであったかが測定されておらず、既に親である者自身の現在の主観的認知に基づいて変化の量が決められている。この点で客観的な変化量として捉えていない問題がある。これを解決するには、同一対象について親になる以前とその後親になった時点とで測定を反復する縦断的データをとることが一つであろう。この場合、いろいろな時点で同一対象に対して同一測度を用いて反復測定して、測度上の変化でみるということになるが、その際には人格発達面について今回用いた質問の内容・表現を根本的に検討する必要がある。<親になって変わった> <練れた> <人間的になった> <やっぱり親は違う>などと日常よく言われる。これらの表現は、親であることとさまざまな時点——例えば初めて親になった時、子どもが青年期になった時、などで、また、さまざまな経験——子どもが病気になった時、子どもが何か問題を起こした時、青年である子どもと対立・衝突した時など——と結びついて用いられており、極めて多様・広範なものである。こうした親となつての諸変化の内実を丹念に吟味することが、縦断的研究に有効・妥当な測度を開発する上でまず求められるであろう。

文 献

- Allport, G. W. (1968). 人格心理学, 上・下 (今田恵, 監訳). 東京: 誠信書房.
- 有野雅子・田中美和子. (1989). 母親の心理. 卒業論文 (未発表). 東京女子大学, 東京.
- Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Bronstein, P., & Cowan, C. P. (Eds.). (1988). *Fatherhood today: Men's changing role in the family*. New York: Wiley.

- Goodnow, J. J., & Collins W. A. (1990). *Development according to parents: The nature, source and consequences of parents' ideas*. Hillsdale, New Jersey: L. E. A.
- 原ひろ子(編). (1987). *母親の就業と家庭生活の変動：新しい父母像創造のための社会的研究*. 東京：弘文堂.
- 原ひろ子. (1993). 文化の中の父親. 柏木恵子(編著), *父親の発達心理学 — 父性の現在とその周辺 —* (pp. 152-177). 東京：川島書店.
- 働く母の会(編). (1990). *働きつつ育てつつ：保育所をつくった母たちの軌跡*. 東京：ドメス出版.
- 服部祥子・原田正文. (1991). *乳幼児の心身発達と環境：大阪レポートと精神医学的視点*. 名古屋：名古屋大学出版会.
- 柏木恵子. (1979). 母親の母性意識について — 一般の母親と母子寮の母親との比較を通して —. *母子研究* 2, 22-33.
- 柏木恵子(編者). (1993). *父親の発達心理学 — 父性の現在とその周辺 —*. 東京：川島書店
- 河野利津子. (1993). 親役割に関する研究：母親の就労と父親の家事・育児参加. *比治山女子短期大学紀要* 28, 89-96.
- 厚生省人口問題研究所. (1989). 第9次出生力調査.
- Lamb, M. E. (1975). Fathers: Forgotten contributors to child development. *Human Development*, 18, 245-266.
- 毎日新聞社人口問題調査会(編). (1992). *記録 日本の人口 — 少産への軌跡 — 家族計画世論調査・21回全資料*.
- 牧野カツ子. (1982). 乳幼児をもつ母親の生活とく育児不安. *家庭教育研究所紀要*, 3, 34-56.
- 牧野暢男・中原由里子. (1990). 子育てにともなう親の意識の形成と変容：調査研究. *家庭教育研究所紀要*, 12, 11-19.
- 松田惺. (1993). 父親の子どもの発達への影響. 柏木恵子(Kashiwagi, Keiko (Shirayuri College) & Wakamatsu, Motoko (Tokyo Woman's Christian University)). *"Becoming a Parent" and Personality Development: A Lifespan Developmental View*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1994, Vol. 5, No. 1, 72-83.
- The purpose of this investigation was examine parents from a lifespan developmental view. The present study first considered 1) how parents describe their development through care giving or learning from the child and 2) parental feelings about children and child-care. In addition, it compared parental development and feelings between fathers and mothers, as related to paternal involvement with child-care/housework, maternal employment and views on sex-roles.
- The main findings included the following; Several personality dimensions such as flexibility, self-control, ego-strength, different perspectives were identified as the content of parent development. Mother scored significantly higher than fathers on all the dimensions of parent developmental change. Mothers were ambivalent in terms of strong feelings of child particularly among the non-employed mothers. Greater paternal involvement in child-care was associated with more positive feeling toward the child, and with less negative attitudes towards child-care among mothers. Parents' views on sex-roles were associated both with fathers' active involvement in child-care and with mothers' career patterns.
- [Key Words] Paternal role, Parent development, Sex-role, Child-rearing, Lifespan development**
- 子(編者), *父親の発達心理学 — 父性の現在とその周辺 —* (pp. 267-308). 東京：川島書店.
- 三宅和夫. (1990). *子どもの個性*. 東京：東京大学出版会.
- 永井睦子. (1992). 共働き夫婦の家事遂行. *家族社会学研究*, 4, 47-77.
- 中山まき子. (1992). 妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識：子どもをく授かる>・くつくる>意識を中心に. *発達心理学研究*, 3, 51-64.
- 大日向雅美. (1988). *母性の研究—その形成と変容の過程—伝統的母性観への反証*. 東京：川島書店.
- 大前聡子・田中美穂・樋口晶子・三村伸子. (1990). 父親の心理. 卒業論文(未発表). 東京女子大学, 東京.
- Robinson, B. E., & Barret, R. L. (1986). *The developing father-emerging roles in contemporary society*. New York: The Guilford Press.
- Sameroff, A. (1975). Transactional models in early social relations. *Human Development*, 18, 65-79.
- 総務庁. (1991). *平成2年国勢調査報告第3巻第2次基本集計結果*
- Spence, J. T., Helmrich, R., & Stapp, J. (1975). Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of personality and social psychology*, 32, 29-39.
- 東京女子大学附属女性学研究所. (1988). *高学歴女性のキャリア・ディベロップメントに関する調査報告書*.
- 若松素子・小口菜採・柏木恵子. (1991). 妻の就業をめぐる夫と妻の社会的性役割. *東京女子大学紀要「論集」*, 42, 157-183.
- 山口典子. (1993). 子どもとの相互作用が父親の精神的成長に及ぼす影響. 白百合女子大学修士論文(未発表).
- 吉村典子. (1992). *子どもを産む*. 東京：岩波書店.

子どもをとりまく家族・社会・文化と「ジェンダー」との関わり

中山 まき子

(鳴門教育大学学校教育学部)

筆者は児童学・女性学・家族論の境界領域に身をおき、事例研究方法を用いて学際的研究のあり方を模索している。本稿では女性学の視点に基づき、発達心理学の一方を探索するための意見を述べてみたい。第1に女性学が提示したオルタナティブな視点を記述し、第2に女性学の視点から発達心理学の問題点と今後のあり方を提案する。最後にジェンダーという概念の重要性と、研究者が研究者自身の内なるジェンダー規範を意識化する必要性を述べたい。

女性学とは

まず女性学の概念・目的などについて、日本における女性学関連諸機関および諸団体の統一した見解を基にごく簡単に示しておきたい。『女性学 (Women's Studies)』とは、女性と男性の両者を含めた「人間の総合的な理解」を目的とする学際的な学問分野である。19世紀以来20世紀前半にかけて確立してきた諸学問分野においては、その担い手が男性中心であったことから、男性の視点で「人間」を考へることが学問であるとされ、女性の視点を包含することや女性を含めた人間を対象とすることが、等閑視されることが多かった。このような偏向や欠落を是正し、既存の諸学問分野の再構築を促すとともに、女性と男性と対等に位置付けて研究を進めることにより、新たな人間研究に理論や研究方法を創成することが女性学の目的である。また女性学は米国を中心に1960年代の大学改革、女性運動が結び付いて成立し(中略)1985年のユネスコおよび国連婦人の10年世界会議では「女性学は人間の現実のより完全な理解のための不可欠な学問」として(1991年作成未公開)その意味が積極的にうち出された。女性学研究では学際的方法が重視され、人間存在の諸相におけるジェンダー(女性と男性の文化・社会的役割)に見られる差異と同質性やセックス(生物学的性)としての差異と重複性の研究、特定文化におけるジェンダーとセックスの相互関係に関する研究を行う。

つまり女性学は、第1に近代科学に対するオルタナティブな視点を示し学問上のパラダイムの転換を図り、第2に研究する者自身の自己省察と自己の固定化された意識に対する変革を迫る。第3に文化・社会的コンテキストの中で形成される人間のありようを再検討するための研究方法と、理論構築を目指し進展してきた。

女性学的視点からみた発達心理学のあり方

発達心理学は必ずしも改革や運動と連動する学問領域ではないが、啓蒙的要素を強く示してきた。例えば1960

年代に Bowlby らが示した「母子関係の理論」研究 (Bowlby, 1969) 以降、子どもの発達において「母」や「母性」を重視する傾向はことさら強調された。そのため「母・子」のみに関した多くの研究と諸成果が育児書・専門家・マスメディアなどを通じて広く伝播され「子育て」や「子育て」に強い影響を与えてきた。女性学ではこれらをジェンダーの視点から問い直し、「母」のみを強調することは性別による役割分業の固定化を促すこと(ジェンダーの固定化)として批判した。またあいまいな「母性」概念が女性の特定の身体機能を表現する意味から思想を表現する意味までも包含する現象を分析し、そうした「母性」概念が女性だけでなく、男性をも子どもをも呪縛し、人間発達に関する多様な側面を見えにくくしてきた点を指摘してきている。近年では父親・きょうだい・社会的ネットワークなどに焦点を当てた研究が示され始め、日本でも「養護性」(小嶋, 1989)や「育児性」「次世代育成力」(原・館, 1991)といった概念を用いた研究も現れ始めている。だがまだその蓄積は少ない。発達心理学が母だけでなく、父やきょうだい、祖父母らをも含む家族員や社会的ネットワーク、さらには「社会のサポートシステム」に関する研究を推進することは、人間とジェンダーに関する検討をも促すことに通じる。

人間の発達とジェンダー規範

特定の文化・社会の中で形成された大人のジェンダー規範は、自ずと子どもにも影響を与える。子どもは様々な家族員や社会・生まれ育つ文化との関わりの中で認識の体系や概念を形成し知識を獲得しつつ成長し、同時に獲得されたそれらは、養育者や周囲の者たちにフィードバックされ彼らに影響を与える。すなわち育ちあいが繰り返される。その時「あるジェンダー規範」に基づいた人間同士の交流は、互いのジェンダー規範の獲得に重要な影響を与える。この点に関して心理学者 Luria はジェンダー規範によって形成される反応——例えば男の子が、男の子という規範的扱いを受けることで、子ども自身の自己イメージに影響を及ぼし、その結果子ども自身が当該文化のそのレッテルにあった反応をするようになること——を「ピランデッロ効果」と名付ける。「われわれ研究者は観察結果のうち、どれが性差の明確な事象であり、どれがステレオタイプの投影によるものかをえり分けることがいかに大切であるかを十分認識すべきだ」(Luria, 1978/1983)と警告を発している。

館は性役割規範(ジェンダー規範)によって子どもた

ちの判断力や意志表明力が強く規定されてしまっている場合に、発達の観点からは、この偏りのゆえに能力が未発達であると捉えられることがあり、この点に着目することが重要だと述べている。その上でジェンダー規範に縛られない能力開発の契機を与える教育の必要性を強調する(館, 1993)。

他方『発達心理学ハンドブック』における「性差の発達」の項目によれば、「セックス・ジェンダー」を表す語としての日本語は「性」一つであり、『生物・心理・社会的な領域にまでわたる性アイデンティティの全体性を表現し包み込むものとして「性同一性」という曖昧な日本語を用いることによってこそ人間の性の様相をよりよく把握できるとさえ考えられる』と記述されている。さらに生物学的性差が男女の差を生じさせる重要な証拠にはなりにくい例を示し、その上で、精神的には男性性も女性性もあり、かつこれは相互交換可能であり、また誰の心にも両性具有の可能性があると記されている(清水, 1992)。ではその時の精神の男性性と女性性とは何をさし、両者はどのように異なるのだろうか。もし異なりがあるとするなら、それは何(誰)によってどのようにつくられるのか。あるいはなぜ分化するのか、ないしは分化させてきたのか、こうした疑問を解決するためには、まさにジェンダーという概念が重要であり、セックスと区別し把握する試みが有効であると思う。また筆者は「性」という曖昧な日本語を用いるという発想のあり方が、今まで「母性」という概念をあいまいにしたまま「母子関係」の強調を促してきた姿勢に通じるのではないかと危惧する。

もし研究者自身が自らが暮らす文化・社会の中で己の内に形成されたジェンダー規範に対して鋭く内省的であり、かつ自らのジェンダー規範を相対化する努力を続け

るならば、その必然的結果として研究対象である相手(たち)の中に形成されたジェンダー規範に対しても無頓着にはなれないだろうと考える。研究者が自らのジェンダー規範を意識化することは、研究デザインや研究結果の分析に影響を及ぼすであろうし、家族員や文化・社会の中で形成され固定化されている「思い込みそのもの」を発見することを促すだろう。

女性学はまだ研究の蓄積は少なく、理論構築や方法も充分とは言えない。今後は実証に優れた発達心理学と女性学とを結合させた方法の開発や共同研究などが推進され、実りある人間理解への一助となり、社会的貢献が重ねられていくことが重要だと考える。

文献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. 1-3. New York: Basic Book. (黒田実郎他訳. 母子関係の理論. 第1-3巻, 東京: 岩崎学術出版社).
- 小嶋秀夫(編). (1989). *乳幼児の社会的世界*. 東京: 有斐閣.
- Luria, Z. (1983). 性とレットレル, そのピランデッロ効果. Sullerot, E., & Thibault, O. (Ed.). 西川裕子・天羽すぎ子訳. *女性とは何か* (下). 京都: 人文書院. (原著刊行年次, 1978).
- 原ひろ子・館かおる(編). 1991. *母性から次世代育成力へ*. 東京: 新曜社.
- 清水弘司. (1992). 性差の発達. 東洋他(編). *発達心理学ハンドブック* (pp. 856-869). 東京: 福村出版.
- 館かおる. (1993). 共生社会形成のための教育とは: 女性学の役割を中心に. *所報女子教育*, 16. 東京: 目白学園女子教育研究所. 1993. 6. 16受稿, 1993. 10. 13受理

論文における写像性

岩立 志津夫
(静岡大学教育学部)

心理学の研究論文は一般的に、実証的研究を、すなわち事実を忠実にかつ正確に捉えることを目指すと考えられている。発達心理学の研究も同様である。しかし、注意深く検討すればこの考えは実際の論文には必ずしも当てはまらない。論文は、事実から離れて一人歩きしていることが多い。この意見論文の目的は、写像性という視点からこの問題に光をあて、若干の私見を述べることにある。筆者がこの事柄に関心を持った契機は3つある。導入として、まずこれらの契機について述べる。

3つの契機

第1は、筆者が投稿した論文の審査での経験である。

その論文は時間的に連続した複数の実験を1つにまとめたもので、最初の投稿論文では複数の実験を実施時期にそって並べた構成になっていた。この論文につけられた審査者の多くのコメントの中に、「研究の提示順を変更してはどうか」という記述があった。その理由は別として、これは予想外の修正要求で、いろいろ悩んだ末、要求通りに修正した。そして、それに合わせて、時間の流れから生じたと推測される結果とそれに関する考察を論文から省いた。この修正が良かったかどうかは、単純には決められない。ただ、なんらかの形で、実際の実験順序と論文での実験順序が一致しないことを述べておけば良かった

たと現在は反省している。なぜなら、結果の一部には実験の順序効果が出ているので、公刊された論文のデータが後に評価される時、この修正は誤解を招くかもしれないからだ。

第2は最近審査した論文での経験である。その論文は2つの独立した研究から構成されていた。しかし、良く読むとその2つが独立したものとは思えなかった。具体的には、被験児の記述が2つの研究で一致していたからだ。おそらく、同一の被験児群に連続または同時に実施した1研究を論文では分けて述べていると予想された。そこでその疑問を述べ、そうならば2つの研究を無理に別のものとするよりも、一連の流れとしての1つの研究にまとめた方が自然で、読者に理解しやすいのではないかとコメントした。この経験が気になって、その後いろいろ調べたり、多くの人に意見を尋ねてみた。その結果、本来1つにされるべき研究を意識的に分け、複数の研究にしたり、別の論文として発表したりすることがかなり頻繁に、しかも論文技法の一種として行われていることがわかってきた。論文加工の理由が、研究の数を見かけ上増やすことで審査者にいい印象を与えたり、業績稼ぎを目指すことにあるとすれば、著者の個人的な理由から、事実が誤って理解される危険があるだろう。

第3は、1992年の11月に長野で開催された、日本教育心理学会でのシンポジウムの中での市川伸一と吉田章宏のやりとりである。フロアに居た市川は吉田に対して、「現象学的立場に立つ吉田氏が数量的なものを全面的に否定しないとすれば、容認できる数量的扱いとはどんなものか？」(筆者のまとめ)と質問した。それに対して「現実の姿が安心して見えてくる数字」(筆者のまとめ)と吉田は答えた。心理学では数字は物理学のように目の前の事実としての現実を正確に表現できる強力な手段と考える傾向がある。しかし、数字は嘘はつかないとしても、得られた数字が現実を正確に記述しているとは限らないし、限界もある。特に、いいかげんな研究態度の研究者が示す数字データにそのことが言えるかもしれない。

問題点と筆者の考え

上記の3つの契機に共通しているのは「写像性」の問題である。写像性とは、心理学的事実と研究論文の結果との間の関係を指す用語で、事実と結果の対応関係が高ければそれだけ写像性が高くなる。実証的研究とは、高い写像性をめざしながら事実を正確にとらえようとする研究といえる。理想の心理学的研究はかなり写像性が高いと言えるが、実際は事実の一部また一面を限定的に写

像的に捉えているに過ぎず、その写像性の程度も論文によってまちまちである。

それでは実際に論文を書くに際して、どんなことを考える必要があるのか？ここでは3つの留意点を挙げ、2つの提案をしたい。

3つの留意点とは、「実証の意味」「論文の役割」「追試の可能性」である。心理学は伝統的に自然科学に似た実証的な研究を目指しているが、この実証がどの程度写像性を持っているのか吟味する必要があるだろう。これが第1の点だ。第2に、論文は高い写像性を持って、事実を正確に捉えるという役割を担っている。このことを忘れると、心理学的研究は過去に離脱した思弁的な学問と同列になって、その存在理由を失い、他分野からの信用を失うことになろう。第3に、研究者は自分の研究が追試可能かどうか、もっと真剣に考えるべきだろう。特に、「手続き」でどんなことを書いたらいいか十分吟味する必要がある。論文では何を書くか公式がある訳ではない。研究者は論文では何を書くか常に自問自答してはどうか？

2つの提案の第1は、「論文は常に高い写像性を目指せ」ということである。理論的論文は必ずしも事実固执する必要はない、という意見がある。しかし、筆者は、発達心理学研究のような雑誌では理論的論文でも事実から余りに離れた議論は避けるべき、と考える。勿論、科学の発展にSF小説的な自由な発想や奇抜な発想が重要なことは事実で、日本の心理学が面白くないのは、そのような発想がこれまで高く評価されて来なかったことが一つの原因だろう。しかし、このような発想ばかりが高く評価され、研究自体の写像性が低くなれば、発達心理学研究の社会的重要性は失われるかもしれない。写像性の高い研究の蓄積によって、発達心理学者は社会的な発言力を増すことになるのではないだろうか？第2は、「論文にとって重要な、写像性をそこなう変更をしなければならない場合には、正直にその内容を書く」ということである。正直に書くことが場合によっては審査に不利に働くかもしれない。しかし、正直な記述がなければ、審査者も読者も事実を理解することはできない。契機1の変更は筆者にとって論文にとって重要な変更と言える。しかし、「論文にとって重要な」の意味内容については今後の検討が必要だろう。

最後に1つだけ述べたい。論文の写像性を高めることは、投稿者だけの努力事項ではない。審査者にとっての努力事項でもある。

1993. 10. 5受稿, 1993. 12. 22受理